

## 2020年3月 国際放送番組審議会

2020年3月のNHK国際放送番組審議会（第667回）は17日（火）NHK放送センターで8人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず最近の国際放送の動きについて説明があり、意見交換を行った。引き続き、「BIZ STREAM」と「Where We Call Home」について説明があり、意見交換を行った。最後に、国際放送番組の放送番組モニターと視聴者意向の報告を行い、会議を終了した。

### (出席委員)

委員長	神馬 征峰	(東京大学大学院医学系研究科 教授・国際地域保健学教室)
副委員長	河野 雅治	(日本国政府代表・中東和平担当特使)
委員	岡田 亜弥	(名古屋大学大学院国際開発研究科 教授)
委員	河合祥一郎	(東京大学大学院総合文化研究科 教授)
委員	佐藤可土和	(クリエイティブディレクター、(株)サムライ 代表取締役)
委員	佐藤たまき	(古生物学者、東京学芸大学教育学部 准教授)
委員	田中浩一郎	(慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科 教授、 (一財)日本エネルギー経済研究所理事 兼 中東研究センター長)
委員	中曾 宏	(株大和総研 理事長)

### (主な発言)

#### <最近の国際放送の動きについて>

- 世界中で非常に深刻化している新型コロナウイルスの問題への対応について、先週あたりからアジアやアフリカにある途上国でも感染者数が増えてきている。これから数週間にわたって感染がますます拡大するのではないかと思う。NHKワールド JAPANでは、手洗い、マスクの付け方などを伝えたとのことだが、メディアが貢献できることも非常に大きいと思う。人込みを避けたほうがいいのか、スマホ等の機器の表面にもウイルスが付着しているかもしれないなど、具体的に感染予防のために何をすべきで、何をすべきではないかをできるだけ多くの言語で、世界へ発信すれば、非常に大きな貢献ができるのではないか。

(NHK側) この問題については、発生当初から、さまざまな形で情報を発信するように努めている。指摘のとおり、多言語で今後もしっかりと伝えていきたい。

## < 「BIZ STREAM」 New Era of Trade Between Japan and EU

(2月8日(土) 23:10 ほか) について>

- 海外モニターからの報告に、「ニュース番組ではあるが堅苦しくない雰囲気が好きだ」とコメントがあった。そのとおりだと思う。ただし、気になったのは、コメンテーターが1人だけだった。さまざまな価値観があると思うので、できればコメンテーターの人数を増やせないか。コメントも一方的にコメンテーターがこれはこうだと言って、それに対して司会がそうですねと応じ、それでは次に行きましょうと、やや日本的な進め方だった。皆が合意する意見が1つだけあると考えるのではなく、さまざまな意見や価値観があることを模索していくほうが、今後のニュース番組のありようとしてはふさわしいのではないか。
- 事実と、その事実に基づいて何が変わったかを伝えており、日本人にとっても相当インパクトのある内容だ。海外で、例えばグローバリゼーションに対するアンチテーゼがいろいろ出てきている中で、自由貿易を維持することがある程度メリットを生んでいると伝えることは非常に価値がある。
- 日本とEUのEPA（経済連携協定）が1年たって、ウィンウィンの関係ができていくことがよくわかった。保護主義の反証としてEUとのEPAの成果が上がっているという点をもっと番組でアピールしてもいいかもしれない。

ワインと神戸牛というわかりやすい品目を選んでいった。驚いたのは日本のワインがある程度海外に進出していることだ。特に欧州はワインがひしめく競争市場だ。日本のワインが具体的にどういう点で独自の優位性があるのかももっと知りたいと思った。

牛の苦痛は可能な限り取り除かなければならないという基準がEUにあることが興味深かった。いずれにしても日本の農業製品がボリュームではなく、付加価値をもつ競争力のある輸出製品になりうるということがよく理解できてためになった。

新型コロナウイルスは感染が拡大して大変だと伝えるだけでは、ほかの報道機関との差が生まれない。もう一段掘り下げて、専門家の意見も踏まえた視点も伝えることが必要ではないか。
- 番組内冒頭で取り上げるトピックが3つあることが紹介されるが、その3つが実際の番組内で放送される順番と異なっていたので違和感があった。

コメンテーターのコメントにも少し違和感を覚えた。EPAで貿易の自由化が進んでいて、アメリカとは貿易摩擦が発生したけれどもヨーロッパの場合はそういった問題はないとコメントしていた。その際、アメリカからの米の輸入が日本では大きな課題になったということを言っていたが、果たしてそうだろうか。日米貿易であれば、自動車、牛肉、小麦などが課題になっていたのではないか。本当に米が大きな課題になっていたのかという気がした。

確かにワインやチーズは今回のEPAで関税が撤廃されたかもしれないが、実際、EUと日本の貿易で何が主要品目なのかを見ると、日本の最大の輸出品目は自動車であり、EUからは医薬品がトップだと思うが、2番目に大きいのは自動車だ。ワインは主要品目ではないような気がする。図を使って、EUから日本へこういうものが入

って来て、日本からEUへはこういうものが輸出されていると説明していたが、貿易の全貌を示すには正確でない印象も持った。全体像があって、今回のEPAでこういう分野が伸びた、と説明することがもう少し必要ではなかったか。

○ 番組はちょうどよい長さで、よく掘り下げられており、テンポよく進むのでとてもわかりやすかった。ただ、アメリカのニュース番組のようにとっても早いスピードで情報が流れ、あいさつも比較的短く、あっという間に終わったので、個人的には好ましいが、違和感を持つ視聴者もいるのかもしれないと感じた。

○ テンポがよく、違和感なく見る事ができた。長い番組ではないので、それほど深く掘り下げられないとは思いますが、日本のブランドについてはいろいろなトピックがあると思う。特に神戸牛については、他国が勝手にブランド名を使用しており、日本の信頼や利益を大きく損なっていると思うので、その辺りの話ももう少し聞きたかった。

○ EPAが発効して1年経過したタイミングで、この番組が作られたそうだが、合意する前から、EPAが成立したらこういう利点があると政府はずっと広報してきた。その一例として、GI（地理的表示保護制度）というその商品の原産地を特定する表示に焦点をあてて番組を制作したのは大変おもしろかった。しかし1年経過して、ある程度筋書きどおりにいったが、裏の面もあるという点も見なかった。実態はバラ色の世界でもないのではないかと疑念を持っており、例えば日本のワインをフランス人やイタリア人が喜んで飲むことはあり得ないのではないかと考えている。日本がいいワインを作れるようになったということは事実だと思うが、それが海外で定着するようになるかという点、まだまだ時間がかかるのではないか。そのほかにも、神戸牛はGIができたことで、きちんと表示されるようになり、兵庫県以外の土地で作られた肉は神戸牛ではないということが定着しつつあるのかもしれないが、ヨーロッパの人が、サシが多い牛肉を本当に好んで食べるのかなど疑問が出てくる。

自動車については、関税も全部下げるので、あまり問題にはならないと思うが、ワイン、日本酒、牛肉などは、1年経過したけれども、当初の想定通り輸出できていないのではないか。このような乗り越えるべき課題があると描くほうがドキュメンタリーとしてはよいのではないか。

EPAは互惠的で、ヒトやモノが自由に動く世界で成立したのだが、別のコーナーでは、ヒトもモノも動かなくなってしまう新型コロナウイルスを取り上げていて、痛烈な皮肉だと思った。長い時間をかけて交渉して成立したEPAが、新型コロナウイルスによって大きな影響を受けている。EUの中でさえ、さらなる閉鎖社会ができちゃっている。非常に皮肉な印象をこの番組全体から受けた。

○ 番組のコメンテーターは以前見た時は、日本人だったと思うが、今回は外国人が担当していた。日本人のコメンテーターであれば、同じようなことを言うだろうかと感じる場面もあった。

新型コロナウイルスに関しては、うまく伝えており、タイ、フィリピン、シンガポール、インドネシアの状況も紹介していたので、かなり意識されていると感じた。

(NHK側) コメントーターは、今回はアメリカ出身で大手新聞社の元記者だった。日本人のコメントーターも週替わりで1人招いていて、日本人としての視点も盛り込んでいる。この番組はトークが重要な要素になっているが、流ちょうに英語でずっと話し続けることができる日本人はそれほどいないので、人選はある程度限られる。コメントーターを2人招く場合もあるが、そうでないときもある。

企画については、前々から準備しているものが多いが、新型コロナウイルスのように想定外のものもあり、毎回、検討して決めている。

指摘のあった番組内容を紹介する冒頭部分はすでに改善しており、現在は実際の放送順にしている。

(NHK側) E P Aが締結されるときに報道するのはもちろん重要で、実際に国内の放送も含めてかなりあったが、1年経過したところで、その成果を検証した。そのほうが映像的にも効果的に成果を伝えられるのではないかと考え、今回のタイミングで、放送した。もう少し批判的な視点で、裏側についてもより深い取材が必要だという指摘は、しっかりと受け止めたい。

E P Aが単に関税を引き下げるものだけではなく、日本とE Uの両サイドがG Iを非常に重視していることが、取材により明らかになったので、ワインと神戸牛に焦点をあてた。日本のワインが本当にヨーロッパで通用しているのか疑問視する声があったが、実際数量としてはわずかだ。基本的には和食とともに飲んでもらう戦略をとっている。ヨーロッパのワインが日本に入ることだけではなく、反対に日本のワインもヨーロッパに進出している意外性に注目して取材をした。

外国産の牛が、神戸牛として売られている実態があることは、今後も取り上げていきたい。今回はE UとのE P Aの効果で、かなりいいかげんな形で神戸牛が取り扱われていた状況が是正されつつある点を取材した。今後も日本ブランドの農産品に関して取材していきたい。

## < 「Where We Call Home」

### The Daily Struggles of a Pakistani Used Car Dealer

(2月24日(月) 10:30 ほか) について>

- すばらしい番組で、内容も伝え方も非常に良かった。
- 番組のテーマは「共生」だと思うが、ときどきそのテーマが見えなくなるところがあった。モスクで皆が一緒に食事をしたり、ピクニックのように屋外で食事をしたりする一方で、外国人の迷惑駐車に対して、地域の日本人が苦言を呈していた。駐車マナーの悪さを我慢することが、共生を意味することになるのか。その点に少し疑問を感じた。

「BIZ STREAM」と「Where We Call Home」を比べると、エンドクレジット

トの名前の表示方法が異なっている。日本人の名前が、「姓一名」の順なのか、「名一姓」の順なのか。以前は英語式で、「名一姓」の順で表示されていたが、突然「Where We Call Home」から、今推奨されている日本式の「姓一名」に変わっている。表記の方針が変わったと理解すればよいか。

(NHK側) 人名表記の順序だが、NHKでは2020年度の放送から、名前をローマ字で表記するときには、「姓一名」の順で表記することにした。NHK職員の名前は「姓一名」の順になるが、ゲストや外部の方などで、「名一姓」の順で活動している方については、個別に対応している。視聴番組の「Where We Call Home」は、2月に放送したパイロット版だが、4月以降に始まる番組なので、新しい方針に従って「姓一名」としている。

- 大変いいテーマだった。日本は、労働人口が総人口よりも速いペースで減少している「人口オーナス」の社会だ。このような社会で、日本が持続的な経済成長を続けていくための選択肢は、労働生産性を上げる、労働参加率を上げる、そして外国人労働者を増やすの3つしかないと考える。労働生産性は劇的に引き上げることは難しい。日本の労働参加率は、特に若い女性の場合は80%に達しているもので、米国よりも高い。スウェーデンでも90%なのでいいところまで来ている。そうすると外国人労働者を増やすことが必然だと思うが、そのときに課題となる「共生」をテーマにした番組で非常に興味深く見た。

番組では、日本にいる外国人労働者数は280万人だと言っているが、私が認識しているのは2019年末の数字で166万人だ。このギャップは何だろうか。いずれにしても2017年の外国人労働者の純増数は22万人で、日本はフランスに次いで、世界第4位の移民大国に実質的にはすでになっている。

その上で番組について最初に思ったのは、日本における共生が、私がイメージするよりもずいぶん円滑に進んでいる点だ。モスクができて食堂でもハラル料理が出たり、地元の人たちといっしょにイスラム料理を食べたりしていた。日本の地域社会でイスラム文化が、かなり受容されていることに新鮮な驚きを感じた。

2つ目に感じたのは、中古トラックの輸出事業がずいぶんダイナミックに変化しており、これは地域経済に貢献しているのではないかという点だ。

3つ目に感じたことは、日本経済の持続的成長には、外国人との共生がやはり必要であるということが、改めて確認できた。

もう少し知りたかったのは、駐車場の混雑だけが簡単に紹介されていたが、地域社会との摩擦の事例はほかにはないのか。あるいは共生するうえで、外国人の家族から見る課題みたいなものがあれば、それを知りたいと思った。

- 多文化共生については、大きな関心事なので興味をもって見た。しかし、取材されていた人が、20年日本で暮らしてきたのであれば、地域社会と交流する場面がもう少しあったほうがよいのではないかと感じた。モスクの場面では外国人の男性だけが、大勢祈っていた。取材を受けていたパキスタン人の男性が交流している日本人は、食事処の女性1人と一緒にランチを食べている男性が1人描かれるくらいで、案外孤独なのかという印象を受けた。妻が日本人なのだから、もう少し地域の日本人社会とのつながり

りが番組の中で見えたほうがよかったのではないか。

- とても興味深く見た。モスク周辺で外国人たちの駐車マナーが悪い話は、住民が我慢して話が終わってしまっていた。もし、モスクを訪れる人たち自身が何らかの対策をとっているのならば、それに言及したほうがよかったのではないか。
- 興味深く見ることができたが、最後の7分半の「WORKPEDIA」のコーナーでやっていた酒造りの話が少しわかりにくい気がした。演出のしかたも違うので、気を抜いて見ていると違う番組が始まったような感じがある。また1つのコーナーとしては長いかもしれない。パイロット版ということで今後変わるかもしれないが、番組全体のまとまりがなく、もったいないと思った。取り上げているトピック自体はおもしろいが、見せ方にもう少し工夫があるとよかった。
- 共生社会とは、外国人が日本へ来る場合もあれば、その逆もある。時間をかけて相互理解が進むのは大変いいことだと思う。この番組で目を引いたのは、中古車販売や酒造りの話にあるように、交流しながらも実はしたたかにビジネスチャンスを探っている外国人と日本人がいるということだ。こうした国際交流は非常に結構なことだと思う。ビジネスチャンスとしてうまくウィンウィンでやっていく動きが日本にあることをこの番組を見て感じたので、非常に新鮮で興味深かった。そういうところを紹介していることを評価したい。
- 最初の中古車の話と2番目の酒造りの話は、次元が全然違う感じがして、これを1つの番組として見たときの統一感みたいなものが少し崩れていると感じた。

(NHK側) 今回は現場も手探りで作ったところがある。共生についてももう少し掘り下げることができたかもしれない。

視聴者は外国の人なので、外国の人にとっての共生とは何か、各国のテーマ性をはっきりさせるべく、活発に議論を進めているところだ。

(NHK側) 「共生とは何か」という問いかけがこの番組のいちばん大きなテーマだと感じた。ただ友だちとして仲良くする共生もあるが、それ以外にも、経済的に自立していて、地域の経済に貢献したり、あるいは日本人ができなかったことを日本の社会に持ち込んでくれたりする共生がある。共生はきれいごとばかりではなく、自分の足で立って経済活動を成り立たせていることも重要だと痛感した。

番組の雰囲気が割れているのではないかと指摘があったが、前半のドキュメントパートと、後半の「WORKPEDIA」は、確かに全く演出方法が異なっているが、あえてそうした面もある。われわれがドキュメントと捉える前半部分と、実際日本で働いている外国人が自分の職場をどう思っているのか、どんな上司や仲間がいるのかを、その人の目線で伝えてもらう「WORKPEDIA」のコーナーを後半にする構成で制作した。バラバラに見える点については、今後どうやって接合していくか検討したい。

番組が示したおよそ 280 万人という数字は、労働者だけではなく、日本に一定の在留資格を持って暮らしている外国人も含んだものだ。

## 2020年2月 国際放送番組審議会

2020年2月のNHK国際放送番組審議会（第666回）は18日（火）NHK放送センターで8人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず最近の国際放送の動きについて説明があり、意見交換を行った。引き続き、「DESIGN TALKS Plus: Design Hunting in Hyogo」、「MEGAFIRES: Engulfing Forests and Cities - Part 2」について説明があり、意見交換を行った。最後に、国際放送番組の放送番組モニターと視聴者意向の報告を行い、会議を終了した。

### (出席委員)

委員長	神馬 征峰	(東京大学大学院医学系研究科 教授・国際地域保健学教室)
副委員長	河野 雅治	(日本国政府代表・中東和平担当特使)
委員	岡田 亜弥	(名古屋大学大学院国際開発研究科 教授)
委員	河合祥一郎	(東京大学大学院総合文化研究科 教授)
委員	木山 啓子	(特定非営利活動法人 ジェン 理事・事務局長)
委員	佐藤可土和	(クリエイティブディレクター、(株)サムライ 代表取締役)
委員	田中浩一郎	(慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科 教授、 (一財)日本エネルギー経済研究所理事 兼 中東研究センター長)
委員	平子 裕志	(全日本空輸(株) 代表取締役社長)

### (主な発言)

#### <最近の国際放送の動きについて>

- 世界的に関心を集めている新型コロナウイルスについて、国際放送ではニュースで取り上げているが、こうした緊急事態の場合、NHKの国内放送の特集番組をすぐさま国際放送に展開するべきではないか。

(NHK側) 新型コロナウイルスについて報じる国内放送番組の中には、国際放送では使えない映像を使っているために著作権などの問題で、外国では放送できないものもある。しかし緊急事案ということもあり、今後特集番組を制作するなどの対応を考えていきたい。

#### <「DESIGN TALKS Plus: Design Hunting in Hyogo」

(1月9日(木) 9:30 ほか) について>

- 伝統技術の伝承は非常に大きなテーマだ。先日、ドイツへ行った時、近年はドイツでも職人の後継者が不足しているという話を聞いた。それだけに、この番組ではどの



エピソードでも技術がきちんと受け継がれていることがわかり感心した。

かやぶき屋根の技術を紹介したエピソードでは、オランダの建築技術も融合しているということで、日本の伝統技術と外国の伝統技術の融合が新しい価値を生むということが良く分かった。この番組は国内でも放送されている。国内の視聴者にもぜひ見ていただきたいと思った。

兵庫県を取材先に選んだ理由の1つに南北に海があるという。それならばエピソードの中で、1つぐらいは日本海側の地域が選ばれてもよかったのではないかと。また、基本的に日本語の会話を英語で吹き替えているが、ところどころに字幕が出てくるので、統一したほうがいいのではないかと。

○ 2020年度の国際放送番組編集の基本計画は、案の段階で委員から意見があった。NHKの国際放送では今後、SDGs、つまり持続可能な発展や地球温暖化など、グローバルな課題を扱った番組を積極的に制作していくということだったので非常に良いと思った。

○ 番組で紹介されていた相良育弥さんや小林新也さん、堀内康弘さんらのクリエイターは、非常に質の高い仕事をされている方たちだ。非常に丁寧にデザインと向き合っており、また、地域のことを大切に思っている様子が番組からよく伝わった。

○ 30分の番組の中に3つの取り組みが紹介されたおかげで、とても広がりを感じられた。日本中でこういう動きがどんどん出てきているような印象を持つことができ、非常に勇気づけられた。

ただ、シリーズものとして県ごとに紹介していくのであれば、県や地域との関わりの中でこそこの技術があるという説明のほうが理解しやすい。地域との関わりをもっとしっかり強調したほうが地域特集であることの意味がより伝わったのではないかと。

○ 非常に感銘を受けた。日本の伝統技術が国外のクリエイターにも訴える力を持っているということは、これまでもさまざまな番組で取り上げられてきた。今回は若いデザイナーが伝統に新たな価値を加えて、技術の継承も含めて伝統を新たに作り上げていく、そこに力点を置いた番組として受けとめた。

今後は、地域に注目することの重要性を皆が認識し共有できるような番組を希望する。地域の活性化のためになる取り組みを今後も続けてもらいたい。

○ 職人に対して敬意があり、職人技に大きな価値を見出している国には世界的に見るとドイツと日本がある。それ以外の国では職人の社会的地位が確立していないところも多い。芸術の域に達しているといっても過言ではない日本の匠の技を若い人たちに伝承しようとトレーニングをしながら、新たなクラフトワークを生み出すインキュベーターの役割も果たしている。技能がAIに取って代わられるのではないかと懸念がある中で、そうでもないかもしれないという期待感を抱いた。

かやぶきの屋根は非常にきれいで、アートとして見ても評価できるのではないかと。また、いろいろなデザインのはさみが出てきて、実際に切るところを見せたのも興味深かった。素材によって切る音も違えば、切り方も違うというが、小林さんの説明に

よるとユーザーに対する思いやりであるということだった。相手がどう使ったら使いやすいだろうかと考えていると、多様なデザインにつながっていく。それが技能の本質をうまく捉えていて感心した。

- 最初から最後まで兵庫県の特集であるという意識が全くなかった。伝統を守りながら新しい技術を取り入れて、新しい時代に挑戦するという考え方は兵庫県に特有の話ではないし、県や国を越えた国際性のある話で、ローカルでもありユニバーサルでもあるという点に訴求力があつた。

外国でも同じことをやっているところはあると思うが、抱えている問題は共通している。すばらしいものを作っても、大量生産することができて、利益を生むかというのと難しい。どうやって職人が生活していくかというのは常にある課題だ。この番組に大きく引かれた点は、そういうことでもいいじゃないかと訴える力が強いことだ。自分はいいものを作っているのだという自負や自信が番組の中で非常によく表れていた。ただかたくなに伝統を守っているのではなく、新しいものを作っているんだというプライドが大量生産やAIの世界への反論として番組にしたところに価値がある。

- 「デザイン・ハンティング」というタイトルの番組だが、ハンターは誰か。NHKスタッフがハンターである場合と、スタジオにいる2人の外国人プレゼンターがハンターである場合とで違いが出てくるのではないか。もし後者であれば、日本人には見えない意外性という要素が出てくるのではないか。

デザインという言葉はもう日本に定着していると思うが、70代、80代の職人の方は「デザイン」という用語を使っているのか。これらの伝統技術は、何百年も続いているものもある。その場合、どういう言葉でこういう活動が引き継がれて来たのか、それをデザインという言葉に統合していいのかが気になった。

- (NHK側) まず、ハンターは誰かということだが、取材の項目を選ぶ制作者と言えるのではないか。プレゼンターの2人は、スタジオにゲストを招いてさまざまなテーマを掘り下げる番組の進行役で、番組では彼らにそれぞれの視点を交えながらレポートしてもらうというスタイルをとっている。

「デザイン」という用語についてだが、この番組では誰もがイメージしやすい従来の表象的な概念とは別に、物事の仕組み、誰に何を届けるか、生産者のコミュニティーをどう作るかといったことをトータルしたものが「デザイン」だと考えている。それがどういう形で世の中に伝えられているかを、「Design Hunting」のシリーズと通常スタジオ収録の両方で紹介している。

回は3つ題材があり、重点的に紹介する人は吹き替えにし、それ以外の人たちは字幕にした。どの取材対象者を字幕で紹介するかは、毎回、検討しながら進めている。

地域性については、エピソードによって、いわゆる地域色が濃くなることもあるし、一見薄く感じられるものもある。

- 伝統技術の伝承という取り組みは、国内各地で行われており、うまくいっているも

のもあるし、そうでないものもある。番組で取り上げたのはすばらしい事例だった。こういった事例が今後も数多く紹介されることで、より視聴者の理解が深まり、職人にとってもチャンスが生まれるということは重要なことなので、今後も番組でどんどんデザインが持つ力について紹介してほしい。

## < 「MEGAFIRES: Engulfing Forests and Cities - Part 2」

(1月26日(日) 8:10 ほか) について>

- メガファイア（巨大火災）が世界各地で起きていることについて危惧していたが、地球全体でどのような状況になっているかやメカニズムと問題点が番組を見ることでよくわかった。  
最後のところで「メガファイアとの闘いは続いています」という表現があったが、闘いに勝つための有効な手立てがあまり紹介されていなかったと思った。もう少し希望が持てる番組の締めくくりがほしかった。
- 圧倒的な力を持った番組だ。「近くにいる火の熱さを感じる」というナレーションには視聴者にも伝わってくるような迫力があつた。また、木から大気中に水分が発散されることによって雨が降るといったメカニズムもとてもわかりやすく説明されていて非常に教育的な番組だと感じた。フランスとの国際共同制作が非常にうまくいったのだと思うが、もし特徴的なエピソードがあればぜひ教えてほしい。  
Part 1もPart 2も拝見したが、あまりにも圧倒され絶望感が残った。スウェーデンのグレタ・トゥーンベリさんの“The Earth is on fire”（地球は火事だ）という言葉はその通りだ。大人は貪欲さによってどんどん木を燃やしているというイメージが残り、今後対策ができるのだろうかと思った。
- 番組中で炎に包まれ燃えている森林の様子やシベリアの永久凍土が溶けている様子が紹介されていた。それぞれが現在の温暖化対策だけでは大いなる計算違いが生じる危険性があり、それに対して警鐘を鳴らしていると受け止めた。その点ではとても有意義であり、また着眼点が非常に優れた番組だと思った。  
一方で、Part 1の冒頭で沖縄県の首里城が炎上するシーンが出てきた。確かに燃えているという点では同じだが、他のものとはちょっと意味合いが違うと思った。首里城の炎上の映像をPart 1に入れた意図がわからなかった。
- 警鐘を鳴らすという意味ではよい番組だった。首里城が炎上するシーンやフランスのノートルダム寺院の火災のシーンも出てきたが、大規模森林火災とは趣旨が違うのではないか。誤解を招くことにならないか心配だ。  
Part 2 に関しては、ちょうどCOP 25が開催された後でもあり、地球温暖化対策、あるいはCO<sub>2</sub>対策というのは全世界的なテーマなので、なぜ森林火災が起きるかというメカニズムを非常によく説明できているという意味において、教育的な番組だ。

冒頭でブラジルの農夫が、家族を養うために、経済優先で環境規制を緩和している大統領を支持すると語っているインタビューがあった。アマゾン火災の背景にあるブラジルの現状を番組で説明したかったのだと思うが、番組の意図が少しわかりにくくなると感じた。

また、森林火災の原因となっているパーム油の問題として、番組の中で消費者がキーになるという発言があり、持続可能な商品をもっと買おうと結論付けている。しかし消費者が本当に問題解決の鍵なのかと疑問に思った。経済優先という供給者側の論理が優先するとCO<sub>2</sub>の問題などになかなか踏み込んでいけないというジレンマがあり、この点についても、番組で警鐘を鳴らすような締めくくり方をしてほしい。

- どのような経緯でフランスとの国際共同制作につながったのか。こうした国際共同制作は、ほかの国とも行っているのか。番組の中で、パートナーであるフランスの事例はなかった。取り上げられていたのはカナダ、カリフォルニア、スマトラ、アマゾンなどだったので、これらの国々のプロダクションとの共同制作は考えられないのか。より国際的にこの問題について訴えることができ、効果的に意識を高められるのではないか。国際共同制作の方針とパートナーの選び方について、NHKの考えを聞きたい。

国際共同制作でありながら、専門家は日本人の方が多かったように思った。より幅広い立場からの専門的見地を伺えるとよかったのではないか。近年の教育現場では、SDGsに関する取り組みについて教えているところが多い。ぜひ教材として、この番組を国内外で見てもらえるといいと思う。

- この番組によってメガファイアの発生メカニズムが理解でき、非常に興味深く見たが、結論はどうなっているのかと、番組の終わりを数回見直した。地球規模の課題なので簡単な答えはないと思うが、それでは、どうすればいいのかと気になった。例えば巨大地震や戦争など、答えがすぐに出ないようなものでも、少しでも防災意識を高めようとか戦争はいけないとか、番組を通じて呼びかけることで、見ている側は気持ちを切り替えることができる。メガファイアが起きないようにする対策はないことはわかっているが、番組を制作する上で、結論までの持って行き方をどう考えていたのか聞きたい。

- きれいな解がないからこそ、このような番組ができると考える。COPなど環境会議が開催されているが、何も前進しないので、このような番組に価値がある。この番組は非常に多面的にこの問題について取り上げている。メガファイアとひとくくりにしても問題が複雑で解が見つからなく、番組を見た後に満足感も得られない。それは問題の本質も同様だからだと私は思う。例えば森林火災とひと言で言っても、自然に起こってしまう火災もあれば、人為的な火災もある。

ロサンゼルス郊外で、木が触れるだけで火災が起きたり、モスクワ郊外での地面の下が石炭のようになっており、火が下から上がってきて自然災害的に森林火災が起きる。オーストラリアのケースも自然災害だ。一方でブラジルのアマゾンやインドネシアのスマトラ島などのように、人為的に燃やして火災となるケースもある。市民レベルでは、生活のために森林を燃やし、パームオイルを作っているし、国家レベルでも

森林開発をすべきだという考えがある。まさに経済の問題でもあるから問題は複雑になる。

さらに言えば、これは政治の問題でもある。ブラジルの大統領は、自国に巨大な森林があるので、少しぐらい燃やしても問題がないのだと発言している。それはある種政治の世界の問題だ。

また、森林で火災が起こるとCO<sub>2</sub>が増えて地球の温暖化が進み、その結果、森林火災がさらに起こる、というある種の悪循環に陥る可能性がある。例えばスマトラでは火災による煙害で空気が汚染されて、呼吸器疾患の人が増えている。また、オーストラリアのように、さまざまな野生動物が死に、貴重な生態系が変わってしまうという問題もある。森林火災はいろいろな側面がある。それゆえこの番組を見ただけではすっかりしないのは当たり前で、むしろそうあってはいけないような問題だということをお話しているのだと思う。

○ この番組に、防災 (BOSAI) というキーワードをもっと入れてもよかったのではないか。

(NHK側) フランスとの国際共同制作の経緯だが、4年前にNHKワールドで「大水害」というシリーズを同じフランスのプロダクションと制作した実績があり、先方のプロデューサーとの関係から今回の共同制作が実現した。このような国際共同制作は2年ぐらいかけて準備をする。今年、これほどまでにオーストラリアの森林火災がすさまじいものになるとは想定できなかったが、当時もカリフォルニアやヨーロッパでは大規模な森林火災が深刻化していた。この問題は単に森林が燃えてしまうということだけではなく、地球温暖化を加速させる部分もあるということで、また一緒にチームを組んで番組を制作することになった。

フランスにはサイエンスドキュメンタリーというカテゴリーがあり、メカニズムをきちんと科学者の声で解明し、伝えるという考えが非常に強い。日本人の科学者ばかりだったという意見があったが、Part 1 ではほとんど日本の科学者が出て来ず、フランスの科学者が出てくるという構成になっていた。

番組の終わり方にやや希望がなく、メガファイア対策についてもっと深められなかったかという意見について、SDGsの考え方においては、「作る責任」と「使う責任」とは常にセットで表裏の関係である。視聴者は消費者であることが多いことから、身近な問題であると強く感じてもらうために、番組の最後は、消費者の責任ということにやや重心を置いた構成になった。ただし企業に対しては厳しいまなざしを持って制作した。またJAXAなどが森林の監視をしていることなどを番組の中に入れて、何らかの対策があるところも強調したいと考えていたが、自然の猛威の前では、人間の知恵はまだまだ及ばないという現状を最後に提示する形になった。

首里城やノートルダム寺院の火災の映像を使ったことについては、自然発生的なものであれ、人為的なものであれ、いったん炎が勢いを増してしまえば手に負えなくなるということの象徴的な事例として映像を使用し

た。またメガファイアは外国では非常に関心が高く、タイムリーなテーマだが、日本人は火災よりも水害のほうが関心が高いため、「メガファイア」というテーマではなかなか番組を見てもらえないと考え、火の勢いを象徴する事例として、これらの映像を使った。

なお、Part 1 では防災を意識した構成になっており、地震火災も取り上げている。日本では木密地域と呼ばれる木造住宅が密集している地域が課題になっている。今回は東京の北区周辺を取材した。いったん火がついてしまうと非常にまわりが早いので、ふだんからどのように備えるべきかということ、地元の自治体の方と火災の専門家である東京大学大学院の廣井悠准教授と一緒にその地域を歩くパートが、Part 1 には入っている。

- この番組は教育的な価値もあると思うので、ぜひより多くの人々に見てほしい。番組で取り上げられたブラジルやインドネシア向けに多言語化して放送することはできないのだろうか。

(NHK側) これまでも対象国を考えながら多言語化し、インターネットで配信する取り組みを進めている。また、アメリカの大学に配信するプラットフォームに、NHKワールド JAPANの番組を配信することも始めており、大学の先生が興味を持つような番組の配信を進めている。この番組が配信の対象とするかは未定だが、さまざまなニーズに対応する施策を進めている。

- 「MEGAFIRES」は、Part 1とPart 2の両方とも非常によくできているので、60分ぐらいの1つの番組にしてはどうか。一本化して日本語版、英語版、多言語版を制作すれば世界中の人にいろいろなことを考えてもらえるきっかけになるのではないか。

## 2020年1月 国際放送番組審議会

2020年1月のNHK国際放送番組審議会（第665回）は21日（火）NHK放送センターで8人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず最近の国際放送の動きについて説明があり、意見交換を行った。引き続き、「A Stranger in Shanghai」について説明があり、意見交換を行った。最後に、国際放送番組の放送番組モニターと視聴者意向の報告を行い、会議を終了した。

### (出席委員)

委員長	神馬 征峰	(東京大学大学院医学系研究科 教授・国際地域保健学教室)
副委員長	河野 雅治	(日本国政府代表・中東和平担当特使)
委員	岡田 亜弥	(名古屋大学大学院国際開発研究科 教授)
委員	河合祥一郎	(東京大学大学院総合文化研究科 教授)
委員	木山 啓子	(特定非営利活動法人 ジェン 理事・事務局長)
委員	佐藤たまき	(古生物学者、東京学芸大学教育学部 准教授)
委員	田中浩一郎	(慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科 教授、 (一財)日本エネルギー経済研究所理事 兼 中東研究センター長)
委員	中曾 宏	(株大和総研 理事長)

### (主な発言)

#### < 「A Stranger in Shanghai」

- － Part 1 (12月28日(土) 8:10 ほか)
- － Part 2 (12月29日(日) 8:10 ほか) について>

○ われわれ日本人は芥川龍之介がどんな人物であるかは承知の上で見ていると思うが、海外の人が一般的にどこまで理解しているのか少し気になった。特に、芥川がなぜあの時期にわざわざ新聞社の特派員として上海に渡ったのかということについて、単に中国の文学、古典に造詣があり、昔から関心があったということだけで、渡航の動機が十分説明されているのかと気になった。

激動の時期を迎える中国の様相がいろいろ客観的に描かれており、芥川の間を通して書かれたことが再現されている印象を受けたので、それは非常に好感が持てる。

上海での滞在時間がだんだん長くなり、特にPart 2では、心理的に思いつめられていくような神経質さが表れていることに、非常に感心した。

○ 非常に興味深く視聴した。12月30日(月)に放送された日本語版のタイトルは「ストレンジャー ～上海の芥川龍之介～」(総合、BS4K、BS8K 21:00 放送)と芥川の名前が入っているが、英語版のタイトルは「A Stranger in Shanghai」で、芥川の名前がない。なぜ副題に芥川の名前を入れなかったのか尋ねたい。

映像は非常にきれいで、1920年代の上海の混沌とした様子、雑多な感じ、非常にエネルギーはあるけれども退廃的な面もあるという時代の空気感というものを、非常によく捉えて再現していたと思う。ストーリーが芥川の紀行文「上海游記」に基づいて作られていると思われ、ところどころ文も出てくるが、それが「上海游記」からの引用であるのか、そうでないのかが若干わからなかったので、この滞在を踏まえて書かれたものを引用していることがわかるようにするといいいのではないかな。

さらに、日本語版では「実話をもとにしたフィクションです」と最後にキャプションで出てくるが、英語版はそれがなかったので、フィクションなのか、ノンフィクションなのかあまり明確でなかったように思う。

芥川の世界観に、おそらくこの上海での4か月の滞在が非常に影響を与えたのであろうということは想像に難くないが、最後のナレーションで、その後、6年後に自殺したことが説明されて、この上海での経験が彼の精神世界にどのような影響を与えたかということについて、もう少し説明があると、上海での滞在意味が深く理解できるのではないかな。

- 途中途中で見出しのように文字が出てくることに関しては、章立てのように、これから次の話が始まるということで、構成として興味深かった。芥川に関しては、もう少し説明してほしいと感じた。

ドラマに登場する差別的な発言や売買春などをどのように捉えて見ればいいのか少し戸惑い、これを国際放送であえて放送する意図を伺いたい。芥川が6年後に自死したことを伝えたことも含めて、どのように結び付けて考えて、どのように捉えて見てほしいという意図で放送されたのか。

- 先に国内向け放送で見ていたが、大変すばらしい出来だという感想をまず持った。渡辺あやさんの脚本が大変すばらしく、上海での撮影もすばらしい出来栄で、当時の政治の混乱というのが非常によく描かれている。この当時の芥川が上海を訪れて何を経験したのかということが、ドラマを通してわれわれも追体験できた。

芥川役の俳優の演技は、神経質な様子はうまく表現されていたが、もう少し突っ込んだ、芥川として彼なりの演技を見たかった。

このドラマを外国の方が見るときに気になるのは、例えば「先生のファンです」と言ったときに、芥川が、「何だろう、羅生門かな、杜子春かな」と言うが、「杜子春」をどれほどみんなが知っているのか疑問だ。「羅生門」は海外では有名だが、それは映画化されたものが有名なので、芥川龍之介という作家について、また、芥川龍之介という作家が主人公になっていることの意義について、もう少し枠づけがあってもよかった。

- 英語版は、日本語版にはないちょっとした説明がドラマの前に付けてあったが、おそらく日本人は芥川龍之介をととてもよく知っているが、海外の方は必ずしも知っている訳ではないので、あのような説明は必要だったと思う。

映像がととても美しかった。当時の上海の様子は、芥川が書いたものを通じてしか知らないが、とても雰囲気が出ており、芥川がさぞショックを受けただろうということも、何となく感じる事ができた。



内容については、実話、芥川のエッセーに出てくる話、あるいは小説に出てくる話と、脚本家の方が考えたフィクションを組み合わせで作ってあるようだが、ルールーというキャラクターと、ルールーが死んだ後のクッキーの話は完全なフィクションではないか。玉蘭というしょう婦が愛人の血を吸ったクッキーを食べるという話はあるが、ルールーに関する話は芥川の実話にはないので、それがドラマの中のとても重要な役割を果たしているという構成に少し違和感があった。

- 全体としては、清朝が崩壊した後の大戦間の混乱した中国を、日本人、特に芥川龍之介という非常にみずみずしい感性を持った作家の目を通して描写したところが、非常に魅力的な作品に仕上がっていると思った。魔都と言われた当時の上海の雰囲気再現することにこの番組は非常に成功している。これまでも欧米を含めたいろいろな映画やドラマで、この時代の上海が舞台になってきた。そのような上海を見慣れた視聴者にとっても、この作品に描かれた上海は非常によくできている。しっかりとした時代考証、ディテールまでこだわった町並み、裏路地の風景、登場人物の服装が、それを可能にしたのだろう。

また、キャスティングについても、日本人も中国人もよかった。特に中国側の緑牡丹、林黛玉は混乱を生き抜くたくましさを、玉蘭、ルールーは、セリフはひと言もないが、当時の中国の置かれた状況を、せつなく悲しい表情で見せたと思う。

台詞の英語字幕も、コンパクトでうまく表現されていた。挿入されている英語のナレーションも無駄がなく、工夫された表現だった。全編を通じて流れていたピアノの旋律がドラマの質感を高めていると感じた。

おそらくこのドラマの肝だと思うが、中国人との交流の中で芥川の感性がよく表現されていた。交流を重ねながら、芥川の中国観が滞在中に次第に変化していく様子が描かれている。いくつか印象に残ったシーンがあるが、最初、中国の女性のどこが好きかと聞かれて耳と答えるくだりは、原作でもおもしろいし、ドラマでのやり取りも、軽妙で秀逸だった。中国の現実とは、彼が慣れ親しんできた中国のイメージとは裏腹に、その当時は絶望の淵にある。貧困に苦しむ庶民、章炳麟とか鄭孝胥などの賢人たちの話から、中国の学問、経済、芸術がことごとく墮落していて、わずかな賢人さえも絶望するか奇跡を願うしかなくなっている中国の現実を芥川に認識させていく。そういう過程がよくわかった。

ルールーとの交流というのは、このドラマの見せ場の1つであろう。そのルールーも労働運動の現場で命を散らし、その死の現場で流された血をビスケットで分かち合う。このシーンはやはり鮮烈な印象を受けた。中国の人々との交流を通じて彼の中国への思いがむしろ強まっていったことが、後半のいくつかの場面から伝わってきた。上海に来たばかりの頃は、うるさく感じていた鳴り物が、去る頃は、それがなくなるといふようなところまでなじんできたと述べており、最後の場面で芥川は、いつかこの国は必ず起き上がるだろうという言葉に述べている。これは絶望的な現実の中にも、中国になお希望を持っていたことを表しているのだろうと受け止めた。

ドラマは、この6年後に芥川が睡眠薬を服用して自ら命を絶ったことを村田孜郎が淡々と述懐する場面で終わっている。帰国後の芥川の心の葛藤、死に至る経緯には触れていないが、いくつかのヒントが示されている。例えば彼が死の床でまもっていた

のがお気に入りの中国の布でできた浴衣だったこと、また日本の童話の桃太郎の本当の姿は侵略者だということ、これはおそらく鄭孝胥の見方だったが、そういうエピソードが挿入されていることなどがヒントだと思った。そうした点から見て、芥川が自ら生きる希望を絶ったというのは、彼の感性が、彼の願いとは裏腹に迫る日中の戦争を敏感にかき取っていたからだということを、ドラマは言おうとしていると受け止めた。この番組は、芥川がもし今日の上海の林立する高層ビルを見たら何と思うのかというような、そういう想像もかき立てる。視聴者に鑑賞の余韻をふんだんに残す仕上がりになっている。

- 強い印象を受けたのは、映像がきれいだということだ。本当にカラフルで、100年前のあの怪しげな上海を見事に映像化しており立派だと思った。今の上海は高層ビルが立ち並んでいるが、1つ裏通りに入ると、この100年前の景色が今もまだ残っている。決してこれは過去の話でもなく、今もどこかの上海の裏通りには怪しげな、あるいは貧困も含めてこのような世界があるように感じたので、非常に衝撃的だった。

文学としてより、歴史の流れとしてこの番組を見たが、辛亥革命があり、その後、軍閥が割拠するという混乱の極みの中で、外国人は租界で生活をしている。その時代の歴史が、非常によく表現されていると感じた。最後のところで、中国の共産党大会の第1回に毛沢東が出てくるのだが、この番組は時代の転換期を切り取っており、現代中国の原点をみることができるといっても非常に強いインパクトを持った。

タイムスリップしたような感じもするが、現代まで続いている、ドラマというよりはドキュメンタリーのように感じる場所があった。だから、芥川原作との違いについては、あまり気にならなかった。

これは中国と日本の見事なコラボレーションだと思うが、日本側の企画意図に中国の当局が何らかの影響力を行使したのかどうか。あるいは全く、そういうこともなく、脚本をそのまま映像化できたのか。仮に今の中国がこういう番組を見たら何かしら思うところはあるはずなので、何らかの影響があったのかどうか伺いたい。

- 全体を通して気になったのが、喫煙シーンが非常に多いことだ。これをそのまま、例えばタイで見せられるかということ、難しいのではないかな。韓国でも今非常に厳しくなっていて喫煙シーンを放送に出さなくなっている。ほかにも世界のいろいろな国で喫煙シーンを出さないよう、アメに変えたりモザイクを付けたりいろいろな工夫をしている。喫煙シーンに関しては、WHOが2016年に映画やテレビで使わないようにという勧告を出しており、そういう世界の流れも踏まえた上で、外国向けに放送する番組については少し気をつけたほうがいいのではないかな。

国際放送として、外国向けに放送する際、国内放送の番組と違うルールがあるのか。外国向けに放送する場合は別のルールがあってもいいのではないかな。

(NHK側) 芥川について、バックグラウンドの描写がなく不親切だったのではないかなということだが、芥川という人物は、おそらく外国では知らない人が当然多いであろうという前提で英語版を作った。今、世界が注目している中国の100年前の姿を、隣国のとある作家の目線で見っていく物語で、むしろ主役は中国である、というくらいのつもりだった。この時代の中国を描く

と、大抵は政治家、軍人が絡んできたり、日中関係の負の部分みたいなものに触れずにはいられないようなところがあったが、今回は芥川龍之介という1人の作家、文化人の目を通してニュートラルに描くことが出来たのではないか。偶然にも、当時ちょうど第一回中国共産党大会が行われた。つまり、現代の中国の原点となるような転換期に、芥川が旅をしている。彼の目線で描くことで、中国のパワーの源に迫れるのではないかと考えた。

英語のタイトルに「芥川」の名前を入れなかったのも、おそらく外国の方は知らないだろうと考えたからだった。むしろ100年前の中国に迷い込んでしまった単なるストレンジャーという目線で、視聴者にも一緒に旅してもらおうという思いで付けたタイトルだ。

「これはフィクションです」という文言を英語版に入れなかったのは、欧米など海外では、たとえモデルがいてもフィクションはフィクションだということが、日本人よりも共通理解としてあるので、フィクションという表示は普通は入れないことが多いという慣例にならった形だ。

この番組は完全にドラマとして制作したので、脚本家が想像力を働かせてフィクションとしてふくらませた部分に関しては、あくまでも見た方に感じ取っていただくということを優先し、ここまでは現実です、ここから先は違いますよ、というような説明はあえてしなかった。視聴者に100年前の中国と一緒に迷い込んでいただいて、それぞれに感じ取っていただくことを一番に考えて作った。

日本人にはどうしても芥川が自殺したことが予備知識としてあるので、この旅との因果関係が気になるという声は非常によくわかる。この番組を見て、なぜ死を選んだのか、見た人によってそれぞれの解釈が成り立ち、味わう余韻も違うと思うが、作り手としてはそれでいいと思っている。

ルールーは、脚本の渡辺あやさんが創作したオリジナルキャラクターで、作劇上必要な存在だった。芥川が中国語が全くわからない中で異国の地に飛び込んでいる。例えば偉い政治家が何か話していても、芥川は壁に引っ付いているワニの剥製を見るしかない、そういうことの連続だ。そしてルールーも耳が聞こえず、周りが何を言っているのかわからない。文字でしか自分を語れない。2人は少し似た境遇のストレンジャーどうして、漢文を通じて直接コミュニケーションが取れる。全くの異国の地に放り出された芥川が、自分の分身みたいな形で、直接心を通わせ得る人物として発想されたキャラクターがルールーだと思う。ルールーの血に染まったビスケットを食べて、彼の思いや、彼を愛している人たちの思いみたいなものを芥川が受け取って中国観が大きく変わっていくが、ルールーのような特殊なキャラクターがいなくなかなかそこまでの結びつきが生まれづらかった。

日中のコラボレーションの中で中国当局が影響力を行使したかだが、現地のプロダクションと丁寧にやり取りをしながら、撮影許可を得た。特に影響を受けることなく撮影を行った。

(NHK側)    そもそもの企画として、今、中国とはいったい何だろうということを描

くことが、1つの企画の発想の原点になっている。そこに非常に有効なキャラクターとして、当時4か月間のルポを行った芥川龍之介という日本の知性を代表するようなキャラクターを置いたことで、政治・軍事というバランスではなく、中国の美しい面、人間の熱量みたいなことを描き出したかった。そこに8Kというテクノロジーが加わり、非常に鮮烈な光、影、色を表現し、100年前の日本人が感じた中国に対するパッションみたいなものを表現できるのではないかと考えた。

この番組は、芥川龍之介のバイオグラフィーではない。芥川というのは、われわれの目に中国の100年前を見せるための1つの触媒、フィルターでしかなく、ある普遍的なもの、100年たっても変わらないものを描きたいというようなことで、当時の芥川が見た風景、見た記憶、そのまぶたのままに今の中国を見たら、今の中国は果たしてどう見えるだろうか。それを映像によって訴えかけたいというのがこのドラマの趣旨だ。

こういう番組を外国で放送することで、われわれ日本人が見る中国とはどのようなものかという疑問が、欧米、あるいはアジアの人にとっても、中国とは何かを考える1つの起点になってほしい。

(NHK側) 質問があった番組を作る上でのルールについては、国内番組基準と国際番組基準の2つがあり、喫煙シーンが多いとか、売買春をどう取り上げるかといった指摘があったが、番組基準に則って作ると受け止めている。今回の場合は、1920年代を描くという意味での演出の一部が、今の時代の感覚から見ると首をかしげるようなものもあったかもしれない。ただ、問題意識としてはドラマの場合でも、最近ドメスティックバイオレンスや、子どもを虐待するというようなものが多いので、例えば昭和の時代を描いているからといって簡単に親が子どもに手を上げるというようなものを軽々しく脚本の中に取り入れるようなことはしないように注意しているし、今後も一層気をつけていきたい。

## 2019年12月 国際放送番組審議会

2019年12月のNHK国際放送番組審議会（第664回）は17日（火）NHK放送センターで9人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず最近の国際放送の動きについて説明があり、意見交換を行った。その後、「2020年度国際放送番組編集の基本計画（案）」の諮問にあたり、説明を行った。審議の結果、番組審議会として原案を可とする旨、答申することを決定した。引き続き、「GLOBAL AGENDA」、「no art, no life」について説明があり、意見交換を行った。最後に、国際放送番組のモニターレポートと視聴者意向の報告を行い、会議を終了した。

### (出席委員)

委員長	神馬 征峰	(東京大学大学院医学系研究科 教授・国際地域保健学教室)
副委員長	河野 雅治	(日本国政府代表・中東和平担当特使)
委員	岡田 亜弥	(名古屋大学大学院国際開発研究科 教授)
委員	河合祥一郎	(東京大学大学院総合文化研究科 教授)
委員	木山 啓子	(特定非営利活動法人 ジェン 理事・事務局長)
委員	佐藤可土和	(クリエイティブディレクター、(株)サムライ 代表取締役)
委員	佐藤たまき	(古生物学者、東京学芸大学教育学部 准教授)
委員	田中浩一郎	(慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科 教授、 (一財)日本エネルギー経済研究所理事 兼 中東研究センター長)
委員	平子 裕志	(全日本空輸(株) 代表取締役社長)

### (主な発言)

#### <「2020年度国際放送番組編集の基本計画（案）」について（諮問・答申）>

- 先月の審議会の意見交換も踏まえて「2020年度国際放送番組編集の基本計画（案）」は、原案どおり可とする答申をしたいが、異議はないか。
- 異議なし。

(NHK側) ご承認いただき、お礼申し上げます。番組審議会で答申を得たので、この後、この「基本計画案」を1月の経営委員会に提出する。経営委員会の議決が得られたら、来年度の具体的な番組編成を決定し、2月の番組審議会にて「2020年度国際放送番組編成計画」として改めて説明する。

## <「GLOBAL AGENDA」 Old vs New Media in the 21st Century

(11月30日(土) 10:10 ほか) について>

- この討論番組は、東京で行われたABU（アジア太平洋放送連合）総会に関連した行事を題材に作られた番組ということで、番組冒頭からいきなり司会がパネリストに対し質問を投げかけるシーンから始まるので、そもそもABUとは何か、この討論が何のために開かれているのかということがわからないと、多くの方は戸惑うのではないかと。

パネリストの方々はその分野から選ばれているとは思いますが、なぜこの人たちが選ばれているのかという説明もないので、番組が少し分かりづらい印象を受けたのが残念だ。

- 番組の構成や中身は非常に共感を持って見た。グローバル化が進む今、瞬時に情報が発信される社会において、メディアのあり方を問う非常に良質な番組だった。さまざまなバックグラウンドを持つ人たちがパネルディスカッションに参加していて、それぞれ違う立場で意見を発していたのはよかった。

同時期にCOP25が開催されており、また、若い世代にとって、新しいメディアのあり方というのは今日的な意味があると思った。

- ジャーナリズムの今後をどう見るべきか、どう捉えていくかについて、当事者であるジャーナリストの方々の問題意識、危機感が非常によく伝わり、タイムリーなテーマだった。

パネリストが全員男性であったことに違和感を持った。国際的なパネルディスカッションにおいてはほしいジェンダーバランスに配慮するのが世界的な潮流なので、男性ばかりなのは、日本で実施した故かとも思った。また、地域的なバランスという意味でも、欧米系のパネリストが多かった。せっかく東京で行われた総会で、日本の現状について世界に発信する機会でもあるので、日本人、できればNHKからの登壇者やパネリストが1人でもいたら、なおよかったのではないかと思った。

気になったのは英語で表示されているコーナータイトルで、せっかくネイティブの方々が非常に高度な議論をされているのにコーナータイトルが今ひとつという印象だった。例えば、“Light and Dark of New Media”と右下に出ているが、そもそも“Light and Dark”というのは、“光と影”という日本語の言い回しの英訳だと思うが、あまり英語では言わないと思う。例えば“Advantages and Disadvantages”など、もっと英語らしい“光と影”に相当するような言い回しがほかにあると思ったので、直訳していたのが残念だった。

同様に、最後のほうで、“Riding the Internet Wave”とあったが、英語としてはもっと違う表現がふさわしいのではないかと思った。

- 興味深く見た。NHKがABU総会のホストをするという重要な役割を担っているときに、NHKワールド JAPANでこの番組を放送することで、そのことが伝えられてよかった。

- 討論は非常に有意義な内容だったと思う。若い世代がテレビを見なくなっているという喫緊の問題に対して、テレビはどのように対応していくのかというのは、大いに議論していかなければいけないことだ。「コンテンツがもっと刺激的なものでなければいけない」、「一方的ではなく考えさせるものでなければいけない」などさまざまな示唆があった。しかし、この番組を見ながら、この討論会をそのままテレビ番組という形で放送していることが、その問題を内包しているように見えてしまう。

討論会を現場で聞くというのは重要だが、それをテレビ番組として放送する際に、何かもう1つ工夫を加えないといけないのではないか。
- 勉強になると思いながら見たが、消化不良と感じた点があった。パネリストにインドネシアの方がいたので、例えばインドネシアに公共放送があるのか、あるいはアメリカのように基本的に民間放送のみであるのかなど、各国のメディアについて知ることができるかと思いついて見ながら見ていたが、聞き取りにくいところもあって、よくわからなかった。重要なところには字幕スーパーがあるとよかったかもしれない。
- テーマはすばらしく非常に興味があるが、番組として見ると、正直退屈だったというか、中継なのか収録なのかが一見してわからなかった。

このようなパネルディスカッションは、視聴者の関心が持続する時間は15分か20分程度と短いのではないか。50分は少し長いと感じた。50分間のパネルディスカッションはそもそも退屈に感じてしまうのに、それをさらに番組にしているのだから、これだと日頃インターネットを中心にしている人たちはますますテレビを見てくれなくなるだろうと思ってしまった。

テーマ自体はもちろん非常に重要なことで、とても興味があるが、いろいろな問題がこの番組に凝縮されていたと感じた。
- 今までこの番組審議会では、NHKが作った番組についてのコメントをする場だったが、今回は、パネルディスカッションの観客として聞いた。新聞やテレビなどのオールドメディアと、ネットやSNSなどのニューメディアとの間に新しいムーブメントが起こっているということを知り、非常に勉強になった。

最も関心を持ったのは、公共メディアも変わりつつあり、ニューメディアもチャレンジしているが、問題もあるという中で、メディアリテラシーが重要になるという点だ。Webをはじめ、いろいろな発信の中にはフェイクも真実も、いろいろ混ざっているのだから、我々はそこでまさにメディアリテラシーを問われているのだということも感じた。

一方で、これをNHKが番組化して視聴者に訴えるのであれば、NHKがマスメディアを巡る状況をどう受け止めているのかがわからなかったのも、消化不良な面がどうしても否めなかった。NHKの人がパネリストとして参加していれば、それはだいぶ改善されたのかもしれない。
- オーストラリアの公共放送局ABCのデビッド・フアさんが最後のほうで言っていた、オールドメディアとニューメディアの違いが気になった。オールドメディアというのは見る側が受けるだけで、発信する側は正規のトレーニングを受けたスペシャリ

スト。それがニューメディアになると、そういうトレーニングを受けてない人もどんどん発信してしまう。そこでメディアリテラシーというのが重要になってくるのだが、そのためには小学生くらいからメディアリテラシーについての教育が必要なのではないかとと思われる。

誰もが情報発信できるような時代になった今、どういう教育が行われていて、今後、どう進むのかということが、ディスカッションのテーマに入っているだけでもよかったかもしれない。

(NHK側) まず放送についてのバックグラウンドの説明が不十分だったのではないかとこの点についてだが、ABU総会という会の位置付けを言うよりは、ディスカッション自体の紹介を優先した。

パネリストが男性ばかりだった点はそのとおりで、女性にも登壇していたただきたかったが、パネリストを選ぶ段階で時間をかけていろいろな方にお声がけをしたのだが、結果的として男性がそろってしまった。通常、「GLOBAL AGENDA」では必ず女性を入れているが、ご指摘は今後の参考にする。

コーナータイトルについては、画面の下に小見出しのように付けているが、指摘については、ネイティブスピーカーの視点や意見を取り入れての表現だったが、もう少し工夫できたのかもしれない。

ふだん、SNSを中心的に見ている人がこの番組を見てくれるのかについては、もう1つ見ている人が楽しめる何らかの工夫が必要だったかもしれない。

NHKとしてこの議論をどう受け止めたのかということについては、当初パネリストの中に日本人の出演者ないし、NHKの関係者を入れるべきか検討したが、一放送局の意見を発することが目的ではなく、いろいろな議論を全世界の人に聞いてもらいたいということで、あのような形になった。

(NHK側) 「GLOBAL AGENDA」は討論が番組の肝だと思っており、50分間展開するのにいつも苦勞をしている。対立軸をきちんと明確にしたいというのが番組の狙いで、ニューメディア代表としてVICEデジタルのローナムさん、オールドメディアの代表としてインドネシアの公共放送のブディオノさん、さらにそれをより広げるためにふかんの立場からポインター研究所トンプキンスさんをお願いした。オーストラリア公共放送のフアさんは、オールドメディア側にながらも新しいことを始めているということで、議論がなるべく活発になるような形で展開できないかとパネリストの人選をした。皆、意外と同じ方向を考えておられ、なかなか対立軸が見い出せなかった。今後、討論番組を展開する上では、対立軸がもっと明確な人を選んだ上で、さらに次の議論に進めて行けるような番組の仕掛けを工夫していきたいと思っている。



< 「no art, no life」 (毎週日曜 20:55 ほか)

#2 井村 ももか (10月13日 放送)

#3 小林 伸一 (10月20日 放送)

#4 喜舎場 盛也 (10月27日 放送) について>

- たった5分の短い番組だったが、どれも命を十全に生きることを示す普遍的な番組になっており、とても好感が持てた。特に喜舎場盛也さんの作品をもっとたくさん見たいと思った。一人一人を追うことで、障害を持っていない人たちが自分の生きざまをふり返ることができるような番組になっていたと思う。
- エピソード2と4は、エピソード3と比べ、少し作風が違うと感じた。エピソード3では、小林さんの人生、これまで歩んで来た背景が説明されているので、視聴者からすると非常にわかりやすい。なぜこうしたアート作品を生み出すようになったのかというところがわかるようになっている。エピソード2と4は、同じような構成で、彼らが作っている作品自体はよくわかるが、人生の背景が語られる部分がないので、少し文脈がわからず、視聴者がどこまで共感を持って見られたのかという疑問を持った。

エピソード2では、井村ももかさんが童謡を歌うシーンがあるが、どういった歌を歌っているのか、英語のキャプションで歌詞を付けてもよかったのではないかと思った。
- それぞれのアートが何を表現して、完成形が何なのか、わからないという点では3つのエピソードは同じだと思った。表現していく中で、それぞれの理由や思いがあると思うので、その点においてこの5分の番組に意義があると思っている。

気になったのは、ナレーションの女性の声が聞きづらかったことだ。
- 少し複雑な思いで見た。日本では障害者施設においてアートを教えているところがある。この番組に出演している人たちは非常に特殊な例で、実際行われている例の多くは、コミュニケーションを取ることが非常に難しい人たちがいろいろな絵を描くが、家族の人たちにとってもそれがアートなのかかわからない状態で、こんなことを続けていていいのだろうか悩んでいる施設もある。

そうした中で、この人たちのアートは確かにすごいが、その裏にあるものが見えてこないのはいいのだろうか、と少し複雑な思いがあった。

もう1つは、エピソード3の小林さんはコミュニケーションが取れる人だが、反対にエピソード2と4で紹介されている人は確かにコミュニケーションを取るのが難しい人で、ほかの障害者施設の人たちと似た環境にある。小林さんをほかの2人と同じシリーズで取り上げていいのだろうか疑問に思った。
- 大変興味深く見た。日頃、あまり目にする事のない芸術というものに光を当てたという意味で、この番組の意義は大きいのではないか。ただ、5分間という短い時間だったので、少し中途半端な印象だ。作者の背景も含めて作品を紹介することがメイ

ンなのか、アーティストの生き方や背景、どうしてそういう作品を作ることに至ったのかというようなことも含め、人に焦点を当てたいのか、少し中途半端な印象だった。

おそらく 2020 年の東京パラリンピックに関連してこのような取り上げ方をされたのだろうという印象を受けたが、できればオリンピックイヤー、パラリンピックイヤーだけではなく、今後も継続的にこのような芸術を取り上げていただきたいと思います。

- 番組がアート作品を伝えるだけではなく、アーティストについても伝えたいのか、というのがいまひとつわからなかった。5分しかない番組なので、これまで見たこともないような作品で、インパクト自体はとてつもなくあったが、すごい駆け足で美術館を見て飛び出してきたみたいな印象を持ってしまった。

- おそらく、こういう障害がある方の話というのは、そこに至るまでの人間ドラマがあり、さらに深く心に落ちるものだと思うので、例えば15分で1人の方を紹介する番組であれば、もっと印象的なものになったのではないかと。

いずれにせよ、このような方がたくさんいるということを知ることができたのは貴重だった。

- この5分という長さも番組の作りも、とてもおもしろいと思った。「見る」というよりも「感じる」ような、そういう新しい感触の番組になっていると思った。

アール・ブリュットというのは、フランスの画家のジャン・デュビュッフエが提唱して、アウトサイダー・アートなどいろいろある。いろいろな意味でアートとは何なのかというようなことを考えさせられたので、番組の取り組みとしては非常に良かったのではないかと。これを続けていくと、どういう人選になっていくのか、いろいろな意味でとても新しいと思った。

タイトルの「no art, no life」についてだが、タイトルの付け方が気になったので、どういう意図があったのか聞きたい。

- 最初のタイトルを見ると、正規の美術教育を受けた経験のない人々が対象ということで、必ずしも知的障害、精神障害ということではない。正規の教育を受けていない人がいろいろな世界で成功することがあるが、そのような潜在的な可能性があるのではないかと見てみた。

5分というのがいい時間ではあるが、中途半端という感じもした。一番ストーリー性のあったのが小林さんではないかと思う。

(NHK側) 現在、来年度に向けてどのように番組を改良していくか議論をしているところで、貴重な意見をたくさん頂き、参考になった。

歌詞の字幕については、「海」という歌だとわかったほうがいいのではという議論はしたが、最終的には歌の雰囲気を感じてもらいたい5分にしたいと考えた。

ナレーションについては、これから伸びていくであろう若いナレーターにチャレンジしてもらった。どういうタッチでナレーションを付けてもらうかについては、出演者に寄り添い過ぎるのも慣れ慣れしいし、あまり客

観的に淡々としても、冷たく感じるという議論を制作側も探りながら行っている。もしかするとやさしく読み過ぎて、少し聞きづらかったりするところがあったかもしれない。この点についてはだいぶ良くなってきていると思っている。

5分間では中途半端で分かりにくかったという意見が多かったこともしっかり受け止めたい。感じてもらいたいというのが作り手の押し売りになってはいけない一方で、この人はどのような障害なのだと説明しすぎるのが、作品を見てもらう時によけいな情報にならないかという点は、とても迷った末に、現行のスタイルを選択した。

タイトルについての指摘だが、「no art, no life」は、まさに「表現せざるにはいられない人たち」という意味合いだ。いろいろな精神状態、障害を抱えている人もいれば、小林さんのように、一般的な障害者の認定はされていないが、いろいろな理由があって、精神的に少し不安定さを抱えているということを本人が語ってくれたシーンや、簡潔に説明できるところは付け足すということを試行錯誤しているところだ。どのような放送時間が適切かということについては、もう少し長くして理解しやすい形にしたほうがいいのか、2月に特集番組にまとめて放送する予定があるので、議論していけたらと思っている。

障害のある人の中には、海外の展示会に呼ばれるような人もいれば、本当に知る人ぞ知る、地元の作業所でだけ、すごいと言われている人もいる。周りの見守ってくれている人から、偶然紹介されて、初めて公に出るといった人もいる。制作側としては、有名な人ばかりではなく、このような世界が無数にあるということを広く知ってもらうために、伝え続けていきたい。

## 2019年11月 国際放送番組審議会

2019年11月のNHK国際放送番組審議会（第663回）は26日（火）NHK放送センターで8人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず最近の国際放送の動きについて説明があり、意見交換を行った。その後、「2020年度国際放送番組編集の基本計画（案）」について説明があり、意見交換を行った。引き続き、「Emperor and Empress : A New Path」、「ANIMATION × PARALYMPIC」について説明があり、意見交換を行った。最後に、国際放送番組の放送番組モニターと視聴者意向の報告資料を配付し、会議を終了した。

### （出席委員）

委員長	神馬 征峰	（東京大学大学院医学系研究科 教授・国際地域保健学教室）
副委員長	河野 雅治	（日本国政府代表・中東和平担当特使）
委員	岡田 亜弥	（名古屋大学大学院国際開発研究科 教授）
委員	河合祥一郎	（東京大学大学院総合文化研究科 教授）
委員	木山 啓子	（特定非営利活動法人 ジェン 理事・事務局長）
委員	佐藤たまき	（古生物学者、東京学芸大学教育学部 准教授）
委員	田中浩一郎	（慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科 教授、 （一財）日本エネルギー経済研究所理事 兼 中東研究センター長）
委員	平子 裕志	（全日本空輸株式会社 代表取締役社長）

### （主な発言）

#### <「2020年度国際放送番組編集の基本計画（案）」について>

- 来年度の2020東京オリンピック・パラリンピック大会に向けてのシフトと、従来から取り組んでいるアプローチの両方について書かれているが、NHKとして世界の問題に対してどういうアプローチで報道していくのかが見えなかった。そこは長期ビジョンとか中期計画の話だと思うが、その点について教えてほしい。

（NHK側） 今回お示ししたのは、単年度の基本計画である。長期ビジョンという観点では、NHKでは経営計画に基づいて事業を運営しており、来年度は現行の3か年計画の最終年度にあたる。最終年度の2020年度に最高水準の放送・サービスをお届けすることがNHK全体の目標になっており、その実現に向けて国際放送としても取り組んでいる。

指摘いただいた世界の問題に対するアプローチについては、来年度の編集の重点事項の3つ目に「世界的な課題に日本・アジアの視点で向き合う番組を充実」としている。例えばSDGs（持続可能な開発目標）等といったことを取りあげる番組を考えている。

- オリンピック・パラリンピックに向けてホストタウン構想というものがあるが、これは裏返して言うと、日本がどのように最高のおもてなしをするかという、まさにオリンピックの基本理念から来ている。復興五輪という意味合いもあるので、復興に絡めたホストタウンの活動もあるだろう。オリンピックの活動理念と調和するホストタウンの番組を作っていたらと思う。

「新共生時代～日本社会とレガシー～」というのはまさにオリンピック・パラリンピックの理念でもある。今回のオリンピックにSDGsを絡めたものとしては、資源の再利用、例えば都市鉱山からメダルを作ったり、聖火のトーチに災害地のアルミの廃材を使う、最近話題のプラスチックの廃棄物の問題についても、それを使って表彰台を作ったり、ユニフォームはペットボトルを使ったりなど沢山ある。来年しかできない良い番組が出来るのではないかと期待している。

- オリンピックに関して、競技順位の高い人やよく知られている国から来られる選手に注目が集まりがちだが、例えばアフリカやアジアの国々などからの参加者についても取り上げてほしい。国際放送としての意義があるだけでなく、その国の視聴者を増やすことにもつながるのではないかと。
- 骨太の番組がNHKワールド JAPANのいいところの1つだと思っている。来年はオリンピック・パラリンピックの年だが、祭りだけではなく、その陰で起きていることにも光をあてていただきたい。
- 昨年のこの審議会で、「国際放送番組編集の基本計画」は総論と各論をはっきりさせるべきという意見があった。今回は、その点がよく配慮されていると思う。次の計画を作る際にも、このような議論がなされたことを参考にしていればと思う。

(NHK側) 頂いた意見を踏まえた修正案を検討し、次回示したい。

## < 「Emperor and Empress : A New Path」

(10月20日(日) 8:10 ほか) について>

- 皇室に関する番組はいつもながらNHKの取材力と、いろいろな資料を元に制作されているということがよくわかり、その点は評価したい。今回の番組では天皇皇后両陛下の、それぞれ個人としての姿を自らの言葉で語るという点が肝だったのではないかと理解している。

気になったのは、オックスフォード留学中の学友として、イギリス人ではなくてアメリカ人を取材した意図は何だったのか。単に親友であったということか。それともイギリス的な視点ではなく、少し視野を広げてアメリカ側の見方も入れたかったのか。

皇太子時代の天皇陛下の記者会見の映像で、雅子妃が病気になった後の会見が出ていた。番組の中で適応障害という紹介はあったが、あ那时的会見で一番話題になったのは、雅子妃の人格やキャリアを否定する動きが一部であったとする、いわゆる人

格否定発言だったと思う。それこそ天皇陛下が会見で最も言いたかったことではないかと思うが、そのことには今回触れられていない。寝た子を起こす必要がないという判断かもしれないが、この番組が、天皇皇后両陛下のそれぞれの言葉で語ってもらうという趣旨であっただけに、人格否定発言が取り上げられなかったのが残念だ。

それから、これは国内向けに作られた番組に国際放送独自のパートが加えられたとのことだが、どこがそれに相当するのかを知りたい。

- 5月に上皇さまのことをテーマにした「Emperor Akihito Part 1: Crown Prince of a Defeated Nation」（4月28日（日）8:10 放送）を視聴したが、上皇さまはご両親と別居して育てられたと紹介されていた。天皇陛下は一緒に育てられ、そこから青春時代の話や、アメリカの女優ブルック・シールズが大好きだったことなど、きわめて人間らしい側面をうかがわせている。天皇家は世界から注目が高いので、前半の部分で天皇陛下の幼少期から現代までを紹介したことは非常に良かった。

おそらくこの番組のポイントは後半の「模索」というパートではないかと思っている。この中で、皇后を守ろうとする天皇陛下の苦悩がうかがい知れる。新しい時代に象徴天皇としてどのように生きていくのかという苦悩がよくあらわれている番組ではなかったかと思う。

- 天皇制の歴史に触れて、なぜ象徴としてのあり方を模索しなければいけないのかというところは、おそらく日本で育った人でないとわからないのではないかと思ったので、そこがもっと描かれているとよかった。

- 外国の方が見たときに、それほど日本の皇室に詳しくない方が見ると、すてきなカップルの紹介のような感じで終わってしまいそうで、少しもったいないと思った。日本の天皇制は特殊で、非常に長い歴史があり、政治や社会が根本的に変わるようなことがあっても維持されて来たことや、現在の象徴天皇制、皇室典範により女性は天皇になれないことなど、海外の方に説明するのであれば、もう少し背景となる説明があったほうがよかったのかもしれない。

- 番組の副題「A New Path」が、作り手の意図を反映していると思う。それは、時代に応じて「天皇」のあり方も変わっていかねばならないというご本人の思いが、この言葉の中にも含まれているのではないかと思う。海外の視聴者から「陛下に対して近しさを覚えることができた」という反響があったとのことだが、それに対し、制作者としてどのようなことを感じたかという点と、「A New Path」に込められた思いを聞きたい。

- お2人の幼少時から現在までの軌跡をうまくまとめていて非常によくできた番組だった。特に冒頭の、天皇陛下が海外で一般の方との写真撮影に応じていて、一緒に映った人が “He is a nice guy” とフランクに言っており、新しい皇室像を提示できていると思った。

「A New Path」という副題なので、できれば即位直前の肉声がお聞きできているといいと思った。難しいかもしれないが、せっかくご夫妻で英語にご堪能でいらっし

やるので、国際放送向けにインタビューを受けていただけるということがあれば、海外発信として非常にインパクトがあるのではないかと。

- これは海外向けの番組なので、外国人がどう見るかということが大事だと思う。そういう意味でこの番組は非常にいいオリエンテーションになっていると思う。世界には君主制国家や共和制国家、あるいは独裁国家とさまざまあるが、君主制の国家でも王制はこのままでいいのかと常に議論になっている。そんな中、日本の天皇制というのは、皆さんの国と比較してこういうふう存在しているということをこの番組は世界に訴えかけている。この点が一番重要だと思った。
- これまでは、まず日本語の番組があって、それをベースに英語の番組を作るという流れがほとんどだったように思うが、今後、英語版を作ってから、日本語版を作るという逆の流れがあってもいいのではないかと。最初から海外向けの報道というロジックで作って、それが日本向けになると、また別の印象が得られるかもしれない。君主制のあり方とか象徴の意味とかをテーマにするのも興味深いのではないかと。

(NHK側) オックスフォード大学留学時のアメリカ人のご友人だが、あの方は本当に仲のいい友人で、入学式の日になんか隣になってそこから親交が生まれ、留学の間、天皇陛下ととても親交を深められた。天皇陛下が留学を終えられて日本に帰る際には、わざわざアメリカに寄って、彼の自宅まで行って、その縁でブルック・シールズと会えたというエピソードもあるぐらいの一番の親友だ。だから、アメリカ人であるということよりは青春時代の天皇陛下を一番よく知る人物で、1人の青年として付き合ったことを語れる貴重な方ということで、今回取材した。

もう1つ、人格否定発言についての指摘だが、天皇陛下が皇太子時代の会見で人格否定について言及されたことは非常に大きなことではあるが、その背景にはさまざまな当時の宮内庁との関係も含めたことがあり、背景まできちんと説明しないとなかなか真意はわからない。その後、雅子妃が長期療養に入られるが、長期療養に入られた雅子妃を支えながら代替わりまでともに歩んで来られたというところを描いていくほうが、よりふさわしいのではないかと考え、今回はあえて触れなかった。

それからタイトルの「A New Path」について、もちろん新しい両陛下が退位した上皇さま・上皇后さまとは違う道を選んで歩いて行く、ご本人もそれに言及されているということが、この言葉をタイトルにした1つの理由だ。もう1つは、私たち国民が新しい両陛下とどう向き合っていくかということが、平成から令和に代わって私たちにも問われていると考えて、新しい両陛下だけではなく私たちも一緒に歩いて行くという思いを込めた。そのことが伝わっていたのであれば制作者として大変うれしく思う。

インタビューについては、国際放送独自の取材はなかなか難しいが、新しい時代に入っており、英語も堪能なお2人なので、公共メディアとして皇室をきちんと伝えていくという責務があると思っており、引き続きチャレンジしていきたい。

(NHK側) 即位の礼があった10月は、この番組を含めて合計5本、天皇にまつわる特集番組を集中編成した。その最初が10月6日のNHKスペシャルの英語版「The People and Their Emperor」だ。まさに日本人がどのように天皇制を歴史的に発展させてきたのか、それから皇位継承問題なども含め深く掘り下げた番組を最初に放送した。それから10月5日、12日、19日と毎週末に、ことし4月に集中編成した「Emperor Akihito: Part 1～Part 3」を50分版に再編集して放送した。特にシリーズ最後の回については、新しい天皇陛下と皇后がどういうお人柄の人なのかを見せようというものだった。なお、天皇に即位されてからの会見や映像などを、新しく独自パートとして入れるなど編集もひと手間かけて、この放送に臨んだ。

## <「ANIMATION × PARALYMPIC」

- － Episode 6 : Vision Impaired Judo (10月15日 (火) 8:55 ほか)
- － Episode 7 : Para cycling (10月27日 (日) 9:35 ほか) について>

○ 5分という短い中で、パラリンピックをどう伝えていくのかというのは非常に難しいが、アニメという手法を使ったのは非常によかった。日本が得意とする文化、世界中からも注目されているものなので、まずそこで興味を引くという手法はよかったと思う。

Episode 6とEpisode 7の放送の間隔が開いているが、離し方がいいのかどうか。放送枠の問題もあるのかもしれないが、柔道のほうは障害者、サイクリングのほうは健常者が主人公になっていて、視点の違う2つが一緒になっている。連続して見たほうがわかりやすかったかもしれない。連続で見るとこういったことに気づくのかもしれないが、これが10日以上離れて散発的に見てしまうと、理解度が薄まっていくのではないかと感じた。

いずれにしてもこの2つは、今まであまりパラリンピックに対して深い関心を持っていなかった自分への反省も含めて非常に興味ある番組に仕上がっており、実際に海外の方がこれを見て、パラリンピックへの関心が非常に深まっていくのではないかと感じた。

○ 大変すばらしい番組だった。パラリンピックの意義というのは、たぶんいろいろな形で考えられると思うが、その1つとして挙げられるのは、ただ単に障害を持った方々が頑張っているのを応援するというのではなく、相手を理解するということが根本にあると思う。実際にパラリンピックでどういう形で、障害がありながら試合ができるのかということは、なかなかイメージできないものだ。アニメという手法を使うことで、柔道では相手の道着を2か所つかむことによって相手の存在をイメージし、相手の動きを感じて投げる、と示している。しかも、投げた後に「ありがとう。あなたのおかげで試合ができている」と感謝をするという、スポーツの精神をしっかりと伝えている。それを5分ですべて表現したEpisode 6は非常にすばらしい出来だと思った。



このシリーズはぜひ、すべてのスポーツのジャンルに関してやっていただきたいと思う。

- テレビ番組を見ていて、何でもかんでもアニメにすればいいと思っているのではないのかと常日頃思っていたので、またかと思いきやそうになったが、番組を見て、アニメだからできることをやったのだと受け止めた。  
パラリンピックの競技について、選手の人たちがどのような気持ち、どのような考えで取り組んでいるのかというのがとてもわかりやすく表現されていて、どちらも好感を持った。
- アニメという手法が非常に効果的で、わずか5分の中にアスリートの気持ち、スポーツのルール、健常者とは違うパラリンピック特有のルールも非常にわかりやすく説明されていて、しかも競技をしている人の気持ちに共感できるように作られていた。  
この番組は字幕だったが、多言語放送で吹き替えで行ってもいいと思った。例えば視覚の困難な方たちは字幕では見られないと思うので、吹き替えという手法は有効だと思った。
- 国内外の障害者の方、特に視聴覚に障害を持つ方、あるいは将来のパラリンピック選手になるような方々、そういう方にこういう番組があるということを知っていただく機会があるのか気になった。もし何か国際放送で特筆すべき取り組みや今後の指針のようなものがあれば教えていただきたい。
- 日本語の番組として作られている意図はよくわかるし、よくできていると思うが、これが英語字幕で出たときにどういう意味を持つのか気になった。英語吹き替えをしたほうがよかったのではないかという印象だ。せっかくアニメーションなので、Episode 7では実在のアスリートが出てきたが、創作ということで捉えれば架空の人物、架空の設定、あるいは何かをモチーフにした架空の物語を作ることができる。最初から海外向けに東洋人や日本人の設定にこだわらないほうが、むしろ国際放送の番組としてより適切だったのではないか。
- パラリンピックに関連する方々に人が興味を持つ1つの大きな理由は、一人一人にいろいろな歴史があるということなのだと思う。  
来年のパラリンピックに出場する選手は、本当に少数のエリートだと思う。そこまでチャレンジできる障害者というのはそれほどおらず、引っ込み思案、あるいは自信がないということでそういうレベルまで自分には行けないだろうと思っている障害者の人はたくさんおられると思う。だから、こういう番組を見るといつも、これは光の部分だが、陰の部分もたくさんあるのだということを改めて感じざるを得ない印象を持った。
- Episode 6は非常に感銘を受けた。全体的にいろいろな番組の作り方があると思うが、なぜアニメの手法を取り入れることにしたのか聞きたい。こういう娯楽の要素を取り込んでいくというのも非常に大事だと思っている。

(NHK側) なぜアニメの手法なのかということだが、これまでパラリンピックに関して、ドキュメンタリーで背景に迫ったりするなど、番組やニュース企画もたくさん作って来たが、どうしても一般のオリンピックスポーツに比べて、なかなか見てもらえないという現状がある。どうしたら見てもらえるか考えた結果が、1つはアニメだ。また5分にこだわろうと、チームで挑戦した。

なぜかという、なかなか関心を持ってもらえないものを、5分で見せることによって、最初の壁、障害者がスポーツをやるということへの抵抗感、それをまずアニメという形で抵抗を少なくし、関心を持ってもらうことにチャレンジしたいと思った。

それから、子どもたちに偏見を持たないでもらうために、アニメを使うことによって子どもたちが見やすいコンテンツにする。そういうことで共生社会に寄与していけるようなアニメにできないかと考えた。

5分だと、どうしてもいろいろなルールの細かい部分や背景を伝えられないので、今「アニ×パラ」では公式ホームページを設けている。アニメをきっかけに、NHKがいろいろ作っている番組やニュースを短い2、3分のコンテンツにし、見られるような形にしている。アニメでハードルを低くして、そこからパラスポーツの実際のものに触れてもらう。パラリンピックのアニメは漫画家、声優、それからテーマ曲は毎回オリジナル曲をアニメに応じてアーティストに作ってもらっているが、そういう人たちが皆、パラスポーツを勉強して、それについて語れるようになって現場に来られる。そういう人たちのインタビューなども載せており、彼らの目を通してパラスポーツの深さをより知ってもらうというような仕掛けを、ホームページでしている。有機的、多面的に、パラリンピック、パラスポーツの魅力を知ってもらおうというのが、この「アニ×パラ」プロジェクトの意味であり、目指すところだ。

すべての種目を作ってほしいという意見を頂き、ぜひ目指したいが、どうしても著名な漫画家やアニメ監督は忙しい方たちで、無理を言ってお願ひしている現状だ。ぜひ続けていきたいと思っているが、どこまで行けるかというのは何とも言えないところだ。

吹き替えについても探ってはいるのだが、英語で演技ができる声優の方というのは日本にはなかなか少ないようだ。今のところ、吹き替え版の制作は保留になっている。

障害を現在持っている人に見てもらおうということと言うと、今、NHKワールド JAPANのコンテンツを海外で見せるという取り組みを外務省と協力して行っている。イラクの小児がん施設で、小児がんのため、将来、足を切らなければいけないかもしれないという子どもたちに家族と一緒に「アニ×パラ」を見てもらい、インタビューしたところ、未来に向けて勇気をもらえたというコメントもあり、ニュースで取り上げた。

(NHK側) パラスポーツはいろいろな競技があり、今回の2つのEpisodeはどちらも健常者スポーツがもとになっているものなので、改めて競技の説明をす

る必要がほとんどないところが大きい。これまで放送したものの中では、例えばゴールボールや車いすラグビーもあるが、これは健常者スポーツがもとになっておらず、パラスポーツとして考案されたものだ。そうするとある程度、競技の説明に時間を割かざるを得ない。しかし、競技に興味を持ってもらえればよく、競技のルールをわかってもらうことが目的ではないので、あまり説明はしないが、全く知らないものについてはある程度説明は必要で、ものによって、試行錯誤しながら作っている。

実在の選手が登場するものもいくつかある。これまで車いすテニスで国枝慎吾選手をアニメのキャラクターとして登場させた。

いろいろな国の選手をという話もあったが、世界的に評価されているアニメの強みは、このキャラクターはどこの国の人ということをそれほど意識せずに見られるということがある。実際、アニメの中では髪の毛が緑や青だったりするが、これがどこの国の人だろうと思って見ることはあまりないので、今後、いろいろな国の人を出していくことはできるだろうと思う。

そういう交流を描いていくというものも、障害者を特別扱いしないということと言うと、外国人についても同じだと思う。そのことを考えていく価値はあると思うし、大変いいヒントを頂いた。

○ せっかくこれはいい番組なので、どこかでまとめて見ることはできるのか。

(NHK側) 今、NHKの「アニメパラ」の公式サイトでアニメを5分間全部見られる形にしている。また、英語以外にも多言語化しており、NHKワールド JAPANのホームページで見ることができる。

## 2019年10月 国際放送番組審議会

2019年10月のNHK国際放送番組審議会（第662回）は15日（火）NHK放送センターで9人の委員が出席して開かれた。

会議では、最近の国際放送の動きについて説明があり、意見交換を行った。ひき続き、「Photography is a Small Voice - Eugene Smith and Minamata」、「Helping Hands - The Lives of Atomic Bomb Orphans」について説明があり、意見交換を行った。最後に、国際放送番組の放送番組モニターと視聴者意向の報告資料を配付し、会議を終了した。

### (出席委員)

委員長	神馬 征峰	(東京大学大学院医学系研究科 教授・国際地域保健学教室)
副委員長	河野 雅治	(日本国政府代表・中東和平担当特使)
委員	岡田 亜弥	(名古屋大学大学院国際開発研究科 教授)
委員	河合祥一郎	(東京大学大学院総合文化研究科 教授)
委員	佐藤可土和	(クリエイティブディレクター、(株)サムライ 代表取締役)
委員	佐藤たまき	(古生物学者、東京学芸大学教育学部 准教授)
委員	田中浩一郎	(慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科 教授、 (一財)日本エネルギー経済研究所理事 兼 中東研究センター長)
委員	中曾 宏	(株大和総研 理事長)
委員	平子 裕志	(全日本空輸(株) 代表取締役社長)

### (主な発言)

#### <最近の国際放送の動きについて>

- 10月12日に日本に上陸した台風19号関連のNHKのニュースについて、2か国語放送でずっと視聴していたが、非常に分かりやすい英語で放送が行われていたことはとてもよかったと思う。一方、主要駅で取材しているリポーターが、計画運休で駅は閑散としているために、外国人がたくさんいることがかえって目立っているというコメントをしていたのが気になった。これだけNHKが国際放送で迅速な情報提供を行ったにもかかわらず、外国人観光客の方々は情報を取得するという意味で遅れが出ているのではないかと感じた。例えば、JRの主要駅にデジタルサイネージのような形で二次元バーコードを映し出せば、情報が届くのではないかと思った。

(NHK側) 二次元バーコードについての取り組みの1つとして、成田空港に到着したときにNHKワールド JAPANのホームページに誘導する二次元バーコード等を紹介するPRブースを設けている。JRの駅でもNHKが作ったフライヤーを配っているケースもある。鉄道会社や駅によって受け入

れ態勢に違いがあるが、現在、関心を示してくれた施設などにはメーリングリストを作ってデータをお送りしている。これをもっと拡大したいと考えている。

- 海外向けの発信については、どのような戦略なのか。海外出張に行き、ホテルでテレビをつけると、最初に出てくるのはCNN、BBC、フランス、中国の国際放送であることが多く、NHKはなかなか出てこない。国際的な発信力という点を確認したい。

(NHK側) CNNは1985年に、BBCは1991年にスタートしたのに比べて、NHKワールド JAPANが24時間の英語放送を始めたのは2009年で、チャンネルとしてまずスタートが遅かった。ホテルに関して言えば、世界のすべてのホテルにというのは難しいので、例えば最初は5つ星、次に4つ星といったように少しずつ対象を広げるなど、戦略をもって視聴可能ホテルの拡充を進めている。

ホテル以外では、一般の方たちにNHKを知っていただきたいという考えから取り組みを進めており、今、およそ3億8,000万の世帯でNHKワールド JAPANが見られるようになっている。海外は多チャンネルの時代で、家庭で100や200のチャンネルが視聴可能だが、その中から選んでいただけるように番組の内容もしっかりしたい。インターネットでの発信についても、より多くの方に見ていただけるように取り組んでいる。

## < 「Photography is a Small Voice - Eugene Smith and Minamata」

(8月17日(土) 8:10 ほか) について>

- 非常に勉強になる番組で、知らなかったこと、教えられることが多い深い内容の番組だった。本当に理解するためには、常に対象に寄り添って長い時間を費やすことが大切なのだということを写真家のユージン・スミスさんがやっておられた。NHKもしっかりと取材に時間を費やして番組にしていた。

公害を引き起こした企業チッソの工場でスミスさんが暴力を受けたことに対し、会社は裁判になるのを避けようと交渉してきたことなど、重要な要素は盛り込んで、本当に50分をフルに使っていた。

- NHKらしい非常に重厚な番組だと思った。豊富な映像資料も交え、取材も丹念に行ったというのがよく伝わってきた。当初、水俣病は伝染性の病気ではないかという偏見があったということや、スミスさんに写真を撮ってもらったために他の患者家族から妬みを受けたこと、病気そのものだけでなくこうした偏見も被害者を苦しめてきたということにも注目したのが非常に印象に残り、貴重な情報を海外に伝えることが出来た。

- タイトルの「Photography is a Small Voice」という一文は最後に出てくるスミスさんのメモの中にもある。時として1枚の写真がなによりも雄弁であるという意味のメモで、この番組のテーマを如実に物語っていると思った。水俣病患者である田中実子さんや上村智子さんに対するスミスさんの寄り添い方が紹介されるが、智子さんとそのお母さんの入浴シーンの写真がスミスさんの名声を高めた反面、智子さんの家族が他の患者家族から妬みを受け傷ついたというシーンがあったので、撮る側と撮られる側との難しさもよく出ていたと思う。スミスさん自身が非常に苦しみながら、写真家としての人生を送ったということがよく表れていた。
- 記録していくこと、伝えていくこと、写っているものが全てなのか、表現とは何かということのをいろいろと考えさせられた。タイトルによって、1枚の写真の力が非常に伝わってきた。  
番組全体の趣旨はもちろんだが、その仕上がり、特に音楽がとてもよかった。音楽のセレクトがとてもいい雰囲気を出していて、すばらしい出来だった。
- スミスさんは世界的に有名な写真家だが、なぜ彼が水俣にフォーカスを当て始めたのか。長期間滞在して患者と向き合い、写真を発表することになったのか、という経緯をよく知らなかったので、大変勉強になった。  
タイトルの“Small Voice”は非常に奥ゆかしい表現だが、モノクロの写真1つ1つが非常に陰影をもって、パワフルなメッセージを与えていた。ユージン・スミスという写真家の使命感や矜持、葛藤がよく描かれていたように思う。  
ある患者の写真をたくさん撮ったけれども、人間らしく生きたいのに生きられない人々をどう描くかということにずっと葛藤し、結果、1枚だけ公表したということにも非常に胸を打たれた。  
今回、多くの未公開の写真や音声テープが発見され、ドキュメンタリーが作られたとのことだが、どのように未公開音声テープがあるということを知り、こういうドキュメンタリーを制作することにつながったのか伺いたい。
- 最近、水俣の周辺を通ったが、見た限りでは景色も全くそのようなことを思い出させるようなものではなく、その時は問題意識をあまり持たなかった。しかし、まだ終わっていない問題であるということ現代に届ける声として非常に重みのある番組だったと思う。  
このドキュメンタリーを見て、公害という問題が人々の大切な人生を破壊して、拭い去りがたい傷を残しているということを改めて認識した。番組に登場する水俣の人々が、スミスさんの思い出を語るときの表情は大変柔らかくて、心が通じ合っていたのだろうと思う。だからこそ患者の視線に立った悲しみや苦しみを共有したうえで、あのような優れた写真を撮ることができたのだと思った。  
スミスさんの肉声で「彼女は歩くことも、話すこともできず、恋を知ることもない」ということばがあったが、これは水俣の公害が奪ったことの残酷さを非常に雄弁に訴えかけていた。  
太平洋戦争の経験がスミスさんの写真家としての原点であることは分かったが、大戦中に何があったのか、もう少し知りたいという気がした。

工場で暴力を受けた事件についてだが、これは今の企業がバナンスからすると考えられないような出来事で、これ自体が番組の1つのテーマになるような重い内容だ。経済成長と人権の問題というのは、経済発展途上にある国においては、今でも問題であるので、国際番組としては、その意味合いについて、別の機会で問題提起することがあってもいいかもしれない。

- 学校教育で水俣病を含めた公害病について学び、知識はあったが、患者の追跡取材や実子さんのその後などを番組で見たときに胸が詰まった。

淡々と白黒が多い画面と感情的になり過ぎない音声、そして音楽もとても控えめで番組が進むので、かえって患者側と企業との間の激しいことばのやり取りであったり、暴力的になったりというシーンが、非常に際立っていると感じた。

気になったのは、テープの音声で、特にスミスさんのことばが聞こえにくいところがあった。本当に重要なメッセージは字幕があるとよかったのかもしれない。

- 水俣病のような問題は、現在であれば、こんなことにはならないだろう。やはり水俣病は公害問題の原点だと思う。当時、公害の原因企業に対する批判の声が燃え盛っているときに、こういう番組はなかなか作りにくかったのだろうとは思いますが、今だからこそこういう冷静で多角的な視点の番組ができ、作る意義がある。

スミスさんにとっては、被写体に寄り添うという手法によって1枚を切り取ることが写真家としての使命だったと思う。世界の歴史を見ると例えば、ベトナム戦争の印象も、ベトナムの1人の子どもが逃げ惑う1枚の写真で作られたと思う。動画でも、例えば、カンボジアのポルポトの大虐殺についてアメリカABCテレビのアンカーだったピーター・ジェニングスの作ったドキュメンタリーを見た瞬間にアメリカの世論がガラッと変わる。それほど力があり、非常にリスクがある。報道に関わる人間にとって、どの映像を世に出すかは非常に重い責任を伴うということ、この番組を見て、改めて感じた。

- 患者の父親である上村好男さんが「このドキュメンタリーは歴史に残るよね、私との会話も歴史に残るね」ということを言われていたのが非常に印象に残った。途中でいくつか古い映像が出てきて、おそらくNHKで放送したものを使っていると思うが、NHKワールド JAPANが始まる前のたくさんのドキュメンタリーで英語版ではないものがあるとすると、大変もったいないことではないか。古い日本語だけのドキュメンタリーで英語版として残すべき価値のものがあれば、大規模なプロジェクトとしてやってもいいのではないかと感じた。

水俣病は、国際保健の分野では、現代の問題とされている。特に金鉱山では金を抽出するときに水銀を使っており、現在でも世界の金山で働いている人たちに水銀中毒の危険があり、「水俣病」はまだ世界の問題として残っている。これも新しいフォーカスとして日本の水俣病と関連づけられるのではないか。

(NHK側) まず、未公開だったテープや資料をどのように発見したかだが、ユージン・スミス生誕100年で、死後40年にあたる2018年に、東京都写真美術館で回顧展をやったこともあり、もう一度見直すことができないだろう

かと取材したところ、アリゾナ州立大学にスミスさんの未公開プリントやさまざまな書き物が見つかった。併せて、妻のアイリーンさんの手元にスミスさんが取材中に回していた音声テープがあったことをアイリーンさんが思い出し、お借りすることができた。その音声テープには取材者としてのいろいろな葛藤とか、私たちが番組を作っていくうえで非常に学ぶべき点も多いものだったので、番組を制作した。

(NHK側) 元従軍カメラマンだったスミスさんが、なぜ水俣を撮るようになったのかについてだが、この番組は2本シリーズで、今回の1本目は水俣病をスミスさんが追ったという番組、2本目は太平洋戦争の従軍カメラマン時代のストーリーで、彼がなぜ、弱い立場に置かれた人間に興味を持つようになったのかをひもとく内容だった。2つのテーマを通じてスミスさんのカメラマンとしての姿勢をお伝えするシリーズだった。

(NHK側) 2本目の番組内容について説明すると、スミスさんは最初、アメリカ軍の従軍記者として、日本に対し批判的な立場だったが、サイパンなどでアメリカ軍が多く日本の民間人を殺害する現場に立ち会うことが頻繁にあった。彼は自分が思っていたアメリカの正義に不信感を持ち始めて、いつの間にか、戦う米兵よりも、巻き込まれる住民を撮影し始めた。やがて沖縄戦で彼は負傷するが、そこでもずっと沖縄の住民を撮影し続けていた。彼が従軍体験の中で、戦う兵士よりも、そこにいる住民に目を向けることが戦争の真実を伝えることだと気づいていったプロセスを描いた。それが戦後の日本への関心や、水俣に目が向くことにつながっていった。

(NHK側) 古いテープのため音声が少し聴き取りにくかったという指摘だが、大事な部分で聴き取りにくい場合は字幕を入れるなどの対応をしていきたいと思う。

1つの映像、あるいは写真の持つ影響力の功罪については、われわれもその都度、難しい判断を迫られることがある。今回の場合は、有名な写真家が残した偉業というよりは、その裏の葛藤や、1枚の写真を撮るまでにいろいろな悩みがあったということをしっかり伝えて、それを見る人がどう思うかということメッセージとして投げかけたつもりだ。

## < 「Helping Hands - The Lives of Atomic Bomb Orphans」

(9月21日(土) 10:10 ほか) について>

- 第二次世界大戦でアメリカが落とした原爆により日本は多くの犠牲を払い、たくさん原爆孤児が生まれたが、戦後に様々な人と人とのつながりに助けられ、生き延びた原爆孤児がいたのだということが番組でよく分かった。原爆孤児となった日本人男性が、戦後暮らした韓国に戻って、かつて兄弟のように暮らした韓国人男性と再会を



果たすという感動的な場面もあったが、この番組の企画によって、つまりNHKの働きかけによって可能になったのか。そのいきさつも聞きたい。

この番組は今だからこそ、全ての日本人が見るべき番組のように思う。韓国との関係がぎくしゃくする中で、韓国人の女性が日本の孤児を助けたというストーリーがいかに多くの人々の心を打つか。国際放送だけではなくて、国内放送においても、放送するという可能性をぜひ検討していただきたい。

- 番組のメッセージとして、戦争の最大の犠牲者は子どもであるということかと思いつながりながら見始めたところ、原爆孤児の精神的な里親になるという、アメリカの支援プログラムがあり、また韓国の方に救われたというケースもあった。日本とアメリカ、あるいは日本と韓国の間で、たとえ憎しみを忘れることはなくても人間がしょく罪を越えた感情を持つことができるということ伝えたいのだと思った。

- 取り上げ方が非常に難しいテーマだと思う。しかし、抑制されたトーンで、単純な美談という形にせず、バランスよく描かれていたと思う。日本で原爆により孤児になった子どもたちが、国内で救済を得られなかった中、アメリカ人や韓国人に助けられたということを、現在の彼らの状況も含めて、うまく伝えていた。日本兵に夫を殺されながら、日本人の原爆孤児を自分の子どもとして育てるという韓国人の母親のメッセージに非常に感銘を受けた。

これは今日にも通じる非常に普遍的なテーマだ。ヒューマニティーとは何か、国境を越え愛や平和を求める気持ちの重要性を考えさせる今日的な意義のある番組だ。

- 原爆孤児がどうやって生き延びたのかこの番組でよく分かり、自分自身、大変勉強になった。

日本における原爆孤児のケアセンターで暴力や差別的な扱いや、心無い言葉があったとか、親戚中をたらい回しにされたとか、国内のむごいエピソードがある一方で、海外の方に助けられた孤児がいたという事実をしっかりと伝えることの大切さが感じられた。

夫を日本兵に殺された韓国人の女性が日本の原爆孤児を助けたエピソードについて、同様な事例がほかにもあったのかどうか。そして、このエピソードを入れた理由は、現在の日韓関係の状況も念頭にあったのかも、NHKの考えを聞きたい。

- 政府のプログラムとして助けるという形ではなく、民間のジャーナリストの方たちのアイデアから始まり、さらに日本人の牧師やアメリカ人作家のパール・バック氏の協力で精神的な里親プログラムが実現している。原爆孤児を引き取り育てた韓国の方も一人だ。国際紛争や戦争など、特に殺伐とした感じになりがちだが、そういうときでも人間らしさや優しさを持てるのだということが救いのように感じた。

- 再現ドラマがあることによって話はとても分かりやすくなっているが、そこだけリアルではないので、韓国の人たちが見たら、どう感じるのかと思った。日本人の感覚とは別の何か政治的な意図を感じたりすることはなかったのか少し気になった。再現ドラマが入ると、インパクトとしてはとても強いので、番組全体のまとまり感を損な

う印象もあり、海外の人たちが見たときに、どう感じるのかを考えた。

- この番組は具体的な事例を示すことによって、歴史に埋もれていた原爆孤児の戦後の歴史を明らかにする役割を果たしたと思う。番組を通じて人々の善意が圧倒的に感じられ、しかもそれを紡いでいたのが実は個々人であったというところが、よく分かった。いろいろなエピソードが入っていたが、ドラマ仕立てになっていることがテーマを分かりやすくしていると思った。

同時に厳然たる事実として、6,500人程度と推定されている原爆孤児のうち、このように幸運にも救済された人はそのうちの一部であったという重要なメッセージを伝えることを忘れていなかったということも評価したい。

いずれにしても、戦争という人間がもたらす罪悪に対してもっとも脆弱だった子どもたちを救ったのが、人間の限りない善意だったということ、そして、その原爆孤児がたどった過酷な運命が再び繰り返されることがないように、世界平和を切に希求する関係者の声を海外の視聴者にも伝えるという番組の目的は十分に達成されていると感じた。

より大きな問題として第二次世界大戦、あるいは太平洋戦争に関わるメッセージを海外に伝えるうえで特に海外向け番組制作時に留意しておいたほうが良いと思うことがある。それは、被害者としての日本人という視点と加害者としての日本人、そういう視点の2つのバランスの取り方だ。海外から見ると、戦争を始めたのは日本であって、これに伴う犠牲者や悲しいエピソードというのは、日本人の犠牲者と同じくらいあるかと思う。

いずれにしても第二次世界大戦や太平洋戦争を題材とした場合、特に国際番組にはバランスの取れた被害者、加害者、そういった両方の面を加味しないと、なかなか視聴者には受け入れられないかと思う。そういう意味では、この番組は、真珠湾攻撃が全ての苦しみ之源であるという登場人物のことが引用されていたので、バランスが取れていてよかったと思った。

- 歴史を見ても国家というものは謝らないものだと思う。今でもアメリカでは、7割以上のアメリカ人は、原爆が戦争を早く終わらせたと思っているという調査もある。だから原爆を落としたことは正当化できるという認識は学校の授業でも教えられており、おそらく今後も消えないのではないかな。

国家と国家の関係になると、非常に非人間的な話になると思う。だからこそ、こういう「人間」の話が心を打つ。民間人だからこそできることをやっているのかもしれない。知らないこともたくさんあったので勉強になり、感銘も受けた。

- 非常に感銘を受けた。ノーマン・カズンズ氏について言うと、医学会で非常に有名な人で、その方が原爆孤児を救済する活動をやっていたとは知らなかったのが、非常に大きな発見だった。

(NHK側) 国内放送としては、まず12月上旬に、BS1スペシャルで、コメントを日本語化したものを放送する予定だ。BS4Kのスペシャル番組としても日本語化したものを放送する予定だ。できるだけ日本の方にも見ている

だきたい。

今の日韓関係を意識して作ったのかどうかだが、そもそも韓国人に救われた友田典弘さんについてのニュースレポートを昨年制作し、その当時は、今のように日韓関係は悪化していなかった。しかし、日韓関係が悪化していく中で、だからこそこのテーマをやるべき価値があると考えた。委員の意見にもあったように、国家は謝らないし、国家は戦争をする。しかし、その国家という大きな傘の下にいる一人ひとりの人間というのは優しさもあれば、こういう支え合い、それは国境や民族、国籍関係なく支え合えるものではないかということを取材から、ひしひしと感じた。

さらに原爆孤児を巡るアメリカ側の支援の話でも、今回資料をひもとく中で、これまでほとんど知られてこなかったさまざまな事実が次々と分かってきたので、一つの番組の中でできないだろうかと考えた。

またドラマの部分についてだが、友田さんは、まず原爆で孤児になって、着の身着のまま韓国に渡り、その後、路上生活をしていたこともあって、当時の写真や、その当時を物語る材料がほとんど残っていない。どうしたらこの友田さんの物語を描けるのか考え、ドラマで再現することとした。

脚色をするためではなく、友田さんの生涯をなるべく忠実に再現したいという思いからドラマ仕立てという手法を採用した。

(NHK側) 番組に至るいきさつは、昨年、別件の取材の中で友田さんを知り、ニュースレポートにしたところから番組として取材を始めた。弟分だったイジエファさんの消息の調査は私たちが主体的に行って、実際に見つけることができた。

韓国のお母さんがなぜ日本人の彼をそこまでして助けたかという話だが、なぜそこまでしたかというのは分からない。彼女はもう亡くなっており、彼女のお子さん方に聞くこともできなかったので、友田さんや取材から聞こえてくる話による。

(NHK側) 制作チームの中で、人間は加害者にもなり得るし、その加害者が、被害者にもなり得るということで、そこをしっかりと意識しなければいけないと話し合いながら制作した。加害者と被害者の意識をどう捉えるべきかと考えたときに、淡々と事実を積み上げていき、重層的に物語っていくしかないのではないかと考え、そこに注力した。

(NHK側) NHKワールド JAPANで独自に作った戦争関連番組は、アメリカ各地の100ほどの公共放送局PBSのメインチャンネルで放送されている。当初は東日本大震災の番組から始まったが、PBS担当者からNHKワールド JAPANの番組は非常に心打つものがあるということで、定期的に提供している。

## 2019年9月 国際放送番組審議会

2019年9月のNHK国際放送番組審議会（第661回）は17日（火）NHK放送センターで8人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、2019年度後半期の国際放送番組の編成について、および最近の国際放送の動きについて説明があり、意見交換を行った。ひき続き、「A Journey through Genders」、「Asia Insight」について説明があり、意見交換を行った。最後に、国際放送番組の放送番組モニターと視聴者意向の報告資料を配付し、会議を終了した。

### (出席委員)

委員長	神馬 征峰	(東京大学大学院医学系研究科 教授・国際地域保健学教室)
副委員長	河野 雅治	(日本国政府代表・中東和平担当特使)
委員	岡田 亜弥	(名古屋大学大学院国際開発研究科 教授)
委員	河合祥一郎	(東京大学大学院総合文化研究科 教授)
委員	木山 啓子	(特定非営利活動法人 ジェン 理事・事務局長)
委員	佐藤可土和	(クリエイティブディレクター、(株)サムライ 代表取締役)
委員	田中浩一郎	(慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科 教授、 (一財)日本エネルギー経済研究所理事 兼 中東研究センター長)
委員	平子 裕志	(全日本空輸(株) 代表取締役社長)

### (主な発言)

#### <「2019年度後半期の国際放送番組の編成」について>

- NHKワールド JAPANの年間の番組編成の方針について伺いたい。後期からSNSでの展開も意識し短い番組を増やす方針に変化したのか、それとも年間を通じて短い番組を増やすという方針だったのか。

(NHK側) 編成の年間方針は、日本の政治・経済を始めさまざまな情報を世界に向けて発信するという形で編成している。その中で、今回、後期編成で短い番組を中心に注力したのは、最近の視聴動向を鑑みて、放送以外のウェブ展開については、ライブストリーミングによりリアルタイムで見ただけではなく、VOD（ビデオ・オン・デマンド）というサービスで、放送後にいつでも見ていただけるよう、短いコンテンツに注力することで、さらに接触者数を増やしていけないかということも考えている。その点で、後期の編成では、新たに5分、10分という短い番組を比較的多めに編成する方針を打ち立てている。

- いつも番組審議会で見ると長時間の番組は、中身がとても濃くよいものが多い。短い番組も長い番組もよいものを放送していくためには、それぞれどのような方針があるのか。

(NHK側) NHKワールド JAPANの番組は主に28分程度のものと、週末に編成する50分程度の特集番組の2種類がある。そのほかに今年度の編成では15分サイズの番組を新たに制作した。これはスマートフォンなどの端末で見るのにも適していると考えている。長めのドキュメンタリーはしっかり骨太なものを制作し、日本を訪れたいと考えている外国人の方向けには食や旅の情報を発信する短めの番組を制作している。

後期については、東京オリンピック・パラリンピックへの機運を高めることを目的とした「no art, no life」という番組がある。知的障害や精神障害のある人の中には、正式な美術教育を受けたことのない方々もおられ、パラリンピックを意識したコンテンツと位置付けて5分サイズの番組を用意している。また「アニ×パラ」という番組はタイトルのとおり、日本の有名なアニメーション作家のキャラクターを使ってパラリンピックに理解を示してもらおう番組だ。

そのほか、「Selfie Japan!」や「Core Kyoto mini」は、これから日本に来たいと考えている方々に向けて、人気の自撮りスポットを紹介するものや、人気の観光地である京都にこんなすばらしい場所がある、ということをお伝えする。このようなコンテンツを用意している。

- 短い番組を放送するというのに連動して、ドキュメンタリーなど優れた長い番組へのアクセスが増えているなど、何か分析はあるか。

(NHK側) 今までのところ、VODへのアクセス数を見ると、番組の長さはあまり関係ないという結果が出ている。長い番組でも興味があるものは見られているので、やはり中身が一番大事とは思いますが、短い番組の最大の利点はSNS用に再編集することなく投稿できるところだ。本当はウェブサイトで見たいが、現在、ほぼ一日SNSだけを見て過ごしている方がとても多いので、短い番組をそのままSNSに投稿することで、より多くの方に見ていただけるのではないかと考えている。

SNSに投稿した番組にNHKワールド JAPANのウェブサイトのリンクを張ることで、コンテンツを初めて見た方を、ウェブサイトに誘導することができる。「アニ×パラ」も第1話を丸ごとSNS発信して、第2話以降はウェブサイトへ誘導するという試みを行っている。このように短い番組をSNSにそのまま投稿することで、いろいろな番組にまずは1回接触をしていただくことを考えている。

## < 「A Journey through Genders」

(7月6日(土) 10:10 ほか) について>

- 性同一性障害を抱える若者の9年間を記録したドキュメンタリーということで、大変な時間をかけて制作しており、苦労が多々あっただろうと思う。すばらしいドキュメンタリーだった。ジェンダーの問題は、非常に難しい。性別適合手術をすれば解決するという問題ではなく、手術をしてもその体は自分にとっては認めがたいものであるというところが、この番組の重要なポイントだと思う。たぶんこの方だけでなくほかにも例があるのではないか。その点に関してもう少し、別の方の例があれば、さらに説得力があったのではないか。

この問題は非常に注目されており繊細なテーマであり、マスメディアによる問題提起が期待されると思う。例えば今まではトランスジェンダーという問題が提示されて来たが、この番組は、トランスセクシュアルな、つまり生物学的な性差というものも超えて行こうということ、ポジティブに提示しようとしている。これまで議論されてきたところから一步を踏み出そうとしていると感じた。

生物学的に、自分の体を変えるということに対して肯定的なメッセージを発することは、新しい問題に踏み込んでいくことになるので、非常に深く考えなければいけない問題だ。LGBTQについてはそれぞれ対応のしかたが違う、いろいろな考え方があるということを考えていかなければいけないと思う。そういう点で、もう少し視野の広さといった気配りがあってもよかったのではないか。

- 主人公の小林空雅さんは非常に話も上手な方で、一言一句が視聴者の心にしみ込んでくる。例えば女性の体であるということに対して、「意識しても理解できない、それはお化けと同じだ」というような発言や「ないはずのものを取り去るのはマイナスからゼロになることだ」という発言は、象徴的な発言だったと思う。男性と女性という2つの性しかないという思い込みがあった自分には、この言葉はすごくショックだった。

なぜ小林さんがこういった性的違和感を持つようになったかという過程を、番組では把握できなかったが、そもそもこのような疑問を持つこと自体、私自身がトランスジェンダーという問題をよく理解していないことへの裏返しであり、そのことを番組を通じて考えさせられた。クリニックのドクターの「自分の体が嫌いで自傷行為に走る人もいる」という発言もあったが、このようなことが起きているとすると、社会が真剣に取り組む問題なのではないか。

この番組がすばらしいのは、ストーリーが問題提起だけで終わらず、小林さんが同じ悩みを抱える方々との出会いによって、自分に嘘をつかない正直な生き方を模索するようになったということだ。枠の中にあるものが正常であり、枠の外は異常と決めつけること自体がおかしいことだという「ダイバーシティ・アンド・インクルージョン」という多様性を互いに認め合うという考え方があるのではないかと、番組を通じて改めて気づかされた。

小林さんに、自分のことが好きかと問うと、15歳のときは「自分を好きでも嫌いでもない」と答え、17歳のときは「自分を許してやろう、頑張ろう」と言い、最後、24歳のときは「いまの自分は好き、人はみんな嫌いなところを持っている、そんな

自分だからこそ知り合えた友人や大切な人がいる、よくやったな、自分、誰よりも愛したい」というメッセージで締めくくっているというところがすばらしいと思う。

この人らしい生き方だと思った。ぜひ今後も小林さんの取材を続けてほしい。

- 小林さんの凄絶（せいぜつ）な心の動きに寄り添うのは大変だろうが、それでも語ってもらいたいと、いろいろと質問を繰り返すけれどもなかなか語ってもらえなかっただろうと感じて、取材したスタッフの皆さんの努力にも敬意を表したい。

同時に小林さん1人の問題ではないはずで、同じような境遇の人たちがほかにいるのではないかと。友人や周辺の人々、男性から女性になった先輩のインタビューなどもあったが、どのようなサポートをどのような人々から受けたのかということがもっと伝わると、同じように悩んでいる人たちに対し、どのようにサポートを求めればいいのかということに関してヒントを与えられたのではないかと。

せっかくNHKワールド JAPANでこの番組を放送するのであれば、他の国にはどのような事例があるのかといったことも一緒に伝えることができると、さらに普遍性が増したのではないかと考えた。

- 最近、LGBTQに関する日本における関心が非常に高まってきて、特に高校生や大学生といった若い方の中でこの問題への関心が非常に高まっていると感じている。このような番組は非常にタイムリーだと思う。一方、社会がどう向き合うべきかというところまではなかなか掘り下げられてなかったようにも思った。主人公の周りの方は、母親も含め、友人たち、就職先の居酒屋のご夫婦と、皆さん受け入れる方ばかりだったと思う。しかし実際の日本社会の中では、おそらくこの番組では浮かび上がらなかった差別、あるいは閉鎖性や息苦しさといったものも性的な多様性を持っている方々は感じているのではないかと。そういうところにも焦点を当てつつ、その上で社会はどうあるべきかという問いかけが明示されるとよかったと思う。

国際放送なので、例えば日本の現状に関するデータを示すなど、現状がどうなっているかについての説明も若干あるとよかった。

- LGBTQの問題は、各国でそれぞれの法制度、社会の受容性に違いがあるにしても、おそらく今の時代ではどこでも話題になっていると想像する。その中で、このような番組を放送するのであれば、日本人であるからとか、日本に生まれたからということで、日本の環境がどうであるのかということにもう少し注目してもよかったという感じがする。番組ではいくつかの事例は挙がっているが、もう少し深掘りしたほうが、よりよくなったのではないかと。

- 人間のことはまだ、いろいろわかってないことがたくさんある。例えば自分の仕事においてもたまたま関連することがあり、結果的に答えは出ていないが、思い込みで人を傷つけてしまうことがあるんだろうなど、いろいろ考えさせられた。

番組では、受け入れてくれる人たちが多かったことで、日本の現状がどうなのかということとはわからなかったが、ぜひこの後も取材を続けてほしい。何十年単位取材できれば、すごい番組になるのではないかと。すばらしい番組だった。

- 自分がこの問題についていかに無知だったかと、本当に驚かされた。繰り返し見たが、2回目、3回目と、見るのがだんだんつらくなった。最近のほかの番組との比較において、これほど自分自身にとってインパクトがあった番組はない。こういう番組を見るということ自体が非常に重要だと改めて強く思った。

社会が変わりはじめ、そういう人が自分の身近にもいるとわかってきているのではないかと思う。これをどうやってわれわれが理解を深めていくかということが重要だと思う。こういう番組を見ることも方法の1つだと思うが、それに向き合って生きているという人だけでなく、さまざまな分野でプロフェッショナルとして活躍している人をぜひ番組で取り上げたらいいと思う。

- 非常にいい番組だった。いくつもの重要なポイントが提示されたが、小林さんの成長する過程で何度も声優として貢献したいと言っているシーンがある。いろいろとつらい思いをしてきたかもしれないが、それでも声優、あるいは何者かとして社会に貢献したいというのを言い続けている姿にとっても感銘を受けた。

テクニカルなことでは、最近の用語はLGBTQ+（プラス）というふうになってきているので、そういう用語についても確認されたほうがいいと思う。

- (NHK側) まずなぜこの番組を作ったのかということだが、最初、小林さんが中学生の時にカミングアウトして女性から男性になりました、というニュースリポートを担当ディレクターが作った。そのことがきっかけで、小林さんへの取材を続けて来た。

LGBTQというのは最近よく話題になっているが、日本ではどういう問題があるのだろうか、国際放送としてどう伝えればよいか、かなり悩んだ。14歳からずっと取材し続けており、特に幼いころの小林さんの存在が本当に大きく、9年間の成長を見て、こういう若者が日本にいるということを伝えたいと考えた。もちろん、日本にどういう問題があるのかなど、もう少し内容を広げられればよかったかもしれない。

小林さん自身の物語がだいぶ強く出て、日本が抱える個々の問題については十分伝えきれなかったかもしれない。同じ悩みを抱える人たちとの交流などのシーンを入れたが、日本が抱える問題を全部伝え切れていないということは作っていても感じたところだ。世界の状況や、日本と世界の立ち位置の違いがわからないという指摘については今後の参考にしたい。

インタビューで悩みや差別について一生懸命取材したが、なかなか難しいところがあった。続編をとという声も頂いたので、今後、引き続き取材していきたいと思う。

## < 「Asia Insight」 Performing Your Story in China

(8月9日 (金) 10:30 ほか) について>

- まず中国で表現の自由を求めて活動する若者を取材したということが、非常に難し



かったのではないかと思った。集まって来る観客のストーリーを聞いて即興劇にするというところがポイントだ。中国にはこれほど語りたい民衆がたくさんいるのだということをお知らせしてくれ、非常にインパクトのある番組だった。

彼女たちがこの即興劇を続けなければいけない、この劇団をやらなければいけない理由も、そのような人たちがいるから、その人たちに応えるんだという思いでやっていることがよく伝わった。演劇というのは人々の声を伝えていくという意味でも、非常に重要なパフォーマンスだと思う。中国における社会問題をこれほどダイレクトに教えてくれた番組というのは初めて見たので、非常によく取材されていたと思う。

- よくこの取材対象を見つけたと思ったが、これは中国ではとても珍しいことなのか、このような動きがどんどん出てきているのかということを知りたいと思った。取材自体が自由にできたのかについても聞きたい。短い番組なのにとっても入り込めて非常にいろいろ考えさせられ、大好きな番組だ。

会場側に断られて上演できなくなったシーンについて、これが規制にあたるかどうかははっきり言わないのは、難しさがあるのか。それは感じてほしいということなのか。この先、若者がどうなったのか。見た後にたくさんの疑問が湧いた。

- 劇団が直面している問題を通じて、現代中国の若者の表現の自由と、当局の検閲の間のせめぎ合いと受け止めた。

自分なりに考えると、劇のスタイルが双方向であるがゆえに、集会の自由に対する規制や取り締まりということも視点に入っているように見えて、NHKとしてはかなり大胆に、婉曲的にはあるが中国当局の規制に対して批判的な視線を持った番組だと私には見えた。一方で、この番組の放送後に中国側からリアクションはあったのか。

(NHK側) 中国当局からは、特段リアクションはなかった。

- いろいろ疑問が湧く番組だった。まずこういう人たちはどれぐらいいるのかを知りたい。取材が難しかったのかもしれないが、もう少しそういうことがわかると、この動きがどういうパワーを持っているのかというのがわかりやすかった。

非常にチャレンジングな番組だったと思う。

- 非常に興味を持って見た。演劇という意味では通常の演劇が演じる側が観客に伝えたいものがあって観客の心に訴えるものだと思うが、この中で描かれていた演劇方法というのが、観客の心に寄り添って観客から力を得て、それを表現していくという、その表現方法が非常におもしろいと思った。

中国の政治体制の中で今の若者たちが何を考えているかという本音については、通常なかなか情報が入って来ないが、こうした動きがあるということにまず興味を持った。これが、たまたま広州だけで起こっているのか、あるいは全国的な広がりがあるのか。彼女たちだけが突出しているのか。あるいは同じような演劇という方法であれ、また別の表現方法であれ、やんわりと体制に対してチャレンジするような動きがほかにもあるのかどうかということも興味深く思った。

会場も借りられないくらい当局に監視されている中で、別の会場では300人もの観

衆がやって来たということも非常に興味深い。監視の目があるかもしれないのに自分の感情をみんなの前で吐露する人たちがいるということも、非常に興味深かった。そういう意味で、なかなか外からは伺い知れない現在の、特に若い世代を中心に見た中国をうまく切り取って伝えており、興味深く見た。

- 最初に番組の目的は何なのかと考えた。今の中国は自由な言論が許されないような社会であることはわかっているが、それを自分の信条や、言いたいことをこういったストーリー仕立てにして、広州の劇団が演じる。SNSで自分の言いたいことを言葉にして、SNSを使って流すということは世界中であるのだが、それを演技で表現する。これは非常に新しいやり方だと思うが、逆に言うと、中国の人たちは、言いたいことが言えないのでこういった芝居で表現する。これによって自分の言いたいことが表現されているということで満足をしているのか、していないのか。番組を見る限りは、劇団の人たちと参加者たちの心が通じ合って涙を流しているようなシーンもあったが、本当に自分の言いたいことがその芝居によって表現されていたのかどうかわからなかった。

また、今は6人の少女の集団だが、彼女たちは彼女たちでまた、国の抑圧的な部分と戦いながらやっている。そして生活実態も一部表現されているが、国の圧力を受けながら頑張っているところに焦点を当てようとしたのか、制作者の意図を知りたいと思った。

- おそらく中国の社会には体制への不平、不満、批判などが渦巻いていると思う。ただ、このような活動を当局が認めたということはおそらくこの人たちの集団はあまり体制を揺るがすようなことはしないだろうと当局は考えて、認めたのだと思う。

むしろ、違和感があったのは、そこで行われる即興劇のテーマが体制の問題とは全く無関係の私生活の話ばかり出てくることだ。この違和感は、体制に対する不満がもっと強いであろうに、そういうのは一切におわせないようなやり方の不満を出して、それに対応する。そこに、日本の社会とは違う社会、いわゆる監視社会のような中で生きている人たちの生き方がにじみ出ていたような気がして、非常に興味を持った。

この番組は中国で放送したのか。当局は、このぐらいならやらせておいたほうが、香港みたいなことにならなくていいと思ったのではないかという印象だ。

- 全般的なことだが、このような番組を見ると非常に感動するが、タイトルを見ただけで視聴者がこの番組を率先して見るかというところ、そうでもないところがある。どのようにしたら、見ようというふうに思えるだろうかということ、常に感じている。その点、説明されたように、短い番組を作って効果的に発信するなど、何か工夫があるといいと思った。

(NHK側) 中国で取材する場合、基本的には取材の意図等を事前に示した上で、当局の了解を得て取材する。もちろん、こういう劇団を取材したいとの企画の趣旨を提示し、取材許可を得た上で行った。

このような劇団が他にもあるかどうか確認することは非常に難しい。こ

の劇団のスタイルは 1970 年代にアメリカで発生した即興劇が香港を經由して深圳、広州に入ってきたそうで、結構人気があるようだ。

テーマについては、高度経済成長による格差や一人っ子政策の影響などさまざまな社会問題がある中で、中国の若者の現状や悩みなどがすくい取れないかという意図があった。取材したディレクターの報告によると、どちらかというと発展して豊かになってきた中国の若い人たちの孤独や、連帯を求める傾向が表れてきているのだろうということだ。中国の方は比較的自分をアピールする部分に長けており、それと合わせて誰かに語りたい、連帯したい、つながりたいという思いがあるようだ。今の若い世代の悩みのようなものを、非常に特徴的に捉えることができたのではないか。

劇団員に体制への批判的なニュアンスがあるかというのは、正直なところ、あまりないと思っている。彼女たちも中国各地から集まって来ているが、比較的恵まれた家庭の若者たちだ。彼女たちなりの正義感と、自分たちの世代の思いを何とかすくい取りたい、自分たちで表現したいというのが彼女たちの思いだ。

## 2019年7月 国際放送番組審議会

2019年7月のNHK国際放送番組審議会（第660回）は16日（火）NHK放送センターで9人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず最近の国際放送の動きについて説明があり、意見交換を行った。引き続き、「Split-Screen Documentary : Nuclear Ghost Town - After 8 Years」、  
「Easy Japanese for Work」について説明があり、意見交換を行った。最後に国際放送番組の放送番組モニターと視聴者意向の報告資料を配付し、会議を終了した。

### (出席委員)

委員長	神馬 征峰	(東京大学大学院医学系研究科 教授・国際地域保健学教室)
副委員長	河野 雅治	(日本国政府代表・中東和平担当特使)
委員	岡田 亜弥	(名古屋大学大学院国際開発研究科 教授)
委員	鎌田由美子	(株 ONE・GLOCAL 代表取締役、クリエイティブ・ディレクター)
委員	河合祥一郎	(東京大学大学院総合文化研究科 教授)
委員	木山 啓子	(特定非営利活動法人 ジェン 理事・事務局長)
委員	佐藤可士和	(クリエイティブディレクター、株サムライ 代表取締役)
委員	佐藤たまき	(古生物学者、東京学芸大学教育学部 准教授)
委員	田中浩一郎	(慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科 教授、 (一財)日本エネルギー経済研究所理事 兼 中東研究センター長)

### (主な発言)

#### <最近の国際放送の動きについて>

- SNSと連動した番組が増え、視聴者からの反応を得られるようになってきているのではないかと思うが、何か傾向があれば伺いたい。

(NHK側) NHKワールド JAPANでは英語をはじめとする多言語でSNSを展開している。最近の傾向として、英語では、外国人労働者に関する番組や海のプラスチックごみの問題などが世界中のユーザーの反響を集めている。

先日、「クローズアップ現代+」（総合テレビ、毎週火曜・水曜・木曜、午後10時放送）を英語化した番組「Today's Close-Up」で、日本語学校に在席している外国人留学生が日本国内で大量に失踪している問題を取り上げた回をNHKワールド JAPANのウェブサイトにもVODとして掲載したが、1日に2,000回以上再生されるなど、視聴者の関心が非常に高かった。こうしたデータ等を参考に、今後もVOD化する番組を選定していきたい。

- 「NHK NEWSLINE」で取り上げている天安門事件や最近の香港についてのニュ

ースは、中国メディアの取り上げ方とはずいぶん違うと思う。今、中国語チャンネルも設けているが、中国人のユーザーから何かフィードバックはあるのか。

(NHK側) NHKワールド JAPANのウェブサイトには、中国から必ず接続できるとは限らないが、一定のアクセスはある。フィードバックを得ることができる最大手のSNSも、それ自体が中国で使用できないため、中国に住んでいる中国人からのニュースへの反応は非常に取りにくい状態だ。例えば香港のニュースなどを出したときにいろいろなコメントをいただくが、それは世界中の方からのコメントであって、中国にいる中国人の方の書き込みは見受けられない。

中国からの反応の取り方は、考えていかなければと思っている。

(NHK側) 「NHK NEWSLINE」を含め、NHKワールド JAPANそのものが残念ながら中国本土では放送されていない。中国政府からの許可が得られないので、衛星を使って現地で放送することができないためだ。ただ、世界中に中国語話者がたくさんいるので、NHKワールド JAPANの中国語サービス「NHK華語視界」等を通じ、できるだけ情報をお届けしようとしている。中国本土においては視聴自体が難しくとも、引き続きこの取り組みを続けていきたい。

○ 7月、8月は東京オリンピック・パラリンピックの1年前にあたる。世界に向けて、日本で1年後に開催されるという報道はするのか。

また戦争と平和に関して、5月、6月に第2次世界大戦の戦勝記念日を迎える国が世界にはたくさんある。日本人は終戦記念日がある8月の重要性についてよくわかっているが、国際放送で8月に戦争と平和を特集するという意義をどう考えているのか。

(NHK側) オリンピック・パラリンピックについては、国際放送での放送権を保有していない。国内で放送する場合は、権利保有者として、競技などの映像を使えるが、英語で発信するNHKワールド JAPANでは競技映像を自由に使うことはできず、来年の大会期間中も競技映像は使用についての制限がある。

そのため関連情報として、定時番組の「TOKYO EYE 2020」や「J-Arena」といったスポーツ番組で、大会に向けて頑張っているアスリートなどを紹介している。

戦争と平和に関する番組を8月に編成するという意義について、ヨーロッパであれば、指摘のとおり5月だが、日本の放送局としては、やはり8月の広島、長崎や、そして終戦記念日の中継を含めて伝えていきたいと考えている。

○ TICAD (アフリカ開発会議) の第7回が8月に横浜で開催されるが、この期間アフリカに向けた特別な活動はするのか。

(NHK側) TICADの会場に隣接する展示場で、NHKワールド JAPANのプロモーションを行う予定だ。対象は主にアフリカに関するビジネス関係者向けだが、NHKワールドが音声サービスを中心に、アフリカでも多言語で展開していることなどをプロモートしていきたい。

テレビでは、討論番組「GLOBAL AGENDA」でTICADを取り上げ、国内向けにBS1で日本語で展開する予定だ。

## < 「Split-Screen Documentary : Nuclear Ghost Town - After 8 Years」

(5月25日(土) 10:10 ほか) について>

- 福島の震災直後の映像と現在の映像を、1つの画面で並べて見せる2画面の構成は圧倒的な説得力があり、福島は何も変わっていないということを知らしめた。企画・構成が非常によくできている。福島で何が起こったのかや、いまだにその禍根が残っているということを深く認識させられた。

ただ福島の人々の声がもう少し聞くことができたらよかった。ところどころで現地の方の声が入ったり、涙ぐんでいる方々の映像はあったりしたが、実際にどういうことを経験されたのかをもっと肉声で聞くことができれば、さらにインパクトの強い番組になったのではないかな。

- 浪江町の方々の苦悩を共感できる、非常にすばらしい番組だった。ナレーションが最小限なので、自分なりに感じたり、考えたりすることができ、テレビ番組だからこそできたと感じた。

除染されたものがどこにどれくらい溜まっているかなど、もう少し映像で見られるとよかった。

日本語版を英語化したということだが、以前から国際放送と国内放送で同じ番組を共有してはどうかという意見が何度も審議会で出ているが、それが実現されていて非常によかった。

- 浪江町請戸地区をめぐるさまざまな現実を直視する構成と受け止めた。

構成として、純粹な津波被害の部分と汚染によって住めなくなった、言わばゴーストタウンの部分の混在しているので、もう少し構成をはっきり分けたほうが、この“Nuclear Ghost Town”の“らしさ”を表せると思った。

エンディングで再び2画面になり、左側に映る東京の街並みの明るさと、右側の請戸地区ないし浪江町の暗さがよくわかるが、東京の明かりが、福島第一原子力発電所を含めた地方にある原発の発電によってそもそも成り立っていたのだということを出してもよかったと思った。

- 非常によかったと思う。こういうギミックが利いた番組を作ると、普通はギミックが立ち過ぎてしまい、内容が頭に入らなかつたり、どこを見ていいかわからなくなつたりしがちだが、これは番組内容とギミックとがぴったり合っていて、コンセプトが

うまく視覚化できていた。

この「Split-Screen Documentary」は今までも放送したことがあるのか。

(NHK側) このような手法で制作した番組はこれまで放送したことはなく、初めての試みだと思う。

- 映像が揺れており、その揺れ方が右と左で違っていたので、少し見づらい。長い番組なので、もう少し一緒になるともっと見やすいのではないかと感じた。

誰にどんなメッセージを伝えたいのか伺いたい。震災以降に生まれた子どもや震災を知らない人にも見てもらうためには、原子力発電所からの距離だけでなく、当時の気象条件など浪江町がゴーストタウンにならざるを得なかった背景をもう少し説明するとよかった。

非常に感情的にこみ上げてくる部分はあったが、果たして感情だけでいいのだろうかと思った。費やされた時間だけではなく、どれだけの人が投入され、どれだけのお金がつき込まれたのか、ボランティアはどれだけ行ったのか、いろいろな数字的な裏付けがあったと思う。

- 非常に見応えのあるドキュメンタリーだった。特に2011年と2019年をこれだけ丁寧に同じ場所で検証できたということは、これだけ時間がたっても荒涼たるゴーストタウンのようになったまま復興が進んでいないということの後世に伝えるという意味でも非常に意義のあるドキュメンタリーだった。

2019年の姿が荒涼とした荒れ地で、がれきは片付いているけれどもほとんど復興が進んでいない映像を見て、改めて問題の大きさを感じた。映像そのものが非常にパワフルなメッセージを発していると感じた。

1981年の浪江町の映像も紹介されていたが、よく残っていたと思った。1981年、2011年、2019年と3つの歴史的な地点で検証できたことも興味深かった。また何年かたった後に同じ場所を訪れるというドキュメンタリー番組ができるとよいと思った。

住民1万5,000人の人口がわずか900人になってしまったということで、いまだ帰って来られない住民の方々、もう帰ることをあきらめた住民の方々もたくさんおられると思うが、そうした方々の声も取り上げると、もっと深みが出たのではないかと感じた。

- 特にドキュメンタリーとして優れていると考えたのが、効果音なども入れずに本当に淡々と映像を流していく番組だったので、それがかえって怖さと悲惨さを強調すると感じた。

とても怖いと思ったのが、2011年の映像で、浪江町役場の方の「これで人が歩いていけばいつもと全然変わらないのに」ということばだ。「人がいないだけで、普通にお店の看板などは出ている」ということを何度も言っていて、原発事故の被害とはこういうものなのだと実感した。

- 傑作だと思った。過去の映像だけ、あるいは現在だけの映像ではなくて、対比ができてドキュメンタリーとして今どうなったかというのは、日本人にとっては非常に関心があるところだ。同じ道を通って映像を撮るのは技術的に大変なことだと思ったが、

すばらしい試みだった。

世界では毎月のように災害が起こっており、これも外国の人の目からは、多くの災害のうちの1つとしか映らないかもしれない。この番組を外国向けに放送するのなら、やはり冒頭数分は、何が起こったかということに費やすよう、少し編集し直したほうがいいのではないかと思った。

例えばインドネシアの大津波の話をして、日本人がそれがいつだったか思い出せる人はあまりいないだろう。外国の方に見てもらうには配慮が必要だと思った。

もっと福島の人声を聞けたらよかったと思った。大変情緒的な部分、感情的な場面が多かったと思うが、約50%の人はもう浪江町には戻って来ない、30%の人は迷っているということを探りできないものかと思う。なぜ帰って来ないのか、なぜ帰って来られないのかという声は、もしかしたら、タブーかもしれない。それは、もう仕事がないから帰らない、農業ができないから、漁業ができないから、原発で働いていて職がなくなったから、というようなことが、ゴーストタウンのようになってしまった背景にあるはずなので、そういう人声を、できれば聞きたかった。そういう声が入っていたらさらに感銘を深めたのではないか。

- タイトルの「Nuclear Ghost Town」だが、“Ghost Town”の後にクエスチョンマークを付けるぐらいのほうがタイトルとしてよりふさわしかったのではないか。

2画面の構成は、比較の場面が多すぎ、似たような画面が非常に長く、少し退屈に思えるところがあった。

- (NHK側) 2011年に、当時の浪江町長の許可を得て現場を記録した。そのときは「クローズアップ現代」の取材の一環ということもあったが、特に町側の気持ちとしては、まだ震災から1か月の段階で住民の方々は家がどうなっているのか一切わからないので、ぜひ記録して見せてほしいという話だった。だから8年前は、最初は福島県域で放送して、その後、全国でも放送するという経緯だった。

8年がたって、久しぶりに現場を訪ねたところ、変わっているところもたくさんあったが、変わってないところもたくさんありがく然とした。だが、それ以上がく然としたのは、自分自身に対してだった。この風景を8年前にあれだけの衝撃を持って見つめたのに、忘れてしまっている、忘れて東京で過ごしているということに気が付いたからだ。自分に対して、それでいいのか、という気持ちから、この2つの風景を比較して見るということ、再び思い出すということが大事なのではないかと考えて制作した。だから、誰に見てほしいと考えたかと言えば、最初は自分自身だった。また、当時、東京では計画停電などかなり節電をしていたはずなのに、今はそんな状態ではなく、何不自由なく過ごしている人たちに見てほしいと思った。そして、それをさらに世界の方々に見ていただくことで、どういう感想を持っていただけるかということ強く考えながら制作した。

海外の方に向けて作るのであれば、冒頭で、2011年の出来事をふり返ってもよかったというのは、そのとおりだと思った。今後の参考にしたい。

2画面での比較が多すぎたのではないかという指摘だが、当初は全部2



画面にしようと思っていた。福島の人やデータをもっと入れるべきではないかという指摘については、そのとおりの面もあるが、今回はいろいろな選択がある中でナレーションを最低限にして、この風景の比較の中で視聴者に考えていただきたいということを番組の趣旨としたので、データの紹介は抑え目にしたという面もあった。

今回、いろいろな方に見ていただき、思いのほか伝わる部分があったので、今後、この形で何年か後にということも含めて考えていきたい。

- いったい誰のために作ったのかという質問に対して、まず自分である、というコメントに非常に感銘を受けた。アメリカの哲学者・思想家のラルフ・ワルド・エマーソンが、「自分の心の奥深いところで真実であることはすべての人にとっても真実である」というようなことを言っていたと思うが、まさにその思いが映像として作られたものではないかと感じた。

## < 「Easy Japanese for Work」 #10 Offering support

(6月10日(月) 9:45 ほか) について>

- 非常によくできていた。以前視聴した、昨年度後期のテレビ定時番組“Easy Japanese”よりもわかりやすく、オフィスや仕事で使っている一般的な会話で、教科書の中には出てこないようなことばも多く散りばめられていた。日常の仕事のコミュニケーションの取り方も自然だった。  
ロールプレイの設定で疑問に思ったのは、外国人が多くいるITの会社なのに、名刺の発注が紙だったことだ。もう1つは、別のコーナーで、接待で回転ずしを使うという話があったが、一般的に日本では、そういうのを接待と言わないと思うので、誤解を招く情報を伝えているような気がした。
- 現在、日本社会で外国人材の受け入れが拡大しているので、こうした番組は非常に重要で、今後日本で仕事をしたいと考えている人もぜひ見たいと思える番組だ。  
学習番組としてどう評価するかという場合は、ユーザーの声を拾うことがまず第1だと思う。もし、すでに番組モニターの声があるのなら教えていただきたい。それを踏まえて、語学学習としてどうあるべきかを考えていくのだと思う。  
番組としては、ベトナム出身のゴックさんというキャスティングが非常によかった。ゴックさんが非常に一生懸命、仕事に意欲を燃やし、それ以上に「日本語をやりたい、私もいい先輩になりたい」という、非常にポジティブなメッセージを彼自身が発しているの、語学番組以前の段階で、日本に来て頑張ろうというメッセージ性を持っている番組になっており、評価できると思った。
- ゴックさんの最後のコメント「いい先輩になりたい」ということばで、この番組に対する好感度が上がった。  
ロールプレイでゴックさんが新人を教えるという設定だが、日本人の新入社員の日

本語がとても不自然だった。日本語学習番組だからはっきりと話しているのかもしれないが、普通の人にはこんなにはっきりしゃべってくれないので、違和感があった。しかし、きっとこの番組を見る方は、録画して少しずつ巻き戻しながら何十回も見るのだらうと思うと、これでいいのかもしれないという感じもした。

- 日本語の学習番組としては、非常に実践的な内容である。一方で、日本語話者でない人がロールプレイに入ると面白さはあるものの、正しい日本語の発音を理解してもらうには、返って心もとないのではないか。

ロールプレイの場面の漢字を選び、その表現を紹介するところで、今回は「見」という漢字を使って、見解、意見、見る、などだった。音と訓の使い分け、漢字の読み方が出てくるが、これはかなり高度で、上級の部類に入っているとも思える。上級コースという設定なら理解できるが、どのレベルの日本語学習者をターゲットにしているのかがよくわからなかった。

- とても興味深く見た。ただ、見ていてなかなかロールプレイが始まらないと感じた。語学を勉強したい人が見たときに、もう少し実際の会話を勉強する時間を長めに取ったほうがよかったという気はした。

このタイトルを見たとき、てっきり外国人の新人に日本人が教える番組かと思ったが、外国人が日本人の新人に教えるという設定がとても新鮮で、外国人が日本の職場にこれだけ浸透してきているんだということを実感した。

- 基礎を学んだレベルの外国人を対象としているということだが、キーフレーズが「それならこれを見るといいですよ」で、その中で語彙の説明があったのが「見る」ということばだけで、ほかのことばについては一切説明がなかった。これで1つの単語、動詞だけを理解しても、ほかの文法、文の構成といったことに対しての説明をもっと加えないと、初学者や少し基礎を学んだレベルの人にわかるのだろうかという疑問を持った。もう少し、日本語を学ぶという視点での説明を加えるといいのではないか。

- 回転ずしで接待というのは、何となくおもしろくしようとしているのが透けて見えて、少し無理があるような気がした。接待の話をするのかと思ったら、かっぱ巻きの話になっていったので、雰囲気でごまかしているように見えた。何が言いたいのかという感じがした。

- 日本にいる外国人の若い人たちで、相当多くの人が悩んでいることの1つは、自分たちはこういうふう考えるのだけど上司を説得できないということだと思う。

例えば日本人の部長をどうやって説得するか。こういうふうにするとうまくいくとか、日本的なやり方で相手の感情も傷つけずにうまくいくし、上に対してこういう説明をしたら評価されるなど、外国人目線でどのような日本語を知りたいかということを考えてらどうかと思った。もし今までにこのようなテーマをやっていなかったら、番組のテーマにするなど考えてもらいたい。

(NHK側) レベル設定は、ラジオ国際放送の「やさしい日本語」を終えたくらいのもので

想定だ。国際交流基金が設定している日本語技能検定試験のレベルはN1からN5まであり、N4、N5が基礎レベルで、N1、N2が上級レベルだが、その橋渡しをするレベルだと考えている。

講座は、当初から放送だけで完結するものとは考えておらず、日本語の文の仕組みや語彙の説明、標準的な発音によるモデル会話、実践的な課題などを盛り込んだウェブサイト、今秋に公開予定だ。VODやウェブサイトを繰り返し視聴してもらうことで、学習を深めてもらえるコンテンツとしたい。

実際のユーザーの声の集め方について、該当するレベルの日本語学習者を絞り込んでランダムにフィードバックを取ることが難しく、課題と考えている。

番組で立てる学習テーマ自体が、出演している外国人労働者本人、同僚、上司から、実際に職場の日本語コミュニケーションにおいて課題となっていることを聞き取った上で、専門家と協議しながら設定しており、その制作の過程で得られる彼らの声を大切にしていきたい。

(NHK側) 名刺の発注が紙である設定については、確かに現代においてはオンラインでやるようなことかもしれないが、テレビ講座として端的にわかりやすく、かつ、学習するフレーズがうまく入りやすいと考えて決めた。回転ずしの場面については、少し通な日本語を話してもらおうという意図のコーナーであったが、指摘のように、今後、さらに改善の余地があると思ったので、参考にしていきたい。

今後のあり方として、外国人目線で日本人への対応のしかたを学ばせていくべきではないかという指摘については、少しずつ試している段階だ。

例えば、日本の職場ではいろいろな人がいろいろな指揮系統で業務を振ってくることもしばしばあり、それについてどう対処していくか、どう複数の業務の優先順位を確認するか、といったテーマについて、取り上げていく予定だ。

ロールプレイの日本人の日本語が明瞭過ぎて不自然だとの指摘があったが、俳優が演じており、外国人向けの教材としては聞き取りやすい日本語がよいと考えた。一方で、こうしたやり取りは実際の職場では少ないかもしれないという点については、ジレンマでもある。多くの指摘を頂いたので、今後に活かしていきたい。

## 2019年6月 国際放送番組審議会

2019年6月のNHK国際放送番組審議会（第659回）は18日（火）NHK放送センターで9人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず最近のNHKの動きについて、続いて最近の国際放送の動きについて説明があり、意見交換を行った。ひき続き、「Medical Frontiers Special」、「Ask the Doctor」について説明があり、意見交換を行った。最後に国際放送番組の放送番組モニターと視聴者意向の報告資料を配付し、会議を終了した。

### (出席委員)

委員長	大西 洋	(日本空港ビルデング(株) 取締役副社長執行役員)
副委員長	神馬 征峰	(東京大学大学院医学系研究科 教授・国際地域保健学教室)
委員	岡田 亜弥	(名古屋大学大学院国際開発研究科 教授)
委員	鎌田由美子	(株) ONE・GLOCAL 代表取締役、クリエイティブ・ディレクター)
委員	河合祥一郎	(東京大学大学院総合文化研究科 教授)
委員	河野 雅治	(日本国政府代表・中東和平担当特使)
委員	佐藤可士和	(クリエイティブディレクター、(株)サムライ 代表取締役)
委員	塩見美喜子	(東京大学大学院理学系研究科 教授)
委員	田中浩一郎	(慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科 教授、 (一財)日本エネルギー経済研究所理事 兼 中東研究センター長)

### (主な発言)

#### < 「Medical Frontiers Special」 Search for Superfoods in Niigata: Rice (1月13日(日) 8:10 ほか) について >

○ 新潟の米の話は、参考になることがたくさんあった。いかに日本の米が健康にいいのか、メタボリック症候群から始まり、血糖値やコレステロールを下げ、脂肪まで吸収してくれるといいことづくめだ。しかもこうじやみりんを作る。あるいはみそや酒を造る。非常に深みのある日本の食文化、特に米の文化を紹介したことは大変によかったと思う。

ただ、これは日本人にとっては非常におもしろいが、果たして外国人がこれを見てどれほど感銘を受けるかというところは、注目すべきだ。なぜなら、水稻の米を食べている地域は世界の中ではそう広くない。陸稲を食べているアフリカもあれば、米は野菜だと考えているヨーロッパやアメリカのような国もあり、そういう人たちにとって米のありがたさというのはどれほど理解されるのか。あるいは理解したとしても、それが自分たちの生活にどれほど有益かというところは少し疑問が感じられる。

そういう国際的な目を意識して、例えばロングライスについて少し掘り下げてみるなどすれば、海外の人の目から多少注目すべきところがあるのではないかと。

やスローフードなどは世界のトレンドでもあり、そういうことを取り上げることは非常によいと思った。

米を使っているいろいろなものを作るときに、世界の目から見ると、やはり、酒があるはずだ。酒について一切触れないのはなぜか。酒と言えれば関心の低い視聴者もグッと引き付けられると思う。なぜ、酒について取り上げなかったのか気になった。

- とてもよい番組だと思った。まず、ナビゲーターのエリカ・アンギアルさんというキャスティングが非常によく、彼女の日本への理解、愛情、それから新潟の方々との親密度がとてもよかった。それから、今回は、なぜ日本人は長寿なのかということ明らかにしていく番組と受け取った。その1つの秘密がこうじにあるということ。非常に説得力を持ったのは、こうじを扱う女性が高齢であるにもかかわらず肌がツヤツヤしていたことに驚いた。新潟の高齢の女性たちも、驚くほどみんな元気だ。それは説得力を持った展開なので、非常によかった。

ただ、米は糖質なので控えたいと考えている女性は、現代の日本でも多いと思う。野菜を食べたり、肉などを食べることはあるが、ご飯は控えめにするというのが一般的と理解している。それに対してこの番組が、そうではなくて「コレステロールを下げるのだ」ということをサラッと saying いて、その点はもう少し説明を加えたほうがよかったのではないか。

もともと日本人向けの番組なので、例えば、最後に米粉を使った料理が出てくるが、外国人には、少しハードルが高いと思った。海外で米粉はなかなか手に入らないのではないか。こうじがよいのだったら、こうじをどうやって手に入れたらいいのか、どういうふうに使ったらいいのかといったことがもう少し出てくるとわかりやすいのではないか。

- 米というものに対していろいろな角度から紹介しているのは、よくできていると思った。白米だけでなく、混ぜご飯にしたり、粉を使ったりという紹介は非常によかった。米食を主体としているアジアの訪日外国人は、最近では日本の米がおいしいと、お世辞でなくかなり本気で思っているようだ。これからG20も開催され、いろいろなところから賓客が来日して、世界中が注目するタイミングなので、このような番組をもう1回放送してもいいのではないか。

- 非常に興味深く見た。米からこうじ、みりんなど製造現場の機械化が進んでいる中で、数少ない手作りの現場をよく探して撮られていると思った。その一方で、手作りの現場が一般的ではなく、全体のボリュームからすると少し例外的な事項を取り上げていると疑問に思った。ただ、番組としてはとてもよいと思う。

科学的根拠についてもあまり多くなかったが、血糖値の表もわかりやすく、みりんなどは海外にも知られていないので、私自身もみりんがこんなに血糖値に影響していると知って興味深かった。料理に関しては、非常に伝統的なもので、日本人ですらほとんど知らない料理が多かったのではないかと思うので、おいしさがどこまで伝わるのかという疑問は感じた。

料理に加えて出演者も高齢の方ばかりなので、バランスがどうかと思ったところに米粉のレモンサブレが出て来て、少しバランスは取れたと感じ、こういうお米の使い

方もあるのかと思って、納得して見終わった。米粉が手に入りづらいという現状はあるだろうが、日本としても、米粉は古米からでもできるし、海外にも打って出ることができるものでもあると思うので、そういった部分では、この番組は外国人へのPRにもつながると思いながら見た。

- まず、非常に映像が美しくて素晴らしい。おいしそうで、すぐに食べてみたいと思った。何よりも米の撮り方が非常に美しく感動した。2点目は、キャスティングがよかった。エリカさんのナレーションとリポートが非常によく、彼女は日本文化に造詣が深いことから、インタビューが日本語でされる場合と、英語でされる場合があったが、英語で彼女が質問し、インタビューを受けた人が日本語で回答するという構成で、時間のロスもなく、違和感がなく非常にうまくまとめられていたと思う。

また、人物的にも非常に温かみのある方だった。そのことで新潟の女性たちとの会話もうまく引き出していたと思う。補足説明についても、例えば米のことで、「それは日本では一番ブランドが確立している米ですね」とか、「スーパーフードは、アメリカでも取り上げられています」など、非常にうまく説明されていたと思った。

のっぺい汁は、血糖値が下がるというのは非常に参考になったが、日本人でもあまり知らないメニューなので、例えば海外の方が和食レストランに行くと、のっぺい汁と注文しても、なかなか食べられないものだと思う。もう少し外国の方が、日本に行ったら食べてみようと思って食べることができる一般的なメニューのほうがよかったのではないかという気がした。

しかし総じて言えば、日本食への関心を外国で高めるのに効果的な番組であったと思う。

- 事前の説明で、「日本の最先端医療技術について伝えるウィークリー番組」とあり、おもしろい番組でとてもためになったが、最先端医療技術につながっているのかというのが少し気になるところだ。

米どころの新潟を取り上げたのは、よいと思う。ただ果たして、新潟はどの程度長寿と言えるのか。番組紹介の資料には、「メタボ率の低さでは全国トップクラスで4位」と書いてあるが、長寿とうたった場合に直接的につながるのか。新潟と聞くと私の印象では、例えば高血圧が多いとか、酒の消費量も多いなど、それなりに何か弊害があったりするのではないか。新潟と長寿がどれくらい関係性があるものなのか知りたいと思った。

「レジスタントプロテイン」という言葉が出てきた。糖は消化しにくい、しやすいというのがあることがわかっているが、たんぱく質でレジスタントというのがどういうことなのか、よくわからなかった。こうした点を視聴者にわかりやすくしたほうが良いと思う。例えばお肉などに入っているたんぱく質とはどう違うものか、といった説明があってもよいのではと思った。

- エリカさんはダイエットに関する本を書いており、「糖質オフ」、「炭水化物抜きダイエット」、「抗糖化」などについて書いている。最近ではあまり炭水化物を抜くのはよくないのではないかという情報が交錯しているので、どちらなのかと思いながら見たが、「米はこんなに効果がある」という説明だった。その前提をもう少し説明してほしい

かった。答えが出ていないのかもしれないが、もう少し丁寧に説明があると、最先端医療技術について明確に伝えることができたのではないか。本当にそうなのかということに引っかかりながら見てしまい、気になった。

- いい点としては、科学と暮らしとをリンクさせようという努力が感じられ、より多くの人々が納得できるような工夫をしている点だ。ただ科学とは何かという視点で考えたときに、「医学」の中には「基礎医学」と「臨床医学」と「社会医学」というのがある。基礎医学と臨床医学のデータはとてもよく出ていた。ところが社会医学的な側面は非常に弱いと思った。例えば「米の収穫量日本一」ということと、「米の1人あたりの摂取量日本一」ということとは、必ずしも同じではない。そのことへの切り込みがなかった。

それから、「肥満度が低い」、「メタボ率も低い」というデータがあったが、新潟県のほかの疫学的データについては、脳血管疾患の死亡率を見ると、全国平均が10万対105ぐらいであるのに対して、新潟は147と全国平均より高い。また、心臓病の死亡率も全国が127ぐらいであるのに対して、141ぐらいと高い。先ほどの平均寿命については、男性が24位、女性が11位だ。病院や人の世話にならずに日常生活を送れる指標である「健康長寿」のデータを見ると、男性が10位で女性が11位。こうしたもろもろの社会医学的データを見ると、何か「長寿」に適合しないものがある。このような疫学的な情報というのをもう少し丁寧に調べたらどうかと感じた。

自然科学的なデータをもとにした科学だけを番組の中で紹介するのは注意したほうがいいと思う。

次回、また地域を選んで特集番組を制作する際は、その県の公衆衛生か疫学の専門家に背景の情報を聞いておくと、今回のような疑問は生じないで済むのではないか。

- 米というテーマについては、世界からも注目度が高いのでよいが、なぜ新潟なのかということについて、少し説得力が足りなかったかもしれない。実は北海道が今、米で注目されているので、こちらを取り上げる方法もあったのではないかという気がする。

最後に、こうじや米、みりんというのは、日本の食文化を伝えるのにメッセージ性としては非常に有意義なファクターなので、今後、世界で注目されている和食を国際放送で放送するときには、著名な料理人やよく知られた素材、有名店など、日本の食文化をメッセージとして伝えられるようなものを出すと、日本の和食の価値がもっと世界に広がるのではないか。

(NHK側) 考えさせられる指摘がいくつかあった。まず、米や米粉が実際に海外で入手できるかどうかというところだが、エリカさんの意見を一つの参考にした。エリカさんはオーストラリアの伝統医薬学会のメンバーなので、海外でもいろいろなスーパーフードの講演をされている。アジアやアフリカなどでは入手が難しいところはあると思うが、NHKワールド JAPAN が力を入れている英語圏の方であれば、例えば、米と聞いたときに実際に手に入るかどうかは、大手ネット通販会社等で売られているかを調べることができる。外国でも手に入るような食材をできるだけ使うように心がけて

いるが、入手できない国や地域もあるかもしれない。米についても、エリカさんが活躍している現場というのは健康に強い関心がある人たちが多く、そういう人たちの中では、非常に注目度がある。甘酒もニューヨークで、いまスムージーになって売られているという例もあり、注目が集まっている。日本のスーパーフードに対しては、今とても関心が高く、米はいいテーマではないかというエリカさんの意見も考慮した。

確かに現在、糖質制限ダイエットがはやっていて、米をたくさん食べるのと太るのではないかとされている。

番組としては、「米が含むいくつかの成分の中には、食べ過ぎたら太ってしまうものもあるが、健康に資するこういう成分がある」ということを伝えたかった。エリカさんは、炭水化物も脂肪も野菜も、すべてバランスよく食べるのが美と健康にはいいというスタンスだったので、その視点から言うと、排除するものではないと考えて扱うことにした。

「なぜ酒が出て来なかったのか」という点だが、米、こうじ、みりんに関しては注目されている先生などがおられるが、酒が健康に良いというはっきりとした科学的根拠を見つけることができなかつたので、今回は取り上げなかつた。

新潟県の社会医学的なデータについては、私たちが把握しており、平均寿命や健康寿命が他地域と比較して必ずしも長くないことは把握していた。寒い地域は特に塩分摂取量が多いこともあり、データのあまりよい数値ではなかつたが、風景の美しさ、地元の人たちの魅力、料理など日本の伝統を伝えられる現場があるという点で、今回は新潟を舞台として展開しようとして総合的に判断した。しかし、今後は頂いた指摘も参考に、検討していきたい。

#### < 「Ask the Doctor」 Stress Management #1～#4

(12月25日(火)、26日(水)、27日(木)、28日(金)、

各13:10 ほか) について>

- 50年続く長寿番組とのことで、すばらしいと思う。しかしあえて言うと、演出が少し古く感じた。内容は非常に初歩的なもので、時代はこの50年の間にどんどん移り変わっている。

1つの例として、「ストレスというのは職場と家庭とのギャップがある」というのは、確かにそうだと思う。「外で働く男性、家で待っている女性」というようなのはもちろん今も世界に多くあると思うが、同時に、ストレスというのいろいろな性質が変わってきていると思う。いまや女性の多くが外で仕事をしている。あるいは人生100歳時代になり、高齢化してもみんなが働き続けるなど、ストレスを感じる場面というの、日本を含めて世界で変わりつつあるだろう。

この長寿番組をさらにこれから続けようというのであれば、新しい時代の流れや、世界の流れに対応したような革新的で新しいテーマと切り口を、これから先考えていくのも重要なのではないかな。



- 国内放送として作られた番組を国際放送に、という点が1つのポイントになると思う。「Ask the Doctor」という非常にいいタイトルで、専門家の先生に来てもらって説明してもらって日本人向けのような気もするが、外国の方の受け止めは果たしてどうなのだろうか。もう少しわかりやすいアプローチのしかたや、先生にいろいろ教えてもらうということではない方向など、国内向けとは別に国際放送用番組として作り直す場合に重要かと思う。ただ、日本は健康を重視している人々が多く、そうした意識の高まりは非常に重要なので、このような番組を通じて、海外へ発信していくことは非常によいと思った。
- 医療番組としてはかなりストレートな構成で、内容的には可もなく不可もなく、淡々とした番組だと受け止めた。

気になったのは、この番組をNHKワールド JAPANで取り上げる必要があるのかということだ。内容的なことや見せ方の問題かもしれないが、その辺りが疑問点として残った。
- 10分でサラッと見られるというのは非常に軽くていいと思ったが、少し違和感があった。先ほどの古いという意見に納得した。瞑想などは確かに座ったままでもできることだが、多種多様なものがインターネットにつながり、相互に情報をやりとりできるような時代に、何もなくてもできるというのも大事だが、若い世代を取り込むにはどうかと思った。テクノロジーは日本よりも海外のほうが進んでいることを考えると、もっとおもしろくできる可能性はあると思った。
- 「ストレス・マネジメント」については国内外でも大変関心が高いので、参考になりおもしろかったが、例えば瞑想の部分が延々と続いており、インターネットで見ている方や外国から見ている方は、ずっとこれを見てくれるだろうかと感じた。以前視聴した「ガッテン！」の英語版に比べて、今回はスタジオで紹介する情報もすべて英語になっていたので、国際放送用に手を加えて提供しているという努力が見えて、好感を持った。

「マインドフルネス」はいろいろなところで、特に国際的な企業が最近積極的に取り上げているということも聞いており、国際的にも流行しているものを捉えたと思った。しかし、瞑想しているところを視聴者がずっと見ている形ではないほうがいいのではないかと感じた。
- 細かいことなのかもしれないが、「Ask the Doctor」と言われると、視聴者としては、何となく医療・健康に関して医師 (Medical Doctor) に聞く番組かと思う。しかし、解説の出演者について、「Prof. (教授) 氏名 Ph. D. (博士号)」という肩書で紹介されていた。出演者が、Medical Doctorかどうかわかりづらかったので、両者を混同しないよう、きちんと伝えていくのも大事ではないか。
- 元となる「きょうの健康」がどうなのかと考えた。英語化ということよりも、50年続いていて、古く感じるという意見もあったが、情報が新鮮に見えないと感じる。内容はよいのだと思うが、古い情報に見えてしまうということがある。このまま国際

放送として放送し、「日本って古い国」と何となく見られてしまう可能性があり、よくないと思った。演出を変えない理由は何なのか。

先ほどのエリカさんが出ている番組だと、番組の演出自体が新しいので新鮮な情報に聞こえるが、見せ方が全然違う。同じようにやっても情報が新しく見えたり、古く見えてしまったりするというのが気になった。

- あまり「Ask the Doctor」という感じが出ていなかった気がする。「きょうの健康」のほうがフィットしている。「Ask the Doctor」というと、問題を抱えている人が来て、教科書にないような困った質問をドクターにして、ドクターがあらかじめ用意した答えを言うのではなく、その困った質問に対して柔軟に答えるというのが「Ask the Doctor」というタイトルから感じ取れるイメージだ。その点、タイトルも少し検討したほうがいいと感じた。

日本語の番組を作るときに国際化を意識すべきかどうか。あくまでも日本人対象の番組として番組を制作し、英語化するのか。あるいは日本語版を作るときに英語化を意識すべきなのかという辺りは重要ではないか。

- (NHK側) 「きょうの健康」を国際放送で戦略的に進めることにした理由は、特に中国を中心としたアジア地域から日本の医療技術への注目が高まっているということがある。国内で定評のあるこの番組を、世界の人たちにどう見てもらえるのだろうか、ということから始めてみたのだが、実際のところ、海外の番組視聴モニターからの反応は悪くなかった。演出が古いなどのマイナス評価はほとんどなかった。

また先述の理由から、中国語版のVODを公開しているほか、ラジオ国際放送でも、複数の言語での展開を計画している。多角的に展開することをあらかじめ考慮して、元の番組のシンプルに情報を伝える演出をそのまま生かすという判断をした。

- (NHK側) 「きょうの健康」は、安心、頼れる、確かな情報というコンセプトで、とにかく信頼できる情報を大事にしている。さまざまなトピックがあるが、確実な医学的根拠に基づいて言えること、この番組を見れば確実なことを言っているというような安心感を持ってみていただけることを大事にしている番組だ。実際の視聴者の年齢層も高齢の方が多いので、テンポも含めて、そういった方たちにも見やすく作って来たという事情はある。

日本の医療情報というのはやはりニーズがあると思うので外国の方や若い世代に見てもらおうことを考えると、工夫の余地はあるかもしれない。

国際放送用に作り変えているいろいろな方に見ていただくと、国内放送のファンだけでなく、それ以外の方にも見てもらえる機会が増えるので、そういう意味では今後いろいろな意見を演出にも生かし、工夫を重ねていきたい。

- 日本人にとって確かであるという医学的根拠が、例えばベトナム人にとっても確かな根拠であるということが言えるのか。そのチェックはしているのか。

(NHK側) 国内と海外の基準の違いについては、十分に考慮して番組制作を行っている。高血圧や糖尿病の基準1つとっても、国内と世界で同じかという、決してそうではない。だから、国際放送版にするときは、世界標準の取材もし、確実なことが言えない場合には、これはあくまで日本では、というように注釈を付けるなど、その切り分けやチェックについては慎重に判断し、放送でも明確にしている。

## 2019年5月 国際放送番組審議会

2019年5月のNHK国際放送番組審議会（第658回）は21日（火）NHK放送センターで9人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず最近の国際放送の動きについて説明があり、意見交換を行った。引き続き、「Emperor Akihito Part 1: Crown Prince of a Defeated Nation」、「NHK NEWSLINE」について説明があり、意見交換を行った。最後に国際放送番組の放送番組モニターと視聴者意向の報告資料を配付し、会議を終了した。

### (出席委員)

委員長	大西 洋	(日本空港ビルデング(株) 取締役副社長執行役員)
副委員長	神馬 征峰	(東京大学大学院医学系研究科 教授・国際地域保健学教室)
委員	岡田 亜弥	(名古屋大学大学院国際開発研究科 教授)
委員	鎌田由美子	(株) ONE・GLOCAL 代表取締役、クリエイティブ・ディレクター)
委員	河合祥一郎	(東京大学大学院総合文化研究科 教授)
委員	木山 啓子	(特定非営利活動法人 ジェン 理事・事務局長)
委員	河野 雅治	(日本国政府代表・中東和平担当特使)
委員	田中浩一郎	(慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科 教授、 (一財)日本エネルギー経済研究所理事 兼 中東研究センター長)
委員	平子 裕志	(全日本空輸(株) 代表取締役社長)

### (主な発言)

#### <最近の国際放送の動きについて>

- 中国語ネットチャンネル「NHK華語視界」の6月の番組編成について報告があったが、1月にスタートしてから、現在までの状況を伺いたい。

(NHK側) 毎日、どの国からこのネットチャンネルにアクセスがあるかを調べている。今のところ、アクセス数自体は開始時点からそれほど大きく増えているわけではない。6月10日からは中国のSNSに開設したNHKの公式アカウントに、投稿を始める予定だ。今まで私たちの持っているSNSではほとんど中国本土には発信できていなかったもので、中国のSNSを介してプロモーションを進め、より多くの方にアクセスしてもらうことを目指していく。

< 「Emperor Akihito Part 1: Crown Prince of a Defeated Nation」  
(4月28日(日) 8:10 ほか) について >

- この番組が3回シリーズのうちの第1回なので、シリーズ全体で天皇をどう描いていくのかが見えない。

番組に出てきた訳語の“monarch”に少し抵抗を感じた。“Constitution monarchy”には「立憲君主制」という訳語が与えられていて、イギリスにおいてはそれが成立すると思うが、日本の場合はイギリスにおける王様とは異なり、象徴天皇と定められているので、立場が非常に微妙だ。このことを考えたときに、この“monarch”には少し疑問を感じた。
- 上皇様が19歳の皇太子時代に訪英することに対してイギリスで反対運動があったことが描かれていた。その反対運動をした人たちが今、どのように感じているのかを知りたいと思った。上皇様を好意的に受け止める日本人が多いのかもしれないが、世界中のすべての人が同じように考えているわけではないかもしれない。当時、訪英に反対したイギリス人たちは、上皇様がこんなにすてきな人なんだと番組内で描かれると、かえって抵抗感を持つのではないかと心配した。
- これだけ貴重な映像を持っていることに感動した。やはりNHKはすごい映像を所有していると思った。初めて見る映像が多く、大変興味深かった。同時に、そういった映像を保存して後世に伝えていくメディアの役割を実感した。

その一方で、80歳を超えてもお二人であれだけ高温多湿な国々へ慰霊の旅を行われて、一般の人間にはできない努力をなさっておられる。それが日本国民の心を打っている。しかし、その旅は、この第1話にある「子どもの頃に敗戦を経験した、涙が落ちてきた」という感傷的な動機だけではないと思う。どれだけ多くの方がどれだけ悲惨な状態で死んでいったのかを感じているからこそ、80歳になっても、とことんまで慰霊の旅を続けられたのではないか。その点が伝わってこなかった。

転々と疎開したとか、学友からのコメントもたくさんあったが、少年時代に神格化されていた父がそうではないとされた。その大きな点が本当は第1話でもっと伝えてほしい部分だったのではないか。
- 時代が替わる節目に、非常に注目を集めるテーマだ。これをNHKワールド JAPANで放送したのはいい試みだ。象徴天皇としてのお役目を30年間果たされた上皇様がどういう方だったかは、日本人のみならず世界の人も興味を持っていたのではないか。

小学生のときはコミュニケーションがうまくなかったとの証言があるが、外国人女性の家庭教師、エリザベス・ヴァイニングさんがついたあたりからどんどん変わっていく。そしてエリザベス女王の戴冠式に出席し、海外を見聞し、大きく成長されたところでちょうど第1話は終わっている。結婚も考えるようになって、とても人間的な様子が描かれていて、非常によかった。このあと第2話、第3話につながっていくので、全部見るのができたらよかったのだろうが、それを予感させるような第1話だったと思う。

だが第1話だけで73分あり、少し長いと感じた。日本人は皇室には非常に親しみがあるので、この時間は耐えられるが、外国人視聴者にとって73分は適切な時間配分なのだろうか。もう少し短い時間で同じ内容を描けたのではないか。

- 印象に残ったのは、上皇様自身は戦争がないときを知らずに育ったと語るところだ。世間をあまり知ることができなかつた中で幼少期を育った上皇様が、さまざまな経緯を踏まえて成長していくところを描いているのがおもしろい。極めつけは、19歳の頃にイギリスの戴冠式に出席する経緯を踏まえ、まさに人間としての天皇陛下が育つ経過を示したことだ。この点においては外国の人も共感し、平成の天皇は平和を追求する天皇だと理解できると思う。

ただし、この番組では、2011、2012年に当時の両陛下がご訪英されるエピソードを出しているが、この番組のエンディングは1998年にご訪英をされたところにするべきだ。あの時は、陛下が到着されて1日目、2日目は、イギリスの、特にタブロイド系メディアで批判が吹き荒れていた。戦争の責任を負っている天皇陛下をわれわれは遇していいのかと。そしてその時、太平洋戦争中に捕虜となった経験のある人々の一部がバッキンガム宮殿の馬車行列の一角を占めて、両陛下に対して全員で背を向ける。

しかし、非常にすばらしく、立派だったのは、両陛下はそれと正面から向き合ったことだ。デモ隊もいた。罵声を浴びせられる場面もあった。だが、そのときに真正面から向かって行く姿勢をイギリス国民は見た。驚くことに3日目以降のイギリスの論調がガラッと変わり、陛下を温かく迎えた。この1998年のご訪英を描くほうが理解しやすいストーリーになったのではないかと感じた。

- 大変興味深く見た。一連の退位・即位に関する報道は、海外でも大きく取り上げられ、世界の関心も高かったと聞いている。NHKが英語でこういう番組を作ったことは、国際的にも意味があったのではないか。

戦時中の写真や映像がこんなに残っていることにまず感銘を受けて、さすがNHKだと思ったが、秘蔵写真や、その当時を知っている方々のインタビューを交えながら戦中戦後の様子を伝えた点も、非常に効果的だった。

私も、3部作全体を通してのこの番組の意図を理解し得たわけではないが、戦後史の中で上皇様が、“divine child”（神の子）と言われた時代から、人間となったことを受け止め、さらに象徴天皇をご自身で内在化していく、その過程を3部作を通して描いたのではないかと思う。その中で幼少期から成人になっていく、その過程を第1話で取り上げたことには意義があったと思うし、まさしく“divine child”から象徴天皇に向かって行くことに対して、ご自身が受け止め、そして変わっていく過程をうまく映像で捉えていた。

全体的には、知らなかったことがたくさんあり、大変勉強になった。

- この第1話だけで考えれば、11歳まで現人神の後継者として育てられた人物が、その後に象徴天皇としての地位に就く前提のもとで以前とは異なる教育を受けていく。その点でおもしろいと感じたし、今まで見たこともない映像もあったので非常に勉強になり、感銘も受けた。

イギリスとの関係、あるいはイギリス王室との関係が詳しく描かれているが、絶対

王政ではないイギリス王室との関係を描いたのは、非常にいいインパクトを与えていると思った。

全体として、長いと言えば長いですが、このような生い立ちでこういうふうに変わっていかれたことを示すうえでの要素は十分に盛り込まれていると思った。その点は評価したい。

- この番組を見て考えたことは、戦争を経験しない世代が平和に向けて取り組んでいくべき姿勢だ。上皇様は戦争を経験されて非常に強い平和への思いを持っている。それを維持する努力が第2話、第3話で出てくるのではないかと。私が知る限りでは、人びとのところに向いて現実を見て、平和が大事であることを伝えようとしている。

戦争の経験がない若い世代はどうやってその思いを引き継いでいけばいいのか。そこで与えられたメッセージは、現場を見ろということだ。戦争経験がなくても平和への思いを持ち続けるための方法を、戦後、上皇様が示されてきたのではないかと。そのあたりが3部でうまく描かれていれば、全体のストーリーが非常にわかりやすくなるのではないかと。

- 3回シリーズの第1話だけなので難しい部分はあるが、おそらくこの後、第2話、第3話で平成時代に上皇様がされたことが描かれたのではないかと。それから、戦争や戦後の悲慘さが描かれたときに、海外の方がどう感じるかが気になった。もちろん、あのような悲慘な部分が出てくるからこそ上皇様の当時の暮らしぶりや育ってきた環境がわかるので、逆に海外の方に伝わるのではないかとという気もする。

(NHK側) この企画は、上皇様が退位の気持ちのにじんだお言葉を述べられ、4月に退位をされる中、85年の歳月を、上皇后様とご一緒にどのように歩んでこられたのか。日本の戦前から戦後、高度成長があり、そして平成の時代を日本が歩んだ歴史と軌を一にするのではないかと、ということで、お二人の生涯を誕生から今に至るまで描いてみたいと企画した。

番組全体は4部構成になっており、国内では12月に第1話と第2話、3月に第3話と第4話を放送した。第1話は、上皇様の誕生から原点である10代までのエピソード、第2話は上皇后様とのご結婚から、沖縄への初めての訪問も含めて戦争の傷、国民と向き合い始めた皇太子時代の日々、第3話は平成の30年間、即位されてからの外国訪問、あるいは震災や災害に向き合われる中で象徴天皇としてのあり方を実践されていく日々を描いた。そして第4話は、上皇様とともに歩まれた上皇后様の道のりを、ご本人の視点で描いた。

この国内放送全4話のうちの第1話から第3話までを英語化して海外に発信した。第1話だけ見ていただくと、上皇様の全体像が伝えきれないところもあったかもしれないが、あくまでも原点を描きたかった。

もう1つは、上皇様は、上皇后様も含めて多くの国民の信頼を得ていた中で退位されたが、さまざまな経験、まわりの方の教育、自分に対する反対運動など、そのようなことと向き合う中でご自身の象徴としてのあり方を模索されてこられたのではないかと。そういう極めて人間味のある生涯を

歩まれてきたことを描くのが番組の趣旨だった。

(NHK側) 第2話では、イギリスの旅から帰って来て、その後、沖縄で大きなデモがあり、火炎びんを投げつけられる事件もあった。それらをどう受け止められたかを、上皇様の目線から描いてみようとした。

とても印象に残った侍従の方のことばがある。「たとえ反対があつたり目をそらされても目を合わせていく」。それが上皇様のスタイルであることが、沖縄の旅の時にあった。上皇様が汗をかきながら、反対している人、温かく迎えている人に関係なく目を合わせていく映像が見事に残っていた。今回、番組に携わり、戦争責任がどうか、社会現象としてどうか、社会から見てどうかではなく、上皇様から見てどういうものだったのかに心をはせながら番組を作った。

(NHK側) 指摘があつた“monarch”という表現だが、元の原稿に忠実でありながら、これを海外の人にわかるように、どの表現がいいだろうとかなり議論をした。英語の専門家と、こういう表現がいいのではないかと議論した。「象徴天皇制」は番組全体を通してだんだんと伝わってくる構成なので、「象徴」という言葉を早くから過剰に使うわけにはいかなかった。英語についてアドバイスをくれたイギリス人の専門家は日本語の忠実な訳もよくわかっていて、宮内庁の公式ホームページなども全部参照して、公式の会見の英訳があるものは可能なかぎりそれに忠実に従いながら検討した。そのうえで、“monarch”が伝わると判断した。

73分は長いとの指摘があつたが、番組モニターの意見の中にも、長くても最後まで見たという人もいれば、やはり長いのでせめて1時間以内にしてほしいという意見もあつた。委員の皆さんの貴重な意見を参考にしながら、より伝わりやすく正確な表現にするよう努めていきたい。

(NHK側) この番組は、2月下旬、ワシントンD. C. で開かれたアメリカ公共放送経営者会議の場で、250人の経営者を前にしてプレゼンした。番組のさわりを全部で10分ぐらいの動画も入れて紹介した。上皇様は、戦後、人格形成期においてアメリカとも関わりがあつた。そういう部分を紹介したが、アメリカの人たちもほとんど知らなかった。

また、去年の天皇誕生日前の記者会見で涙ぐむような形で、戦争のない時代を自分が送れたことは幸せに思うというようなことを言っておられ、その会見も1分半紹介したが、会場から拍手が沸き起こってきた。

海外の番組モニターも、世界との関わりが上皇様の皇太子時代にあつたというところに大きく反応している。

1年間、NHKワールド JAPANのオンデマンドで公開しているが、全3話のうち、今のところ最も世界からアクセスが多いのが第1話だ。

○ 昭和天皇が皇太子時代の上皇様にヴァイニングさんを家庭教師につけたのは、昭和天皇の希望があつたと番組の中で言っていたと思うが、なぜそういうことを思いつい



たのか、わかっている理由はあるか。

(NHK側) 『昭和天皇実録』の中に昭和天皇がご自身で選ばれたとの記述がある。昭和天皇が戦後、新憲法の中で皇室を新しい形にしなければならないとの思いを持っていたことは、さまざまな侍従等の証言があるので、その一環としてヴァイニングさんを選んだのではないかと推測する。

## <「NHK NEWSLINE」 特集番組 天皇即位関連

(5月1日(水) 10:10 ほか) について>

○ この番組がすばらしいのは生放送であることだ。当日の儀式の生中継を交えながらスタジオで進行しており、臨場感が非常に高かった。特に後半が非常に優れていた。スタジオ・キャスターの落ち着いた仕切りがとてもよかった。

番組の作りとして気をつけなければならない点は、客観性だ。理性的に事実を報道していかなければならない。今回報道すべきものとして、元号が変わることへの国民の異常ともいえる興奮がある。それに対してNHKは理性的に、客観的に伝えるべきだ。それが本当にきちんとできていたかどうか 중요하다。

スタジオ・キャスターの落ち着いた司会はとてもよかった。だが、例えば令和の異常な興奮を伝える各地の中継場面があったが、その報道のしかたに果たして今言ったような冷静な視点があったかどうか。

スタジオに招いていたコメンテーターは非常によかった。特に、ポートランド州立大学のケネス・ルオフ教授のコメントは非常によかった。ただ、彼のような教授がもう1人いてもよかったのではないか。例えばもう一人はイギリス人のコメンテーターを起用してもよかったかもしれない。

スタジオでは職員の日本人エグゼクティブ・プロデューサーが説明して、アメリカ人2人のゲストにコメントをもらうスタイルだったが、この日本人のかわりにNHKワールド JAPANの中に例えばアメリカ人やイギリス人で同じような立場に立てる人はいないのかとは思った。

最後に1点、まが玉と鏡と剣に関する説明は、非常にわかりやすくコンパクトでもよかった。

○ 大変興味深く見た。スタジオ・トークと、儀式の生中継とがうまく組み合わせられていてバランスもよかった。外国人視聴者は日本人の元号に対する気持ちはなかなか理解できないので、新しい元号が発表されたことに対する日本の各地の反応を映像で説明していたのはよかった。それについても、スタジオ・ゲストがうまく解説していてよかった。一連の儀式が、日本の文化や伝統、歴史を海外の方が理解する非常にいい契機になったのではないか。

新しい時代が始まることの意味合い、それから今後どういう時代にしていきたいと日本人が考えているかを、いろいろな角度で取り上げたこともよかった。

2つの儀式を生中継で取り上げていたが、若干長いのではないか。新天皇および侍

従が退室されてから、宮内庁の方が「これで終わります」と言うところまでずっと映していたが、新天皇および侍従が退室されたところで打ち切ってもよかったのではないかな。

今までは女性が参加することは許されなかった「剣璽等承継の儀」に、唯一の女性閣僚である片山大臣だけが初めて参加している。しかし女性皇族は許されていない。そのことを説明していたのはよかった。

ちょっと気になったのが新天皇と新皇后の婚約のときの記者会見で、新天皇が「全力でお守りします」と話された映像が流れたが、「全力で」の訳が“with my full power”と出ていた。“power”は権力を表すので、象徴天皇であるはずなのに為政者として権力を使って守りますと言っているように感じられる。これは少し違和感があった。“I will do my best”のほうが、おそらくご本人が意図されたところに近いのではないかな。

- ライブ放送したことが本当によかった。こうした機会だからこそ天皇や天皇制にまつわることを掘り下げて伝えるのはいい。

キャスターの質問も中身を引き出すものになっていたと思うのでとてもよかった。ただ、改善の余地があるとすれば、ゲストからのコメントを受けてキャスターがさらに突っ込んで質問をすると、より深い話が聞けたのではないかな。やりとりが1往復で終わっていたのがもったいないと思った。

儀式は確かに長いと感じた。沈黙がずっと続いているので、それを補うような説明的なテロップがあったら、さらに興味を継続しながら見ることができたとと思う。

- 外国人が非常に興味を持つのは、儀式そのものだと思う。日本独特の伝統や文化が示される儀式を見た外国人は、その簡素さや静かさに驚くだろう。特に「剣璽等承継の儀」には、歌舞音曲がなく、これが日本なのかと感じるはずだ。そういう印象を外国人に強く与えた点でよかったのではないかな。

一方、外国人から見て、あまりインパクトがないと思うことが元号だ。日本人は大いに盛り上がったが、「令和、それがどうした」と感じる外国人もいるのではないかな。

新しい天皇陛下のあり方について、国民との距離を近くする、それから国際社会の中での役割を果たすといった話があった。また、全力で皇后を守るという話は、“Gender equality”（男女同権）のことだと、外国人には違和感のない話だと思う。国際交流を進めます、女性を大切にします、国民と一緒に、というのは、言ってみればよくある話だから、そこは外国にはあまりインパクトはないのではないかなと思った。

外国人が見て違和感を持つかもしれないのは、女性皇族の話だ。女性皇族のあり方は、日本はこういう問題を抱えているのだとジャーナリズムの観点から取り上げていいテーマだと思うし、それは国際的にも興味を引く課題だろうと思う。

- 確かに「令和」に関して日本人は騒いでいたが、外国人や外国人記者と話をすると、別に彼らは関心がなく、要は新天皇がどのような人物であるかがもっぱらの関心の対象だった。

新しい天皇が留学経験もあること、皇后様も外交官だったこと、国際的な視野を持

っていることを明示的に知らせるような番組構成になっていたのはとてもよかった。

皇后様の病状について、世界のどの国でも適応障害の治療を受けている人はいると思うので、隠すことなく言及したのも、自然でよかったと思う。

- 生中継とスタジオ・トークを交互にした構成は斬新でよかった。

日本人も知らない様々な事柄をわかりやすく取り上げていたし、若い世代がこんなに関心を持って皇室や象徴天皇のことについて盛り上がっている状況を取り上げていたのは、よかった。しかし、やはり少し長いと感じた。カットできる要素もあったのではないかな。

伊勢神宮は、日本人はわかるが、外国の人にはわかるのかが疑問だ。三種の神器をそこまでちゃんと説明するのであれば、伊勢神宮についても、ひと言あってもよかったと思う。

- 何よりも儀式を生中継した果敢な取り組みに敬意を表したい。非常によかったと思う。こういう儀式は、日本人でさえ初めて見る人が多いと思う。

女性閣僚の片山大臣が出ていたものの、女性の皇族はいなかったことに対して、女性皇族が参加できない理由に対するスタジオ・ゲストの発言がなかった。

新天皇への期待を各コメンテーターが語っていた点や、海外の反応も、視聴者にはよかったと思う。

- これはライブで放送されたものだが、これをライブで見ると、ライブを後日、録画で見るとでは緊張感が違うと感じた。ライブの場合はおそらく次に何がくるのだろうと期待に胸がふくらみ、飽きることは全然ないと思ったが、録画で見ると、少し長く感じる。だからこれをある程度短くしながらライブ感も出るような工夫が必要かと思った。

- スタジオ・トークはキャスターがうまく導いたと思う。元号と天皇との関係からスタートして、いいタイミングでスタジオが入って、あれだけ内容のある議論が展開したのが、今回の成功のカギだった気がする。

(NHK側) 天皇の退位・即位という大変貴重な機会なので、これを世界の皆さんにリアルタイムで伝えることが必要だと考えて生放送にした。非常に難しかったのは、日本人に向けて発信する場合には日本人の知識と情報量を前提として番組を構成していくことになるが、今回は何も知らない海外の方に伝えるので、一から組み立てる作業が必要だった。そこで儀式の内容などいろいろなことについて丁寧に伝えよう、と準備をしてきた。

女性皇族のあり方については、この放送の後のニュース番組の中では独立した項目としてお伝えした。番組へのアクセスも多く、海外の皆さんは男性皇族の数が減っている状況について興味があることが、改めてわかった。

(NHK側) 16人いる皇族のうち13人が女性で、政府もこの後引き続き、女性皇

族について議論をしようとしていることを示すパートを用意していたものの、時間的制約によって入れられなくなった。この番組をご覧になった方に伝えるべき重要な要素だったことは、委員の皆さんが指摘されたとおりだ。

“power” や “monarch” といった訳語について意見が出たが、日本の皇室の置かれている特殊な状況、憲法や皇室典範などについて、カナダ人のネイティブの方と議論を重ねながら、どういう表現がいちばん適切で伝わりやすいかを考えたが、世界の人に伝えていく難しさも実感した。

(NHK側) チームで議論を重ねて当日を迎えたが、とにかく丁寧に、そして冷静に、客観的に伝えることを肝に銘じた。

(NHK側) 日本で起きているイベントに関する放送のうち、世界の視聴者の方にNHKワールド JAPANを選んでいただきたいというのが、われわれの基本的な思いだ。ずっと生放送しているときも、BBCやCNNなど海外の放送局がどういう伝え方をしているのかを注視しながら、より一歩踏み込んでやれないかと考えながらやっていた。今回はそういう努力の成果を世界に示す絶好のタイミングだったと思っている。

また、今後G20サミットや東京オリンピック・パラリンピックなど日本に注目が集まるときだからこそ、NHKワールド JAPANを世界70億人に知ってもらう絶好のタイミングと捉えて努力していきたい。

## 2019年4月 国際放送番組審議会

2019年4月のNHK国際放送番組審議会（第657回）は16日（火）NHK放送センターで10人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず最近の国際放送の動きについて説明があり、意見交換を行った。引き続き、「A Vanished Dream: Wartime Story of My Grandfather」、「GATTEN! Bring Down Your Blood Sugar!」について説明があり、意見交換を行った。最後に国際放送番組の放送番組モニターと視聴者意向の報告資料を配付し、会議を終了した。

### (出席委員)

委員長	大西 洋	(日本空港ビルデング(株) 取締役副社長執行役員)
副委員長	神馬 征峰	(東京大学大学院医学系研究科 教授・国際地域保健学教室)
委員	岡田 亜弥	(名古屋大学大学院国際開発研究科 教授)
委員	鎌田由美子	(株) ONE・GLOCAL 代表取締役、クリエイティブ・ディレクター)
委員	河合祥一郎	(東京大学大学院総合文化研究科 教授)
委員	木山 啓子	(特定非営利活動法人 ジェン 理事・事務局長)
委員	河野 雅治	(日本国政府代表・中東和平担当特使)
委員	佐藤可土和	(クリエイティブディレクター、(株)サムライ 代表取締役)
委員	田中浩一郎	(慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科 教授、 (一財)日本エネルギー経済研究所理事 兼 中東研究センター長)
委員	平子 裕志	(全日本空輸(株) 代表取締役社長)

### (主な発言)

#### < 「A Vanished Dream: Wartime Story of My Grandfather」

(3月16日(土) 10:10 ほか) について>

○ とても質の高い番組だ。こういう番組をぜひまた作ってほしい。この番組の良いところは3点ある。

1つ目は題材。報道写真家のレジーナ・ブーンさんのお父さんがアフリカ系アメリカ人ジャーナリストの草分けで、アフリカ系アメリカ人の人権運動に関わっていた。そのお父さんの父親は日本人で、太平洋戦争当時の日本人が、タイトルにもあるようにアメリカンドリームを奪われてしまった。そして、レジーナさんが祖父の出身国である日本でルーツ探しをする。NHKが情報提供を呼びかけたところ、写真が手がかりになり、祖父の親戚が見つかった。これは本当によく見つかったと思う。これをきちんと伝えられたところが非常によかった。

2つ目は登場人物だ。レジーナさんの話を聞いていると、彼女の顔の様子や話し方に少し日本人を思わせるところがあり、祖父が日本人であれば、そういう感じになるのかと思わせるところもある。レジーナさんが語り、祖父の親戚と出会い、感動して

涙を流す。そうした一連の物語がきちんと構成されている。単にアフリカ系アメリカ人の話ではなく、日系人の話でもなく、これは人間すべての問題なのだと語るレジーナさんの言葉が胸に訴える展開になっていることが、この作品のよさだと思う。

3つ目は番組の構成が非常によかった。報道写真家としての彼女に焦点を当てて、様々な人々に人間性豊かにアプローチしていく。犬に対してさえ、ある種親しみを感じさせるようなアプローチをしていく。NHKが彼女のことを放送で伝えたことがきっかけで日本で祖父の親戚が見つかる番組の展開は、すばらしく感動的によかった。

- とてもよくできた番組だ。戦時中に抑留された日系人、または日本人の話は、NHKの国内放送でも国際放送でも数多く放送されてきたと思うが、今回の番組はひねりがある。なかなか得難い人材を主人公に選択したと思う。日系アメリカ人であり、アフリカ系であり、女性で、フォトジャーナリストという人はなかなかいないのではないかな。

だから、何度も放送されてきたかもしれない題材でもとても新鮮な形で描かれ、番組の展開も秘密を解き明かしていくミステリーのような感じだった。様々な場所に行き、情報を集め、アメリカの公文書館も訪れて資料を発掘して、謎解きに一步一步迫っていく構成はとても印象的だった。最後に日本にまでやって来る展開もいい意味での驚きだった。

家族と離れ離れになり命を落とした人間の悲劇をうまくまとめていたと思う。

ここまで良くできていると、今後同じような日系アメリカ人や日本人の抑留の話を取り上げる際、これを超えるものを作るのはなかなか難しいのではないかなと思うほどだった。

- やはり題材がよい。これまでも何度か、日系アメリカ人の悲劇を描いた番組を見て、その度に胸がつぶれる思いがしたが、こういう背景の人がいたとは驚きだ。現代社会における多様性の問題に思いを及ぼせる描き方がされていて非常によかった。外国人だけでなく、日本人にもぜひ見てもらいたいと思った。

取材チームはいつからこのレジーナさんを知っていたのか。

細かい点を指摘すると、映像では口が動いているのに音声が無音で途中で切れているところがあったが、そこは音声を切らずに発言をもっと聞きたいと思った。

- 2月の番組審議会で見聞交換した番組「MANZANAR REVEALED」に少し似ていると思ったが、今回の番組は展開が非常にわかりやすく、秘密を解き明かすようなテンポのよさは、本当によくできていると思った。

タイトルが「A Vanished Dream」である意味が一瞬わかりづらかった。主人公の祖父である宮崎鶴寿さんの夢があって、それに対して息子、それから孫のレジーナさんが、最後に日本でルーツを突き止めるまで行き着いたわけなので、果たして「A Vanished Dream」がこの中身を適切に表しているタイトルなのだろうか。そういう疑問があるので、制作の意図を聞きたい。

- 非常に魅力的な番組だと思った。レジーナさんの魅力が全体に一貫して通っていると思った。特にすばらしいと思ったのが対比だ。戦争の悲しい過去もあるが、これが

絆や未来につながっているという対比、そしてまたボロボロになりながら持っていた写真と、ボロボロになりながら戦争をくぐり抜けて日本の仏壇の前に置かれた写真との対比など、様々な対比が上手に組み合わせられていて、異国で生活をして生きた足跡を残していった人たちの苦勞を感じる事ができた。

- この番組は、私たちはどこから来てどこに行くのか、もしくは、自分は何者なのかという人間の誰もが本質的に持っている疑問に訴えるメッセージになっていることが本当にすばらしいと思った。

どうやってこのような題材を見つけるのか、また、どのようにリサーチしているのか。

- 非常に優れた番組だと感動しながら見た。個人のルーツ探しを縦軸にその周辺のアメリカのその時代の問題を掘り下げていく意味で、非常によくできた番組だと思った。

レジーナさんは日系とアフリカ系、両方の先祖がいるのだが、人種の多様性を持ったアメリカならこのような人々はおそらくたくさんいるのではないかと思う。そういった中でアメリカの方にもぜひ見てもらいたい番組だ。

この番組の最後で、長崎に行き、お墓にも行くが、おそらく戦中から戦後に至って、アメリカのアフリカ系の人々が置かれていた時代状況も非常に厳しいものがあったと思う。敵性外国人とみなされた日本人として収容所に入れられて非常に苦勞されたストーリーとは別に、アフリカ系アメリカ人の、地域のコミュニティーでおそらく非常に困難な状況に置かれていたストーリーも一方にある。この家族はその両方を体験して来たと思う。そうであれば、アフリカ系アメリカ人側のストーリーがもう少し語られていたら、さらに深い話を理解できたのではないかと思う。

- 2月に見た「MANZANAR REVEALED」によく似た題材だと思うが、よくこういう人を見つけたと思う。

この番組を見て非常に考えさせられたのだが、アメリカ人として生きていくことはそう楽な話ではない。ただアメリカで生まれればアメリカ人だという話ではなく、様々な背景を抱えた人がアメリカ人として生きていくためには、アメリカの中で努力していかなければならないことがこの番組ではよく出ていると思う。

しかし、レジーナさんは三世だが、今は四世や五世の時代だ。五世から六世になれば、自分のルーツが日本にあることはもはやほとんど関心がなくなる。だからアメリカ人も、日本人も、レジーナさんのような人がいることを今知っておくことは非常に重要だ。

レジーナさんがたどった道は、相当多くの人々がたどって行く。その結果、その人たちが日本人のルーツを知ったことをきっかけに日本とアメリカの関係を改めて考える。こうやって日本とアメリカとの関係が重要な位置付けにあるかを人々が知っていくことは、われわれ日本人としても非常に重要だと思う。

こういう番組ができるのは、1つはアメリカが、ものごとを記録に残しているからこそできるのだと思う。公文書館に行ったり、様々な形で自分のルーツを探り当てたりできるように、データをきちんと整備しておくことによってアメリカという国家のアイデンティティーを築き上げていることについても改めて感じた。

○ 漁師が船に乗って行く場面でレジーナさんが、おじいさんの船出がなかったら私はここにいなかったと語る。この言葉が若い人たちに非常に大きな勇気を与えてくれるのではないか。つまり勇気ある一歩を踏み出すこと。生きている間にその一歩の意味はわからないかもしれないが、50年後、100年後になってそれが世界を変える一歩となり得る。そんな強いメッセージを読み取れる番組であり、これは若い人に対して非常にインパクトの強い番組だと思った。

○ レジーナさんの涙を流す姿や笑顔が、本当は重い社会問題であるはずのことを、未来に向けて前向きに表現している点がこの番組をよく見せているのだと感じた。

レジーナさんは三世だが、四世、五世と、この後こういう人材がどんどんいなくなっていく意味では本当にいいタイミングで作ったと思うが、いつ頃からレジーナさんの取材を始めていたのか。

タイトルの「A Vanished Dream」は、私も少し気になった。

(NHK側) 最初にレジーナさんのことを知ったのは2017年の11月ぐらいだ。アメリカ南部の新聞の小さなインターネットの記事を友人が送ってくれた。著名なジャーナリストの娘で、本人も報道写真家であるレジーナさんという女性が自分の祖父が日本人だと知っていて、なんとか探したいと考えているということだった。直感が働いて、日本人がルーツなのだが、アフリカ系として生きてきた人が日本のルーツを探す手伝いをしたいと思った。

(NHK側) タイトルはアメリカの人にも見て納得してもらえるものを考えた。スタッフにアメリカ人のライターもいて、そういう人たちとも議論して決めた。とにかく短く、そしてわかりやすさを優先して決めた。

○ 「夢」が消されたのか、消えたのかといえば、自分の意思でなく消されたのだから「A Vanished Dream」では少し違和感があった。

○ レジーナさんが訴えかけているのは、単に自分のルーツを探したいとかそういう問題ではなくて、それ以上の問題であることがタイトルに反映されるとよかった。だから「Why I am here?」など、レジーナさんのアイデンティティーに関わるタイトルであればもう少しアピールできたと思う。

## < 「GATTEN ! Bring Down Your Blood Sugar !」

(3月16日(土) 8:10 ほか) について>

○ 「ガッテン！」はとて面白い番組なので、ぜひどんどん英語化するとよいと思う。この番組の良さは題材の良さにある。ただ、一番気になったのは、ゲストのトークのところだ。字幕を通して果たして英語のネイティブがどこまでついて行けるだろうか。字幕を見て、なぜ日本のゲストたちは笑っているのだろうか、そう思ってしまうよ



うな気がした。

どんどん英語化してもらいたい番組だが、英語化するにあたって、字幕を通さなくても訴えてくるような形にするといいいのではないかと思った。

- まず血糖値を下げるというテーマはタイムリーで、非常によかった。今、アメリカなどで肥満と糖尿病の問題は非常に深刻だが、アジアでも実は非常に深刻化している。インドでも健康上、非常に重大な問題になっている。だから、糖尿病の問題が深刻化しているアジア諸国で、ぜひ番組を広げていってほしい。英語のナレーションもスムーズで、わかりやすく、楽しく見られるようになっていてとても好感を持った。

気になったのは、パターンの図やチャートが出ていたが、ほとんどが日本語のままだった。漢字で説明しているパターンは日本語を解さない視聴者にはほとんどわからないと思う。

それからスタジオのやり取りが、たぶん早口だったからかもしれないが、全部訳し切れていない印象だった。要点だけが訳されていて、微妙なニュアンスがあまり伝わっていないのではないか。英語化するときの課題だろうが、特にこの番組の場合は情報量が多いので、そこは工夫が必要なのではないかと思った。

タイトルで「ガッテン」という日本語がどこまで、非日本語圏の方に理解してもらえるだろうか。日本語版ではもちろん親しみのあるタイトルではあるが、英語版では、ガッテンの意味をうまく反映した英語の短い言葉を代わりにつけるのもいいのではないかと思った。

- スタジオの楽しい雰囲気が映像では伝わってくるが、英語字幕ではちょっとわかりづらいのではないかと思った。もし自分が日本語を理解できずにこの番組を見ていたら、たぶん45分はもたない。録画して途中を飛ばして、血糖値を下げるスクワット運動の解説部分だけ見るのではないか。そう思うと、せっかくこの番組を英語化しているのもったいないと思う。スタジオトークの部分を一生懸命翻訳して伝える必要があるのか。意味が伝わるように翻訳しても、特におもしろいと思わないのではないかと感じた。

番組の題材はとてもいいと思うし、紹介していたスクワット運動を私も実際にやってみたりしたが、このまま45分の番組で続けることはあまり賛同できないと思った。

- 番組のテーマは血糖値でそれは肥満と同じ問題とはいえないが、海外の肥満の方はアジアでも、アメリカでも、今回テレビに出た人たちと肥満のレベルが違うように思う。その人たちがこのスクワット運動をやって効果が出るものなのか。もしどんな人でも効果があるのであれば、医療制度が整っていなくて病院へ行くととてもお金がかかってしまう海外の視聴者が、自宅でお金をかけずにこのような健康的なことができるので、画期的だと思った。

外国の視聴者がどう反応したのかを聞きたい。マグロやヒラメの筋肉の種類が赤と白とピンクで示されたところは子どもでもわかるような丁寧な映像だった。それについても海外の反応を知りたい。

- 番組冒頭で「ガッテン」の意味は“got it”だと字幕で説明しているのでよく見て

もらえばわかるかもしれないが、これから「ガッテン！」をもっと海外に広めていきたいのならば、やはりタイトルの「GATTEN！」は気になった。今回は血糖値を下げるのがテーマだが、これとは違うテーマで何回か放送するのだろうかから、そういった意味からすると、この「GATTEN！」というタイトルの持つ意味はよく吟味されたほうがいいのかもしいかなと思った。

この番組では、ゲストトークのシーンでは下に英語字幕が表示され、その一方でとも日本語だったナレーションは英語音声になっていた。果たして視聴者はそういった構成の番組を聞きやすいと感じるのだろうかと思いが湧いた。

ゲストトークが番組の主流を占める構成は、かなり日本的だ。日本の番組をよく知っている海外の視聴者なら、こういった番組もあると思うだろうが、よく知らない人は、これはどういう番組なのだろうかと思うのではないかな。

- この番組をどうやって海外の視聴者に見てもらおうのかが重要だから、英語字幕で提示するのはやめたほうがいいのかと思う。スタジオトークのところは、たぶんわからないだろう。わからないけれども聞き流す寛容な人もいるだろうし、何かわからないから少し不快に感じる人もいるだろう。トーク場面をきちんと訳すのは無理だと思う。明らかに日本人向けだと思うので、なるべく切るべきではないか。医学的、かつ実用的に非常に参考になることが多い内容なので、そういうところだけを凝縮した短い番組にしたほうがいいのかと思う。

- 血糖値を下げるというテーマはいい。数ある病気の中でも糖尿病はWHOを超えて国連すべての機関が取り組むべき課題とされているほど、世界的に重要な課題だ。

日本国内の放送から国際放送までのタイムラグがある点が気になった。このタイムラグの間に医学的な新たな発見などがあって情報が変わってくる可能性がある。例えば最近の話で言えば、この中に出てきたHbA1c、これは過去1～2か月の血糖値が高いかどうかを知る指標だが、これよりも別の指標のほうが糖尿病の診断には優れているという研究結果が今年の3月にアメリカの学会で発表されたばかりだ。そういうタイムラグがあった場合に、新しい医学情報をチェックすることも必要になるかもしれない。そのあたりは気を付けたほうがいいのかと思った。

もう1つ気になったのは、基本的な健康知識のレベルが国によって違う点だ。国による健康知識の違いを乗り越えた一般的な情報をどう確保していくかを、番組を作っていくときに気をつけなければならないのではないかな。

様々なジョークが出てくるが、日本の映画を海外で上映する時には、作品内のジョークを工夫をこらして英訳や吹き替えをしている気がするが、今回の番組くらいの字幕では、ジョークに対してゲストたちが笑っている理由が少し伝わりにくいと思った。

- もし「ガッテン！」を本当に世界に発信したいなら、もう一回番組の再構成が必要だと思う。「ガッテン」という日本語は、例えば「カワイイ」や「おもてなし」ほどは浸透しておらず、流行語にもなっていない。

しかし、番組を再構成することはたぶんコストも時間もかかることだと思う。NHKが持っている様々な優良なコンテンツの中で、本当にこの選択がよいのかと思った。

- オリジナルの日本語の番組はよく見ているのでおもしろいと思うし、非常に実用的な題材が出てくるので、これを海外に発信することには賛成だ。しかし、今回の番組の中で伝えたい重要情報の説明が字幕だったり、ナレーションだったりするので、45分の間、ずっと見ていないとたぶん取りこぼしがあるように感じた。ネットで見られる環境であれば、戻って見直すことができると思うが、ケーブルテレビや衛星放送で見ていると、ついて行けなくなってしまう。最後にまとめやおさらいがあるにしても、途中で見る意欲を失わせてしまうこともあるのではないかな。
- 新しく英語で作る番組と、もともと日本語で作られた番組を英語化するのでは、大きく違う。今回は、日本の食生活や健康、日本の長寿の背景など、そういうことを訴えようとしていたわけではなくて、この「ガッテン！」の持つよさをどう伝えるか、が焦点だったと思う。その意味では、日本での「ガッテン！」の良さがなかなか伝え切れてないのではないかなと感じた。

(NHK側) 指摘のとおり、「ガッテン！」を英語化するにあたって一番難しいのは、「ガッテン！」の良さであるスタジオトークの部分をどう表現するかだ。スタジオのやり取りは常にアドリブなので、どちらに行くか分からないドキドキ感を演出している。これをすべて英語に訳そうとすると、難しい。通常の英語化と手法を変えている部分もある。今回はスタジオトークの日本語を全部文字に起こしたうえで、どこを削れば躍動感に残しつつ、伝えるべきポイントは伝えられ、そしてオリジナル番組の味わいを残せるかを一つ一つ確認した。

45分番組のうちVTRが占めるのは10分程度しかない。あとはほとんどスタジオで説明している。そこが「ガッテン！」の特色だ。そこを損なってしまったら、スタジオ部分をもう1回撮り直すとか、別番組を作るしかない。今回はスタジオ部分の英語字幕をとにかく丁寧に作った。

「ガッテン！」は大きな図表を使ったり、模型に様々な日本語をベタベタ貼り付けて解説したりするところが売りの一つだ。それをどう英語化するかを考えた場合、日本語オリジナル版では7秒ぐらいしか映ってない図表を20数秒に延ばして、ポイントとなる項目を英語できちんと読み取れる時間を作ろうと考えた。スタジオ部分をできるだけ損なわない形でやってみた。

「ガッテン！」を単純に英語化するのが本当にいいのかと疑問に思う意見があったが、日本語版の「ガッテン！」にこだわって英語版にするのであれば、このやり方がよいのではないかなと思った。

「ガッテン」という言葉は確かに「カワイイ」などの日本語に比べると認知度の点でまだ遠く及ばないと思うが、ゆくゆくこの番組が海外で認識される時に、「ガッテン」という言葉とともに広がってくれればと思った。

海外のモニターの人からも、非常におもしろかった、ためになった、自分でもやってみようと思った、と意見をもらった。少なくとも「ガッテン！」の番組の意図は伝わっていると考えている。

タイムラグについては、確かに医療の世界は常に進歩しているので、情報がどんどん古くなっていくことは重々承知している。英語化にあたっては 2017 年度の下半期より前に放送された番組は対象にしておらず、日本国内の放送から 1 年数か月程度の新しいものを選んでいく。

(NHK側) 新しく英語番組を立ち上げるにはかなりの費用とマンパワーが要る。NHKワールド JAPAN には最初から英語で制作している「Medical Frontiers」もあるが、「きょうの健康」を「Ask the Doctor」のタイトルで英語化し、さらに中国語化もしている。「Medical Frontiers」のように一から立ち上げた英語番組と、日本語番組を英語化していく「きょうの健康」と「ガッテン！」とを組み合わせようと考えている。

○ 英語字幕を使わず、全部英語で吹き替える選択肢はとらなかったのか。

(NHK側) 番組すべてを英語に吹き替えることは想定しなかった。「ガッテン！」が持っている良さは、スタジオで台本なしでやり取りすることなので、その日本語をそのまま英語に吹き替えることは避けたいと考えた。

スタジオのどこを削ってよいのか、よくないのかについては、毎回翻訳者を交えて議論しつつ進めている。

スタジオパートをなくして別番組を作るのであれば、これほどの苦労はしなくて済むとは思いますが、「ガッテン！」を英語にして海外に発信するのであれば、今の状態がよいと思う。モニターの方々からも好評をいただいているため、今後も今回頂いた指摘や毎回寄せられるモニターの声に耳を傾けながら、鋭意努力していきたい。